法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-02

禅院方丈内の書院と庭園に関する考察

田中, 聡恭 / TANAKA, Sosuke

(発行年 / Year)
2011-03-24
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2011-03-24
(学位名 / Degree Name)
修士(工学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)

P377.5
H35-2
2010-36

2010 年度　修士論文

禅院方丈内の書院と庭園に関する考察

法政大学大学院
建設工学専攻（建築学領域）
高村研究室
09R5334　田中聡恭

主査　高村雅彦　教授
副査　陣内秀信　教授
　　富永譲　教授

-A study about Shoin-ma and the garden next to there at the Hojo in Zen temple-

ABSTRACT

This thesis clarifies the relationship between Shoin-ma, Abbot's room for drawing, and there garden at the Hojo, Zen residential architecture. And it also clarifies the trend of the design in there.

At first, it's studied the characteristics of the Shoin-ma and there garden by comparison with the south-court of the Hojo. With the plan and the cross section, it's considered how Shoin-ma and there garden compose by catching them as three dimensions. From stones and trees in the garden next to Shoin-ma, it's considered what the meaning they made with. And from the ornament in the Shoin-ma and the painting on a Fusuma, sliding door used to partition off in a Japanese house, it's studied what the meaning and the idea there is.
Next, catching of the background of the era, it's considered how the trend of the design in there changes.

In this paper, it's taken as objects of study that has been conserved completely or be able to restore with source books and previous studies.

To conclude, it is clarified that the garden next to Shoin-ma is designed as deep mountains and deep valleys. Until the middle of Muromachi period they have designed as a real mountain with real water and real pond. At the evening of Muromachi period, for example Daisen-in and Taizo-in, they have designed as virtual mountain, using "Mitate" which is a method of designing, with Karetaki, dried waterfall and Shirasuna, the white gravel meaning as water. From the Edo Period downward, the Hojo has been influenced from any culture outside Zen. But the garden next to Shoin-ma designed as deep mountains and deep valleys.

- 禅院方丈内の書院と庭園に関する考察 -

目次

序章 ―――― 4p
緒言
研究目的
研究方法
既往研究における本研究の位置づけ
言語定義
本論文で扱う資料の説明

第一章　方丈の発生とその建築的特徴 ―――― 11p
第一節　方丈の発生
第二節　方丈の建築的特徴とその用途
第三節　書院間の意匠と性格

第二章　書院間と庭園 ―――― 17p
第一節　書院間と庭園の空間構成
南禅院、西芳寺、等持院、天龍寺、龍安寺、大仙院、退蔵院、金地院、高桐院
第二節　書院間における建築細部の意匠
大仙院、金地院、高桐院
第三節　書院間における襖絵の画題

第三章　作庭表現の潮流 ―――― 70p
第一節　具象的山水への希求
第二節　山水表現における抽象レベルの飛躍
第三節　方丈の多様化と山水への執着

終章 ―――――――――――――――――――――――――――――――― 88p
結論
参考文献
謝辞

序章

0.0 緒言

我が日本国において『庭園』という概念は、遅くとも飛鳥時代には存在していたと言われている。当初は、現在のように誰でもそれを所有できるというわけではなく、位の高い人物のみ所有できたことであろうが、やはり現在と同じように住宅に隣接して作られたものであった。

時代は下り鎌倉時代になると、中国より持ち込まれた禅宗文化が繁栄し、寺院境内の住居空間にも庭園が作られるようになった。そして、この『方丈』と称される住居空間は南北で公私の使い分けが為され、そのそれぞれの空間に庭園が作られることとなった。しかしそれにも関わらず、白砂が敷かれた庭園空間が世界的にも珍しいためか、南側庭園の研究ばかりが先走りしている風潮が見られる。ということは、一般的にもそうだが、どうやら学術的にみても方丈の北庭というのはあまり着目されていないらしい。要するに、『褻』の庭がどのように捉えられ、またどのように表現されてきたのかということがあまり明らかになっていないということである。

中世に繁栄した禅文化とその価値を的確に後世に伝えるためにも、この忘れられたような方丈北側の庭園空間を再評価しなくてはならないと感じる次第である。

0.1 研究目的

本研究は、禅院方丈内の書院間とそこに隣接する庭園との関係性及び空間構成、さらにその表現方法の潮流を明らかにすることを目的とする。

0.2 研究方法

まず、個々の禅院塔頭内の方丈において、方丈全体を総体的に捉えた際の書院間に対する相対的考察によって、方丈内の書院間とそこに隣接する庭園の空間的特徴を明らかにする。そして、書院間と庭園についての平面的考察と断面的考察により、それらを立体的に捉えた関係性を明らかにする。また、書院庭園内の石組や植栽の様子など、よりミクロな視点で捉えて考察を行うことで、その空間に表現された思潮を明らかにする。加えて、書院間内における建築細部の装飾と書院間内の襖や障壁に描かれた画題に関しても視野に含めながら、より多角的な視点から考察を行う。

なお、創建された当初の状態を復元的に描き出し考察するために、保存が為されているものや復元的考察を行えるほどの史料が発見されているもの、あるいは復元研究が進んでいるものを対象とする。

そして、前述した各々の庭園を対象とした考察を踏まえた上で、またそれらの庭園が作られた時代の社会的背景なども考慮しながら、その個々なる事象を総体的に捉えて書院庭園においての作庭表現の潮流を明らかにする。

次頁にて研究方法のフローを示す。

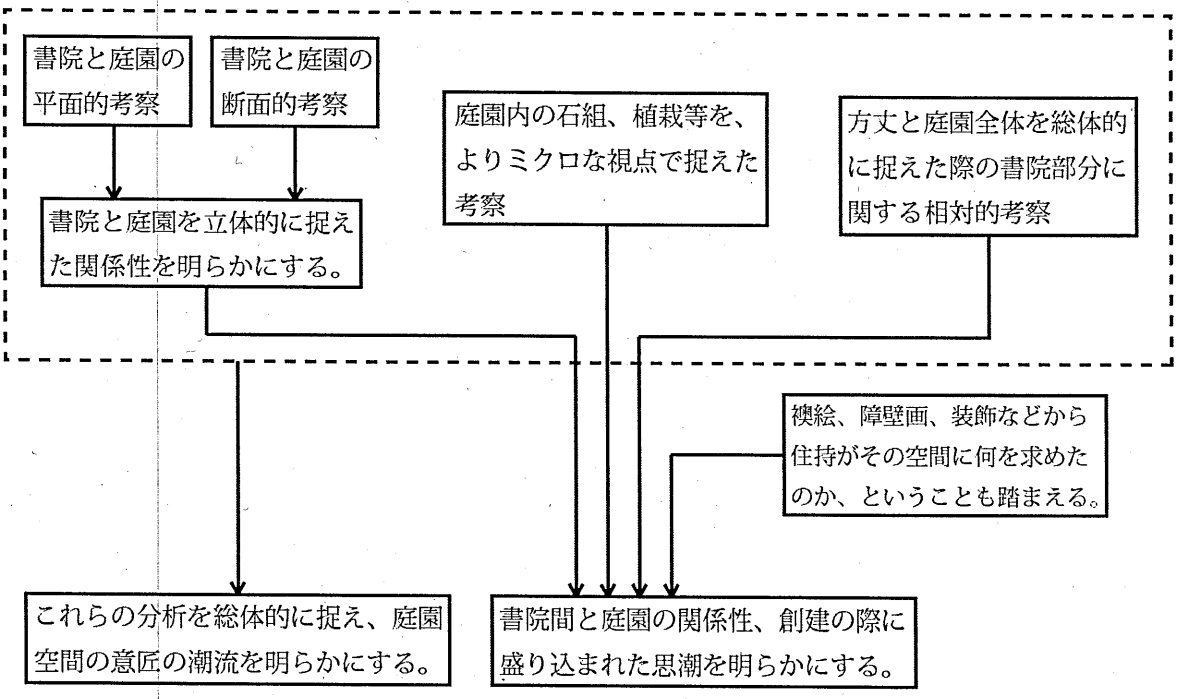

図0　研究方法のフローチャート

0.3 既往研究における本研究の位置づけ

これまで行われてきた太田博太郎氏、川上貢氏などによる禅院方丈の建築及びその空間に関する研究と、森蘊氏、中根金作氏、重森三玲氏、西沢文隆氏などによる庭園空間に関する研究、あるいはその空間の復元的研究、加えてその研究者達が作成した実測図を基に、それらの建築室内の空間と庭園空間とを一体として捉え考察をする点に本研究の新規性、独自性を見出せる。また、その際に水平方向の考察だけでなく、断面方向の空間構成に関しても考察を行うことに同様に新規性を見出せる。

また、襖絵や障壁画に関しては、これまでに為されてきた古書の解読研究の成果を用いて考察を行うが、それと空間とを結びつけて捉える、すなわち建築と庭園と襖絵や障壁画を横断的に捉えて考察することにも新規性を見出せる。

0.4 言語定義

書院間

方丈内にて主に北東か北西に位置する一室としての書院を指す。そして、方丈とは別の棟に建てられた『別書院』や『小書院』と呼ばれる、建物としての書院に関しては本論文では扱わないことを予め断っておく。なお、書院間の発生の経緯やその建築的特徴などに関しては第一章にて論ずる。

書院庭園

方丈内の書院間に隣接した庭園を指す。なお、先に述べたことと重複するが、方丈とは別の棟にある『別書院』や『小書院』と呼ばれる建物に隣接する庭園は本論文では扱わないこととする。

前庭

方丈内の室中に対してその向かい側にある庭園空間、すなわち『ハレ』の庭のことを指す。後にも述べるが、天龍寺や南禅院などの建立された方丈の方向が、大半のものとは異なる方丈においても、特記することなく『ハレ』の庭を指すことを可能にするために、この言葉を定義しておく。

0.5 本論文で扱う資料の説明

都林泉名勝図会

この都林泉名勝図会は、寛政11年（1799年）に刊行されたもので、現在でいうところの観光案内書のような書物ある。京都の俳諧師である秋里籬島が著し、挿絵は佐久間草偃、西村中和、奥文鳴の三名が描いたものである。

本論文内では、主に庭園空間を復元的に考察する際と、各塔頭の方丈内に描かれた襖絵の画題に関して考察する際に用いる。

築山庭造伝

この『築山庭造伝』という書籍は2種存在する。一つは享保20年（1735年）に北村援琴により著されたものと、もう一方は文政12年（1829年）に秋里籬島により著されたものである。この2つの同名の書籍の関係性に触れておくと、元々享保20年に北村援琴が記した『築山庭造伝』に対し、秋里籬島がそれを非難し、前年に秋里が出版していた『石組園生八重垣伝』を一部改作し『築山庭造伝』と称し出版したため、このような事態となっている。

本論文内では、大仙院庭園の復元的考察を行う際に用いるが、それは前者である北村援琴の著した方の『築山庭造伝』より引用している。

第一章　方丈の発生とその建築的特徴

1.1 方丈の発生

まず本研究を論じる上で、禅文化が日本に伝播した経緯を述べておく必要があるだろう。この禅宗とは鎌倉時代よりも前から日本に伝わっていたと言われているが、鎌倉時代初期に栄西や道元により日本に持ち込まれた際に繁栄し、室町時代にかけて全盛を見せる。

当然、その宗派が持つ文化は、これまでの仏教のものとは性格が異なるため、建築やそれらの配置に影響を及ぼすことになるわけだが、ここでは後に挙げた建築の配置『禅宗伽藍配置』に関することを採り上げ、解説を加えることにする。なお、建築細部の装飾や様式などに関することは本論では割愛するが、川上貢氏、関口欣也氏、横山秀哉氏などによるこれまでの研究で、その深部までを知ることができる。

さて、禅宗伽藍配置というものは禅宗寺院境内の建物の配置のことであるが、図1に示したように人間の五体を基に考えられたものである。

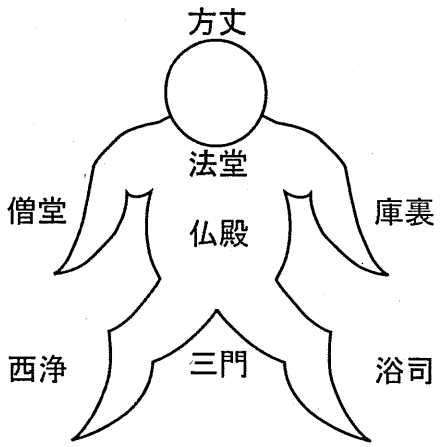

図1　伽藍配置　概念図

この中で、法堂、浴司、東司などは中国より移入されたとされているが、法堂の奥に位置する『方丈』という建物は禅宗文化が日本に入ってきてから新たに付加された、いわば日本オリジナルの建物である。

そして、先ほど示した図の中には各建物が一つずつしか存在しないが、鎌倉末期以降にはこの敷地内に本堂とは別に塔頭が密集することとなる。塔頭というのは、元々高僧の墓所として建立されたものであったが、後に位の高い僧が隠居するために使われるようになる。そして、この塔頭内にも方丈が建てられ、それが本堂の意味を持つようになる。

さて方丈の話に戻るが、その建物の機能というのは、ひとことで言えば住持の生活空間である。それでは、その方丈の建築的特徴やその使われ方などを次節にて論じる。

1.2 方丈の建築的特徴とその用途

この方丈というのは、現存するものは全て応仁の乱以降に建立されたものであるため、それよりも前の時代に建てられていたものを実際に見ることはできない。ただし、川上貢氏が、『蔭涼軒日録』などの文献を基に復元研究を行っているため、そのことには後で触れることにする。

まず、現在建っている方丈の建築的特徴とその使われ方を述べる。この方丈の建築的特徴を述べると、入母屋造の屋根形式で、その大半は単層である。また、同じ禅宗寺院の伽藍内にある法堂などとは異なり高床作りである。その室内は6室に分けられ、さらにその周囲には縁が設えられている。その様子を模式的に示したものを下の図2に示す。また、図中の各室の用途についてその下に記す。

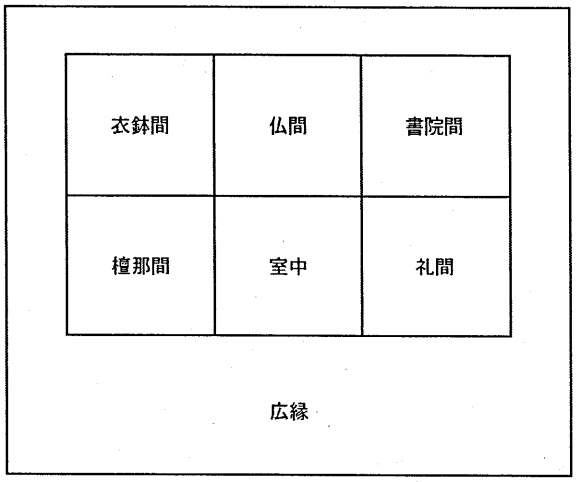

図2　六間取り方丈　平面模式図

室中：仏事を行う部屋
檀那間：檀家を応対する間、主要な接客のための部屋
礼間：接客の補助室
仏間：仏像を安置する部屋
衣鉢間：生活道具を収めるための部屋、待者の居室
書院間：住持の居間、書斎

そして、この他にも書院間に隣接して眠蔵という部屋が設えられることがあり、その部屋は住持が睡眠をとるために使われていた。また、方丈の南側には玄関が附けられて、住持が入寺する際などの特別な儀式を行う際に利用されたが、普段の生活では庫裏という別棟の建物から渡り廊下を介して方丈に出入りをしていた。

以上が、現在も見られるような六間取りの方丈である。そして、川上氏によって復元された応仁の乱以前の方丈とは、前述したような六間取りではなく、三間取りのものであった。その各室の間取りを模式的に示したものを下の図２に示す。

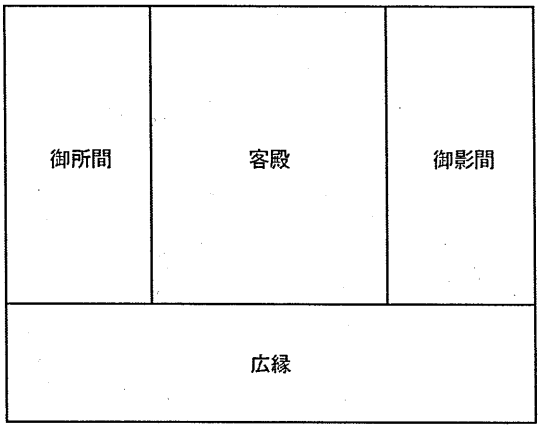

図３　三間取り方丈　平面模式図

この方丈は、中央の客殿が主室とされて、そこには開山像が安置され、儀礼の式を執行するための部屋であった。その西側の御所間が次室となり、控え室または衣服の着換として使用されていた。この御所間と客殿との境には襖障子の間仕切りが設けられていたという。そして、客殿を挟んで御所間の対面に位置する御影間は、納所による勘定が行われたり、僧衆の控え室として使われていたらしい。また、ときには院主の応接室としても使われていた。そして、図からも分かるようにこの３室を連絡するために広縁が設えられていた。

川上氏は文献からはこれ以上の室は確認できないと言及していて、たしかに後に作られる六間取の方丈においての各室の用途を満たしていることが確認できる。そして、このことを踏まえると、東側の御所間というのが現在でいうところの書院間のような役割を果たしていたと考えられる。

1.3 書院間の意匠

書院間内部に設えられた座敷飾りに関しては、各方丈によって様々であるが、床や違い棚、または付書院などが設えられているのが大半であろう。また、細部の装飾も様々であるが、その室内の様子はおおよそ以下の写真（図 4）に示したようなものである。もっとも、このような座敷飾りが一切設えられていないものも存在する。

それでは次章より、この私的なる書院間とその庭園の空間構成について論じていく。

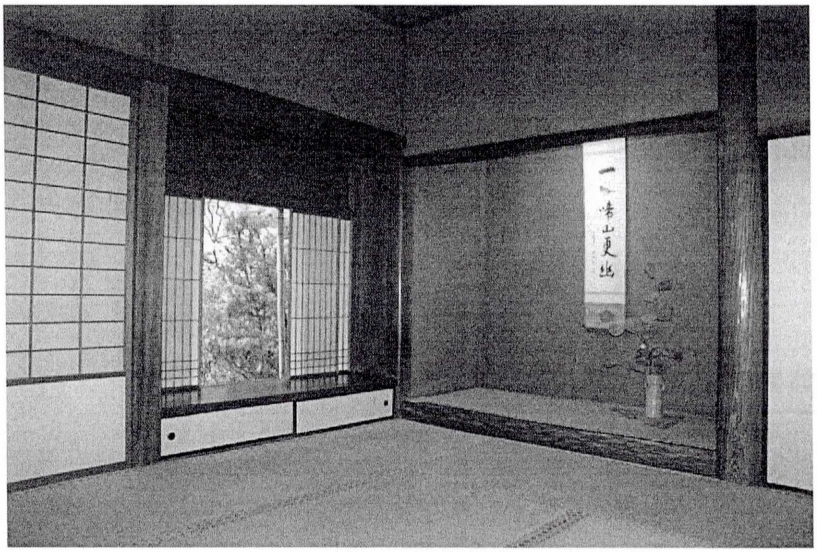

図 4　高桐院　書院間内部

図 4　著者により撮影

第二章　書院間と庭園

2.1 書院間と庭園の空間構成

序説

本節では、方丈全体を総体的に捉えた際の書院間と書院庭園に対する相対的な考察を行い、また、書院間内の付書院や床の位置と庭園の関係性について、具体的に言えば書院間室内から付書院を介して庭園を見た場合あるいは書院間室内から床を背にして庭園を見た場合にその視界の先にある庭園がどのように作り込まれているか、ということについても考察する。その際に、平面図のみを用いるのではなく、断面図も用いながら、垂直方向に対しても重点を置きながら、どのように書院間と庭園空間が作られたかを考察する。なお、古絵図やこれまでに行われてきた復元的研究などにより空間の復元が可能な場合は、創建当初の様子を描き出しながら考察を行う。

考察の対象とする庭園に関しては、作庭当初の状態が保存されているもの、復元研究が進んでいるもの、また都林泉名勝図会や築山庭造伝などに当初の様子を示す絵図等が掲載されていて、復元的考察を行うことが可能なものを採り上げることにする。具体的に挙げると、南禅院、西芳寺、等持院、天龍寺本坊、龍安寺、西源院、大仙院、退蔵院、金地院、高桐院について論じる。

なお、次章にて作庭表現の潮流に関して考察するため、時系列（上に挙げた順と同じ）に列挙し論ずることにする。ここでいう時系列というのは、作庭された時期の順を指す。

南禅院

南禅院は南禅寺境内の南東側に位置し、水路閣の南側に建立されている。

開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。元々、亀山天皇がこの地に松本殿という自身の離宮を造営したが、さまざまな怪事に見舞われたため、東福寺の大明国師にその事態を修めさせた。それを機に正応2年（1289年）に、この離宮を禅寺として改めたのが南禅院の始まりである。

庭園に関しては、亀山天皇自身が作庭したという説や、また一時夢窓疎石が入寺していたということから夢窓疎石が作庭に携わったという説もあったが、『百丈清規抄』や『翰林五鳳集』の解読により梵仙竺仙禅師を招いて作らせたものであるということが分かっている。

また、現在建っている方丈は応仁の乱以降、一度は荒廃したものを徳川綱吉の母である桂昌院が再興させたものである。

建物の配置に関して考察する。前章にて、書院間は方丈内の北側に位置すると記したが、この南禅院の方丈はそれとは異なる。現在の配置図（図5）を見ても明らかなように、室中が西側に面しているため、書院間は南東に位置している。つまり、方丈の向きが従来のものより90度時計回りに傾けられて建立されているのである。そして、当然方丈内の間取りもそれに合わせて転回しているため、図5に示したような間取りとなっている。さらに、書院間内の付書院は南側を向いている。

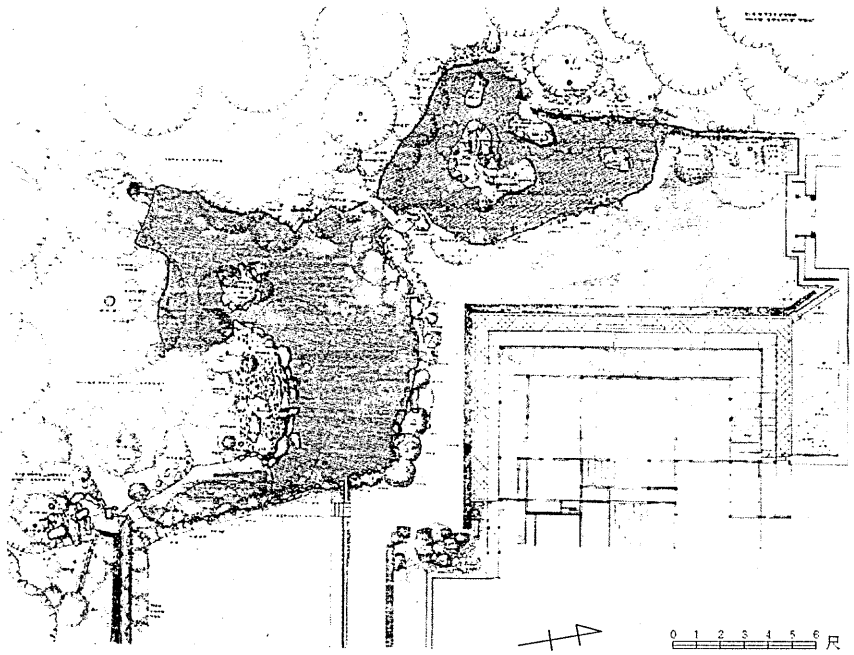

図5　南禅院　平面図

図5　重森三玲著『日本庭園史大系3』（社会思想社　1971年）より

この南禅院が建っている場所は、地形が北に向かって下りの傾斜になっているため、通常の方丈のように書院間を北側に向けて建てると、その先の庭園がどうしても開放的な空間になってしまう。たとえ付書院を東側に付けようと、その先の景に深山幽谷なる山水を作りだすことは困難である。そのため、方丈の向きを転回させて設置することで、付書院の先に池泉と山の斜面を向かせたのである。このようにして、深山の如き書院庭園を作り上げている。

また、この南禅院は東山付近に位置するため現在では自然に囲まれているものの、東山は明治まで荒野のような山であったということも踏まえなくてはならない。そこで、復元的考察を行うにあたって都林泉名勝図会を用いる。この書籍所載の南禅院の絵図（図6）を見ても、この絵が描かれた江戸中期には池泉の背後は植栽が鬱蒼としていたことが分かる。

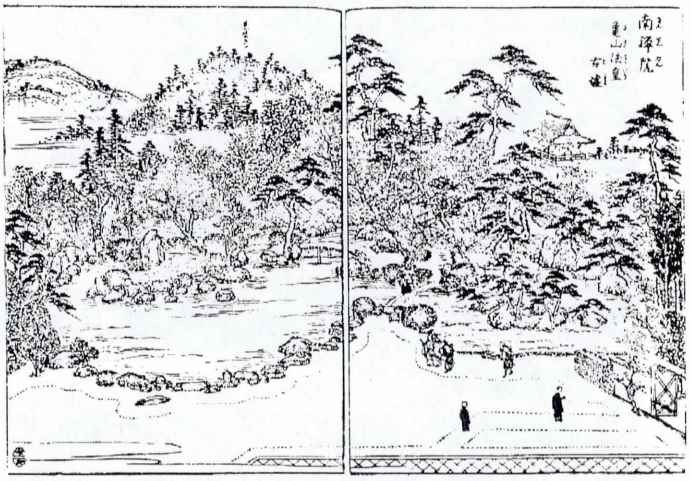

図6　都林泉名勝図会所載　南禅院絵図

話を建物の配置の考察に戻そう。先に示した平面図に、書院間内から付書院を介して庭園を見たときの視界の範囲を記入したものを図7に示す。この図を見ても明らかなように、附書院の先には実際の水を用いた池泉とその背後に滝口が見えるようにそれぞれが配置されていることが見て取れる。なお、この滝口は近年の改修により規模が縮小してしまっているが、かつては現在のものに増して存在感を持った滝が表現されていたに違いない。このように、書院庭園の室内から見た景は、白砂を用いるのではなく、実際の水を用いて具象的な山水を表現しているのである。

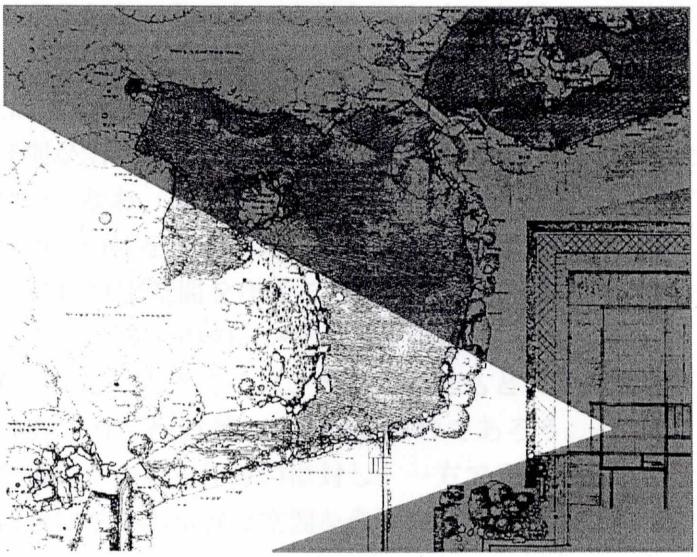

図7　南禅院平面図中に書院間からの視界範囲を記入した図

図6　『新修　京都叢書』（臨川書店　1968年）より

図7　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系3』（社会思想社　1971年）所載　南禅院平面図を基に作図

このように、南禅院の書院庭園は地形を利用して作庭することで、書院庭園を撮影した写真（図８）のように実の自然を庭園内に上手く取り込み、明るく開けた庭園ではなく、暗く深山幽谷な雰囲気をまとった庭園空間を作り出している。さらに、付書院から見える庭園の景には池泉や滝口などを用いて山水を表現しているということが分かる。

図８　南禅院　書院庭園（現在）

また、方丈全体を総体的に捉え、書院間に対して相対的評価をすべく、ハレの空間である前庭がどのように作られているかということにも触れておく。ただ、この南禅院の方丈がかつてどういったものであったか、詳細なことは分かっていない。もしかすると、前章内の図３のように三間取の方丈であったかもしれない。もし、そうであったとすると、東西でケとハレの区別が明確に表れていなかった可能性もあるが、現段階では深く言及することができない。なお、興味深いことが、この時代禅宗寺院の方丈の前庭というのは儀式を行うため、白砂を敷き詰めること以外の造作は禁止されていたと言われている。つまり、そこに庭園空間を作ることができなかったわけだが、この南禅院の前庭には白砂が敷かれているものの、さらにその奥には池泉が存在し、明らかにそこに庭園空間が作られている。おそらくは、やはりもともと天皇の離宮が建っていた場所であったため、このような配置がとられているのであろう。そして、このように方丈の前庭には白砂を敷いた空間を作るのに対し、一方で書院庭園というものは白砂を用いずに、水と植栽を以て深山幽谷な空間を作り出していることが分かる。

図８　著者により撮影

西芳寺

西芳寺の開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。元々、この西芳寺の建つ場所は、厭離穢土寺と欣求浄土寺という２つの寺院が建立されていたことが、これまでの研究より明らかになっている。そして、それぞれの寺院に庭園が存在したらしいが、その後一度荒廃し、歴応２年（1339 年）に松尾大社の宮司である藤原親秀が夢窓疎石を招請して、そのとき既に荒廃していたこの寺院を禅寺として再興させた。そして、その際に名称を『西芳寺』と改めたのである。しかしその後、応仁の乱で焼失し、また数回の洪水にも遭い、荒廃と修復を幾度か繰り返し現在に至る。

ちなみに、現在は『苔寺』という別称を持つように、庭園一面に苔が蒸している状況であるが、当初は枯山水式の庭園であったと言われている。また、現在のように苔が地面全体を覆っている状態になったのは、おおよそ江戸末期以降であるとも言われている。

まず、現在の様子を示した配置図を図９に示す。この図は森蘊氏により昭和期に作成されたものであるが、建物の配置などに関しては現在のものと大きな相違は見受けられないため、特に訂正することなく転載した。図中、本堂と記してある建物が方

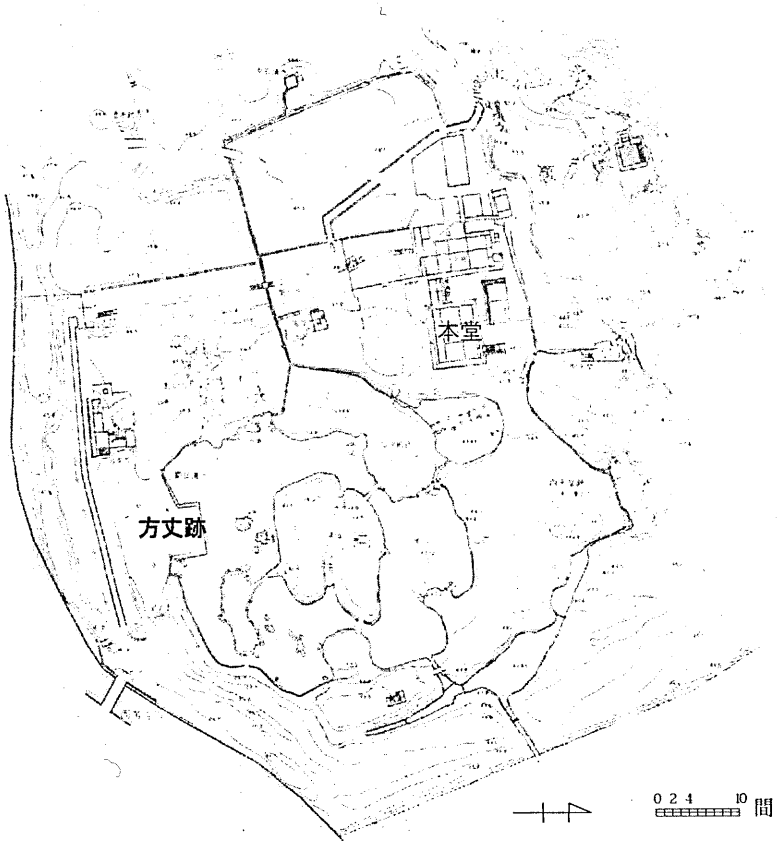

図９　西芳寺　平面図

19　森蘊著『中世庭園文化史』（奈良国立文化財研究所　1959 年）より

丈である。そして、この図を見ても明らかなように、書院間は6畳の畳敷きとなっていて、室内の北側に床が設置されている。庭園を観賞する際には、この北側の床に背を向けて、東側の庭園を見たのであろう。東側の書院庭園にはやはり、実際の水を用いた池泉が作られており、書院間内から見た景は具象的な山水が表現されていたことが見て取れる。ただし、先に挙げた南禅院のように山の斜面を使い深山幽谷な雰囲気を表現しているわけではないが、この西芳寺は元々山奥のような空間に立地しているため、庭園空間の背後が山の斜面となるように計画する必要もなかったのであろう。

さて、しかしこの方丈は昭和初期に建立されたものであり、かつての方丈は現在とは異なる位置にあった。そのかつての方丈とは、先ほどの平面図内に『方丈跡』と表記している箇所に位置した。そして、西澤文隆氏が自身の著書である『庭園論Ⅱ』の中で、この西芳寺の方丈に関して復元的考察を行っているので、そのことにも触れておく。まず、西澤氏が作成した復元図を図10に示す。ただし、この図に関して、西沢氏は『文献より作成』としか記載していなく、具体的にどういった文献からこの復元を行ったかは不鮮明な部分があるが、おそらくは蔭涼軒日録などの古書、あるいはそれに基づいた研究を基に記載したと考えられる。

この図10の中で『蔵密』と記された部屋が、住持が私的に使っていたという御所間に当たるわけだが、その室内に付書院が設置されてい

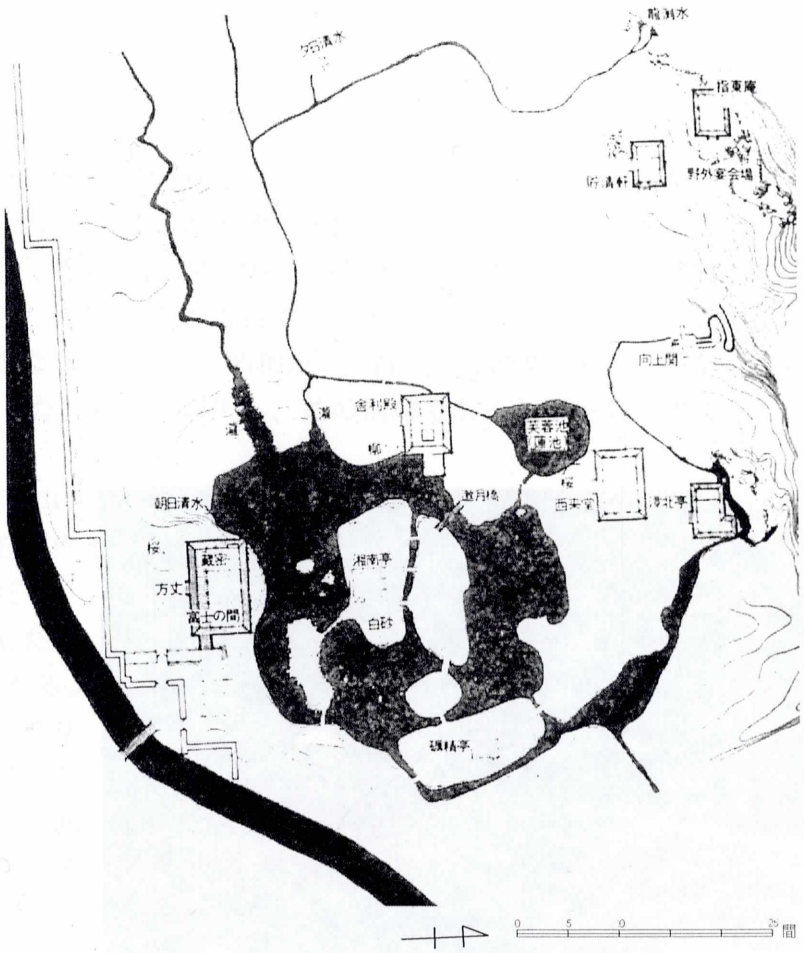

図10　西芳寺　平面復元図

図10　西沢文隆著『庭園論Ⅱ』（相模書房　1976年）より

る。そして、この付書院の先にあるものと言えば、影向石などの石組であり、付近には多量の石群が置かれていることも同じ図より明らかである。この複数の石というのは、現在は枯渇してしまっているものの、かつては実際の水が流れていたことが森蘊氏による湧水の調査により明らかになっている。つまり、室内から付書院を介して見た景には、やはり実際の水を用いた滝石組が配されていることが推測できるのである。

もっとも、先にも述べたが、この復元図の真価を追求する必要があることは言うまでもないが、たとえこの図のように方丈が三間取ではなく、六間取のものであったとしても、その建築の北側の庭園というのは、やはり実際の水を以て池泉が作られていた。そして、図９を見ても分かるように、北側に向かって地形が高くなっているため、どちらにしても書院間から見た景というのは深山幽谷なる景であったことであろう。

等持院

等持院は北区に位置し、足利尊氏の墓所としても著名である。

まず等持院の開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。暦応４年（1341年）に足利尊氏が現在の中京区柳馬場御池付近に等持寺を建立する。その２年後の康永２年（1343年）に、現在の京都市北区等持院北町、すなわち現在、等持院のある地に、等持寺の別院として、『別院北等持寺』が建立された。そして、尊氏の死後、等持寺が尊氏の菩提所となり、その際に名称が『等持院』に改められた。さらに、応仁の乱で元々本寺であった等持寺が焼失し、この別院であった等持院が本寺となった。

庭園に関しては、確固づける証拠はないが夢窓疎石が作ったとされている。ただし、この庭園の北側を撮影した写真（図11）を見ても分かるように、随所に刈り込みの手法が見受けられる。刈り込みとは、室町末期以降の手法であり、しかも本庭園で見られるような大規模なものは江戸時代以降のものとも言われてい

図11　等持院　方丈北側庭園（現在）

図11　著者により撮影

る。また、石組の手法などの技術的な部分を見てみても、江戸時代の手法を施していると言われている。つまり、仮に庭園のおおまかな部分は夢窓疎石が作ったとしても、後世に改修の手が加わっている可能性が示唆される。
また、現在の方丈は元和２年（1616 年）に妙心寺の塔頭である海福院より移築されたものと言われている。

現在の配置を図12に示す。この図を見ても明らかなように、方丈の北側に関しては、やはり実際の水を使った池泉があることが確認できる。そして、図中の植栽された樹木の量や先に提示した写真（図 11）を見ても、北側の庭園に関しては深山幽谷な雰囲気を作り出そうとしていたことが分かる。

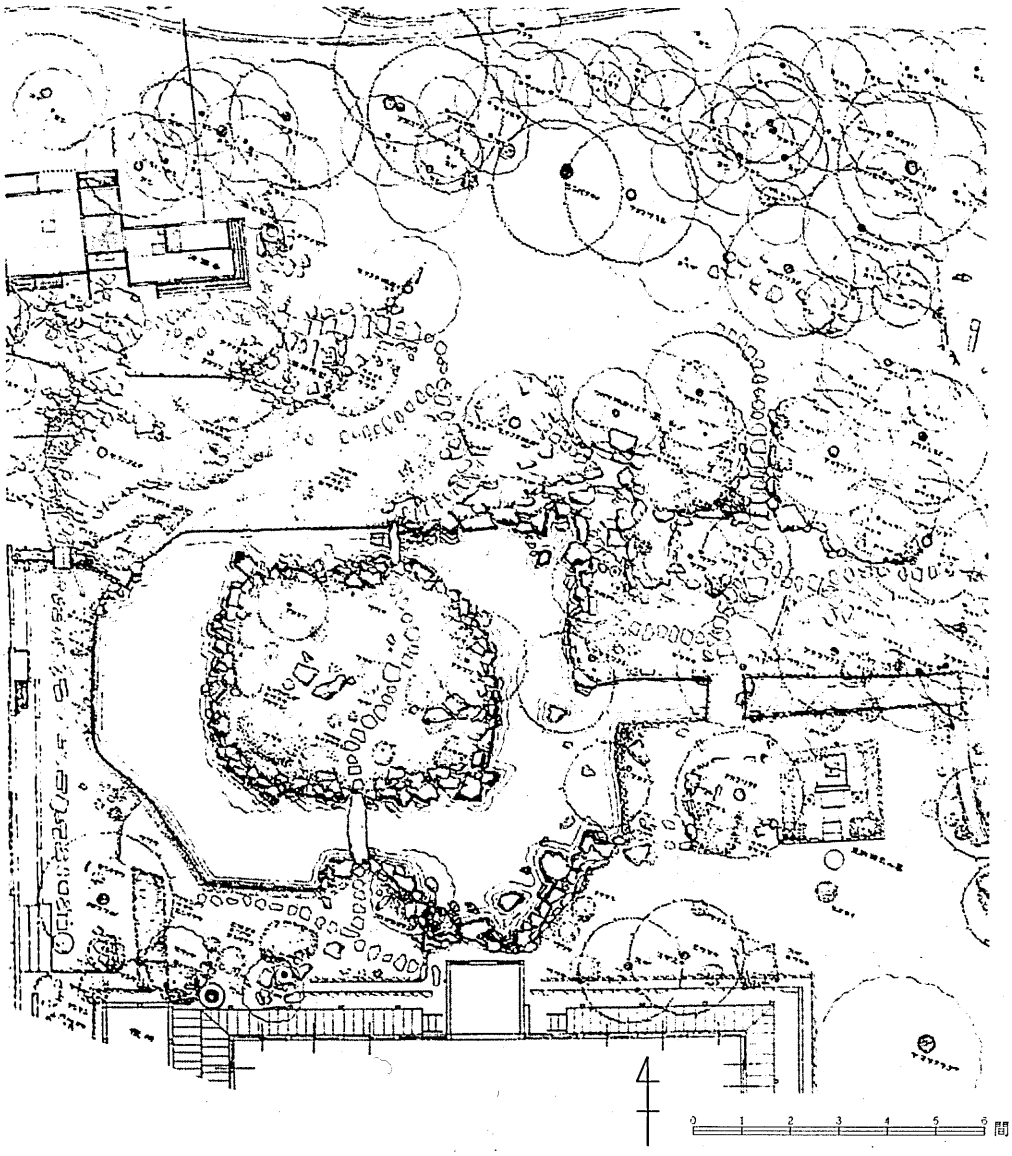

図 12　等持院　方丈北側平面図

重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 3』（社会思想社　1971 年）より

また復元的考察を行うために、都林泉名勝図会の中に描かれた等持院の絵図に触れておこう。図 13 が、方丈北側の庭園を描いたものである。図中左下に描かれた建物が、現在の方丈の位置とも重なるため、かつて建っていた方丈だと推測できる。この図 13 を見ると、屋根の奥行きなどから現在のものより少し小規模のようにも見えるが、これだけの情報からかつての方丈がどのようなものであったかということまで考察するのは困難である。しかし、方丈の北側の庭園に関しては現在のものとそれほど相違はなく、やはりそこには具象的な山水が表現されていたということが分かる。

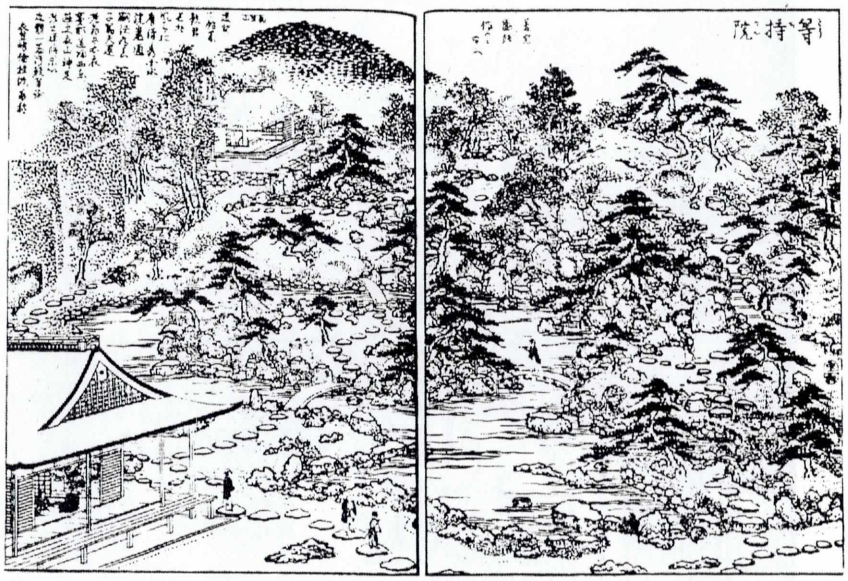

図 13　都林泉名勝図会所載　等持院絵図

加えて、先に示した図 13 よりは描画の精度が落ちるが、さらに時代を遡った南北朝時代に描かれた等持寺古絵図を次頁内図 14 に示す。なお、方位は北側が上になるようにして掲載する。この図からも明らかなように、創建に近い時期から実際の水を用いた池泉が作られ、そこを跨ぐように石橋が架けられ、その背後には多量の樹木が植栽され、深山幽谷な雰囲気が作り出されていたということが分かる。

そして、これらの復元的考察を踏まえても、方丈北側の庭園に関しては創建当初の状態も現在のように具象的な山水が表現されていたと言える。

また、方丈全体そして南庭も総体的に捉えた上で、方丈北側の庭園に対して相対的に考察を行う。先に示した等持寺古絵図（図 14）を見ても明らかであるが、方丈南側の空間内に植栽は何も描かれていない。この時代の寺院制度により、方丈南側には白砂を敷くこと以上の作庭行為は禁止されていたため、この空間に植栽はなかったのであろう。そのことを踏まえた上で書院庭園を見ても、そこには白砂が敷かれた簡素な空間ではなく、具象的な山水が作られていたことが分かる。

図 13 『新修　京都叢書』（臨川書店　1968 年）より

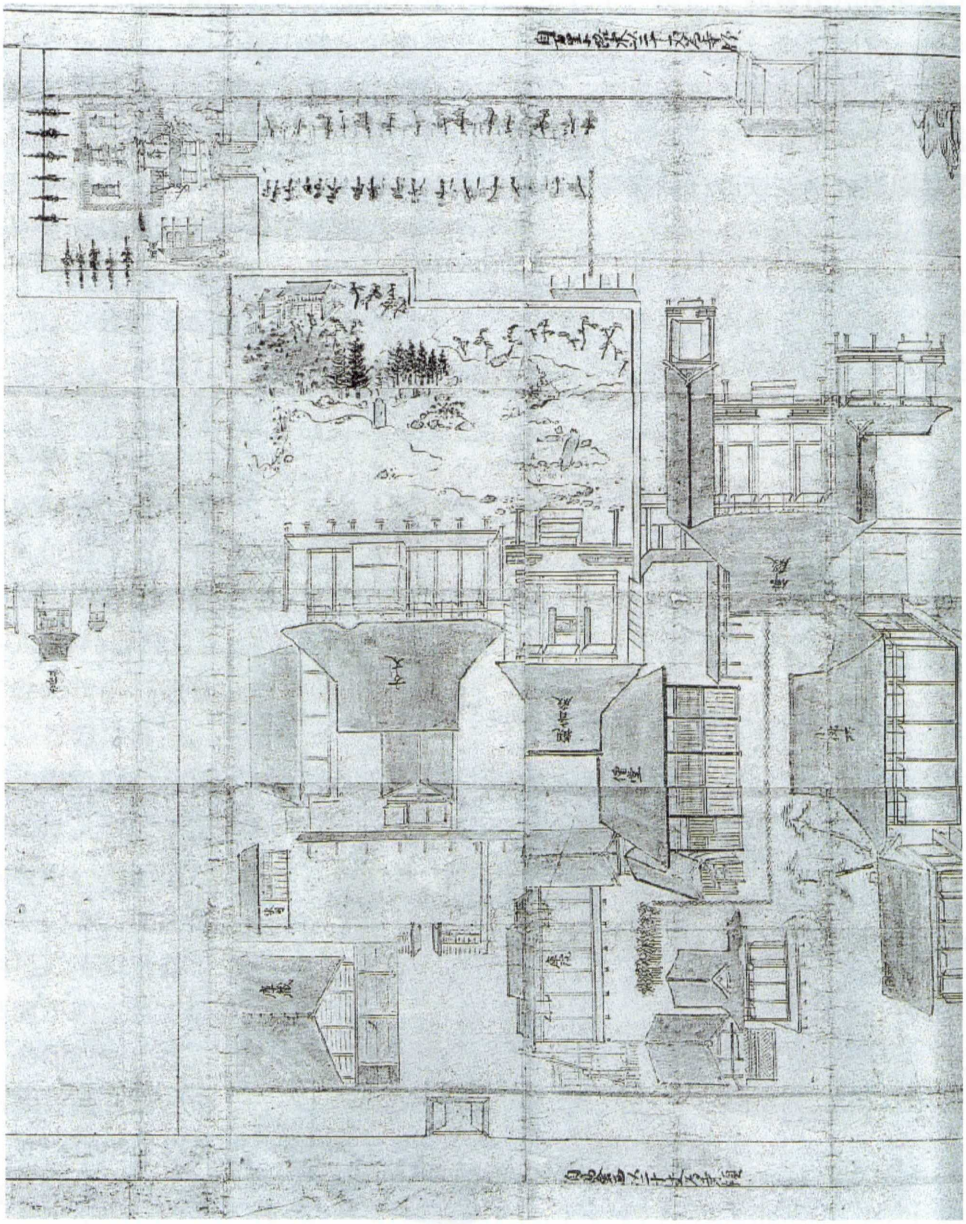

図 14　等持寺古絵図

天龍寺

天龍寺は右京区に位置し、近隣には嵐山や桂川などがある。

まず天龍寺の開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。元々この地にあったが荒廃してしまっていた壇林寺を、後嵯峨天皇と亀山天皇が自身の離宮として再興

図 14 『京都・激動の中世』（京都文化博物館　1996 年）より

させ、そこに『亀山殿』という建物を建てた。そして、後に足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うために、この亀山殿を天龍寺という禅寺として開基した。なお、足利尊氏は後醍醐天皇の行った建武の新政に背いたことで、天皇から追討の命も出ていた。それにも関わらず、その敵ともとれる人物の菩提所として寺院を建立することを勧めたのは夢窓疎石であった。そして、尊氏はその開山に夢窓疎石を充てた。庭園はその夢窓疎石により作られたものである。

それでは、建物の配置に関して考察する。この天龍寺も、南禅院と同様に方丈の向きが従来のものと異なっている。現在の状況を示した平面図（図 15）を見ても明らかなように、方丈内の間取りに関しては室中が東側を向き、書院間は南西に位置する。つまり、従来の方丈の向きを 90° 半時計回りに転回させた状態で建立されているのである。そして、書院間から見た庭園には、やはり実際の水を用いた池泉が配されている。加えて、その池泉に流れ込むように枯滝が組まれている。この滝石組には、鯉魚石や碧巌石などの禅語より作り出された、いわば宗教的な見立てが見られるものの、その石組の背後には嵐山とそこに存在した植栽群が景として取り込まれることで、そこには具象的な山水が表現されている。

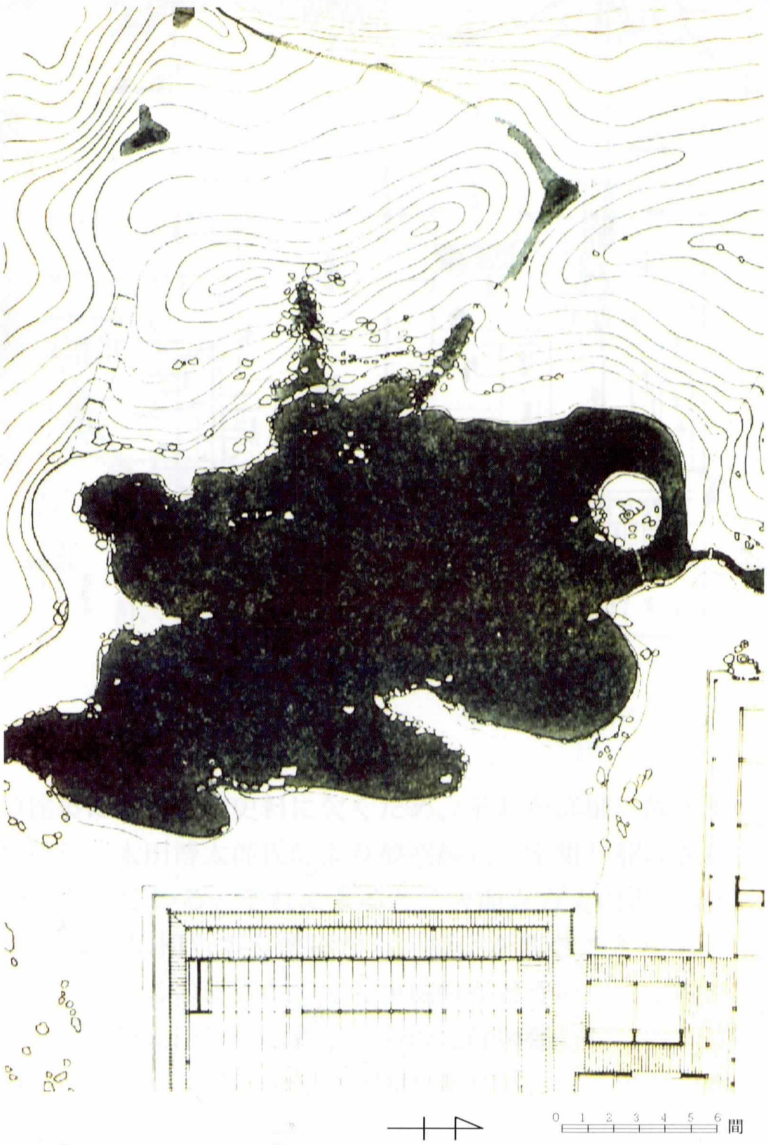

図 15　天龍寺　平面図

図 15　西沢文隆著『庭園論 II』（相模書房　1976 年）より

そして、現在の庭園を東西に切断した断面を次頁中の図 16 に示す。この図を見ても明らかなように、書院間の先にある庭園には、多量の樹木を以て深山幽谷なる山水が表現されていることが分かる。

また、この天龍寺の敷地に関しては、図 17 の山城国臨川寺領大井郷界畔絵図を見ても現在と変わらない位置に立地していたとみられる。そして、当絵図は南北朝時代、すなわち天龍寺として開山されてから間もない時期に描かれたものである。つまり、庭園の東側に関しては、創建当初からこの絵図に描かれているように樹木の生い茂った山であったことが分かる。ちなみに、同じ京都でも、東山などは明治時代まで荒れ山のような状態であったことが分かっているため、この絵図は当時の天龍寺の庭園の背後にどの程度樹木が存在したかを示すためにも価値のある史料である。

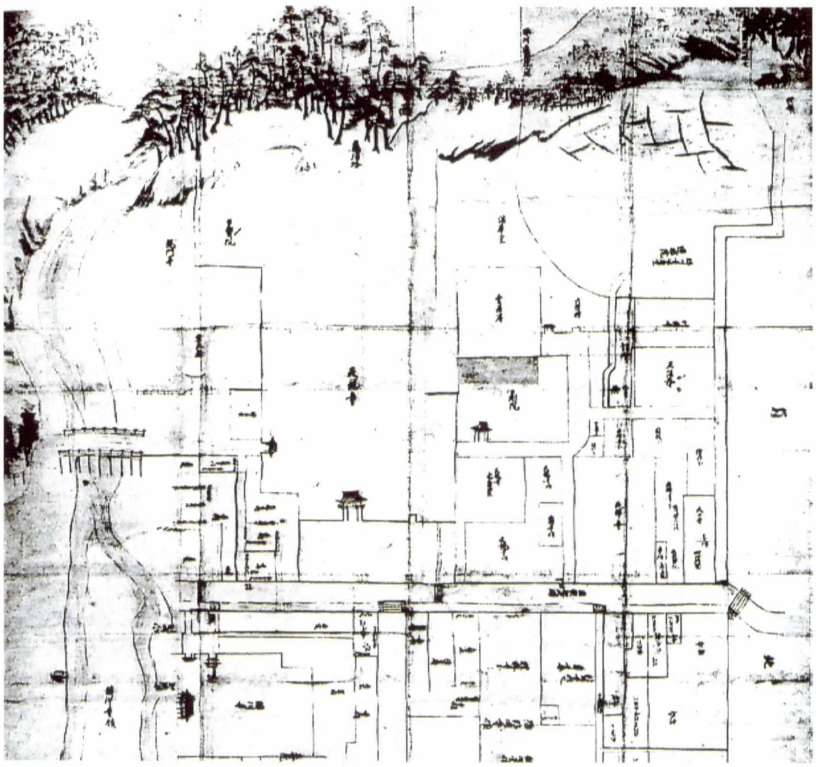

図 17　臨川寺領大井郷絵図

なお、創建当初の方丈の建築に関しては史料に欠くため、それを詳細に描き出し考察することはできない。ただし、太田博太郎氏により夢窓疎石の家集が解読され、そのおおまかな配置は明らかになっている。それによると、天龍寺方丈内の『集瑞軒』という現在でいうところの書院間に相当する部屋から、嵐山を臨むことができたといった記録が記されていたという。この研究の中でも集瑞軒がどういった建物であったかまでは復元されていなく、また太田氏もこれ以上の復元は困難としている。しかし、この研究から、方丈内に書院間のような私的な空間があり、その部屋が西側に面していたということが分かる。

図 17 『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』（京都市埋蔵文化財研究所　1978 年）より

図16　天龍寺　断面図

図16　西澤文隆著『建築と庭』所載の天龍寺断面図を基に作図

そして、この庭園の創建当初の様子を復元する際に、もうひとつ特筆すべきことが滝石組の存在である。この北側の庭園に組まれた枯滝は、現在のところは実際の水が流れていない、字の如く『枯れた滝』である。しかし、築山庭造伝所載の『委曲詳明体　嵯峨天龍寺』（図 18）や都林泉名勝図会所載の『天龍寺』（図 19）を見ても、現在は枯れ滝となっている石組の部分に水が流れている様が描かれていることが分かる。また、森蘊氏による湧水の調査によっても、かつては実際の水が流れていたことが明らかなっている。つまり、天龍寺開山当初の書院間から見た景に関して、そこに表現されていたものは、枯れ滝といった抽象性の高いものではなく、実際の水が流れている具象的な滝であったのである。

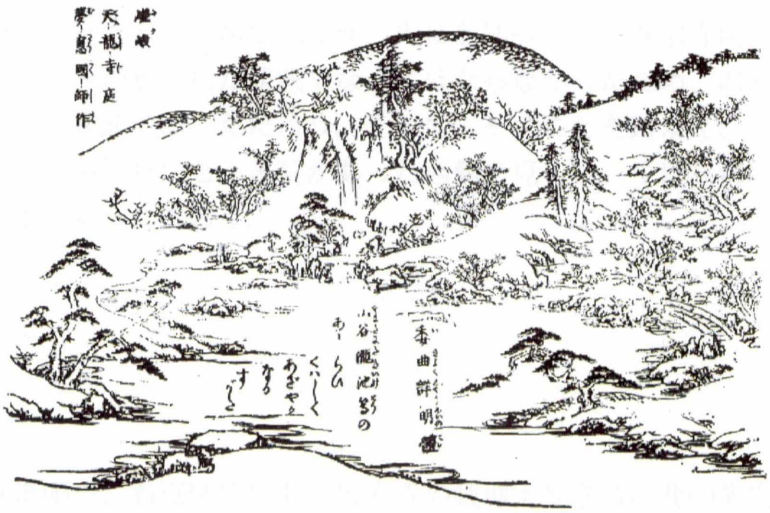

図 18　築山庭造伝所載『委曲詳明体　嵯峨天龍寺』

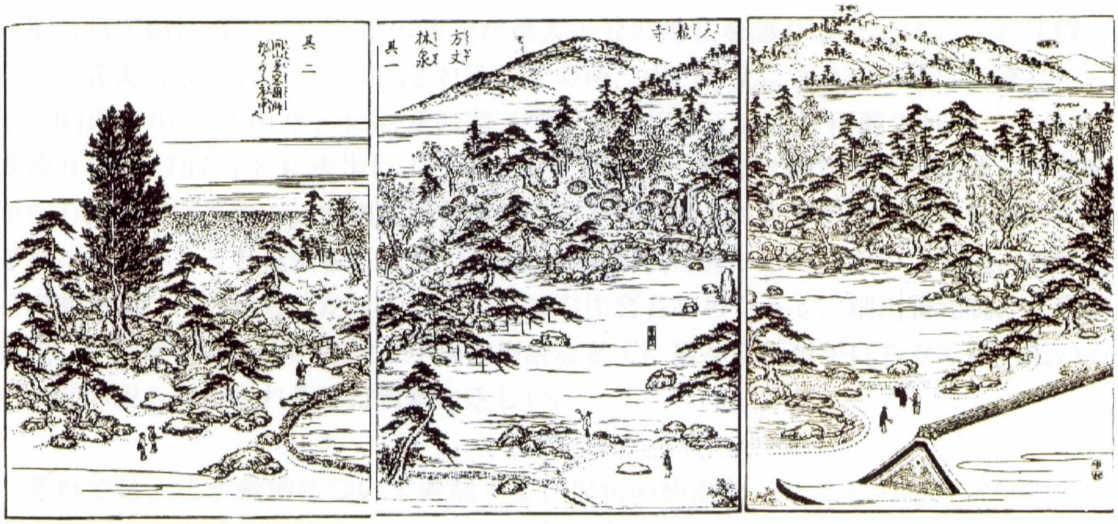

図 19　都林泉名勝図会所載　天龍寺絵図

さて、これらの復元的考察を踏まえると、建築の細部に関しては不鮮明な箇所があるものの、庭園の構成は先に示した断面図（図 16）に近い状態であったと考えられる。そして、当時は枯れ滝ではなく、実際の水が池泉に流れ込み、そこには具象的な山水

図 18　上原敬二編『築山庭造伝（前編）』（加島書店　2008 年）より
図 19　『新修　京都叢書』（臨川書店　1968 年）より

が表現されていたのである。

また、方丈全体を捉えた上での書院間に対する相対的な考察を行いたいところだが、前庭の様子に関する史料が乏しい。ただ、先に触れた太田博太郎氏による夢窓疎石の家集から当時の状況を復元する研究の中で、『衣鉢閣』という今でいう衣鉢間に相当する部屋の存在も明らかになっているため、おそらくは現在の方丈のように『ハレ』と『ケ』が区別された建物であったことが推測できる。すなわち、東西でハレとケの空間に区別されていたということが推測できるが、先にも述べたが、禅宗寺院の方丈の前庭というのは、白砂のみが敷かれた状態でなくてはならなかったため、おそらくこの天龍寺でもそのような状態であっただろう。そして、そのことを踏まえ、ハレの空間と比較しながら書院庭園を見ても、書院があった西側を見ると、やはり書院庭園というのは具象的な山水であっただろう。

龍安寺

龍安寺は妙心寺派の境外塔頭で、右京区内にある妙心寺の敷地よりさらに北の龍安寺朱山の中腹に位置する。

開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。宝徳2年（1450年）、足利政権の管領職に就いていた細川勝元が徳大寺公の山荘を譲り受け、妙心寺の住職であった義天玄承禅師により開山される。その後、応仁の乱により、一度は荒廃したものを明応8年（1499年）に勝元の実子である細川政元により再興された。そして、寛政9年（1797年）に火災により再び方丈を失い、同年に龍安寺塔頭である西源院から方丈を移築される。庭園に関しては、おそらく政元により再興された時期に作庭されたものであると推察されるが、正確な作庭年代は分かっていない。また、有名な話であるが、作庭者も分かっていない。この作庭者をめぐって、細川勝元説、金森宗和説、夢窓疎石説、相阿弥説、小堀遠州説など実に様々な仮説が打ち立てられているが、どの説も確証されるには資料に乏しい。

それでは、まず敷地について考察する。現状の断面を示したものを、次頁内の図20に示す。先にも述べたが、この方丈は龍安寺朱山の中腹に位置するということが、この図を見ても明らかである。北側に関して、方丈の建っている位置と歴代住職の墓地がある位置との間は石垣が築かれ、その高低差は約5メートルもある。そして、その石垣から方丈までの距離が充分に空けられていないため、北庭はほとんど光が届かない幽暗な空間となっている。先程示した断面図に、書院間内に座り付書院を介し

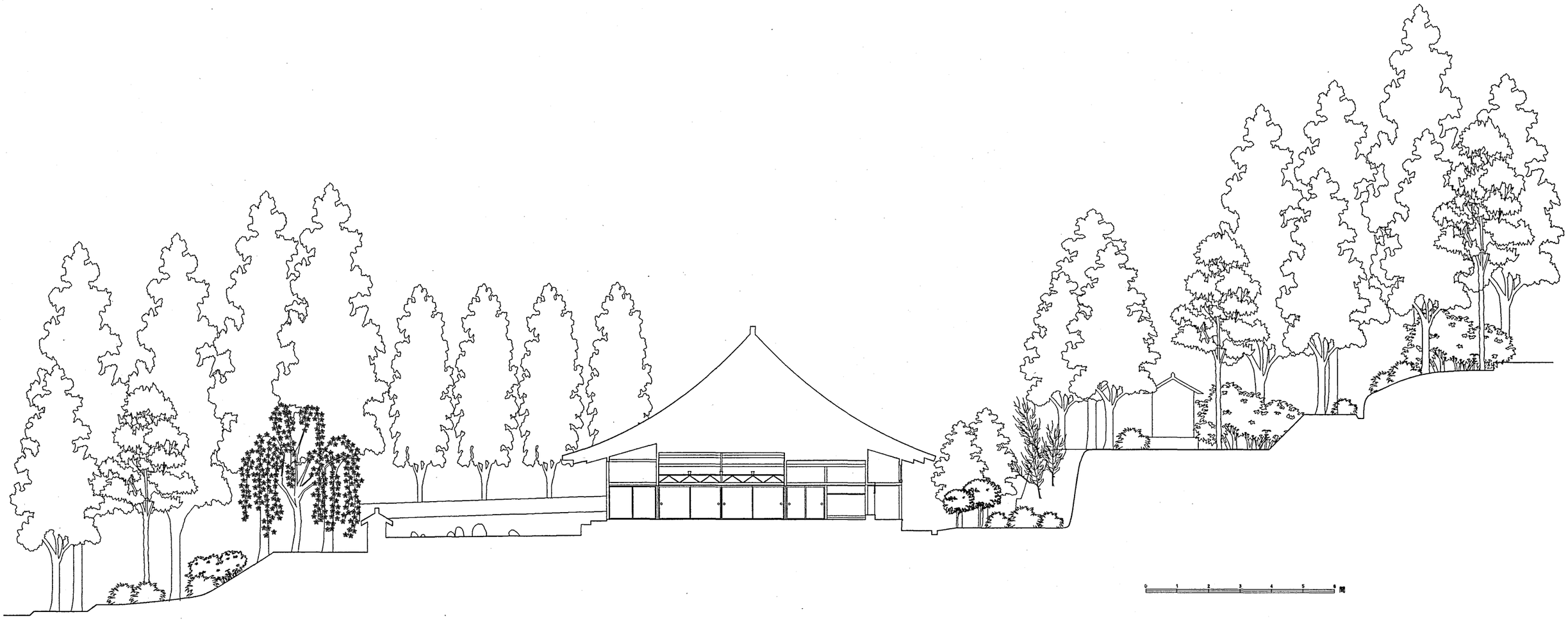

図20　龍安寺　断面図

図20　西澤文隆著『建築と庭』所載の龍安寺断面図を基に作図

て庭園空間を見た視界の範囲を記入した図（図 21）を見ても明らかなように、まるで空を見せないように建築が配置されているのである。それに加えて、現在の北側の様子を撮影した写真（図 22）を見ても明らかなように、やはり北側の庭園には実際の水を用いた池泉がある。

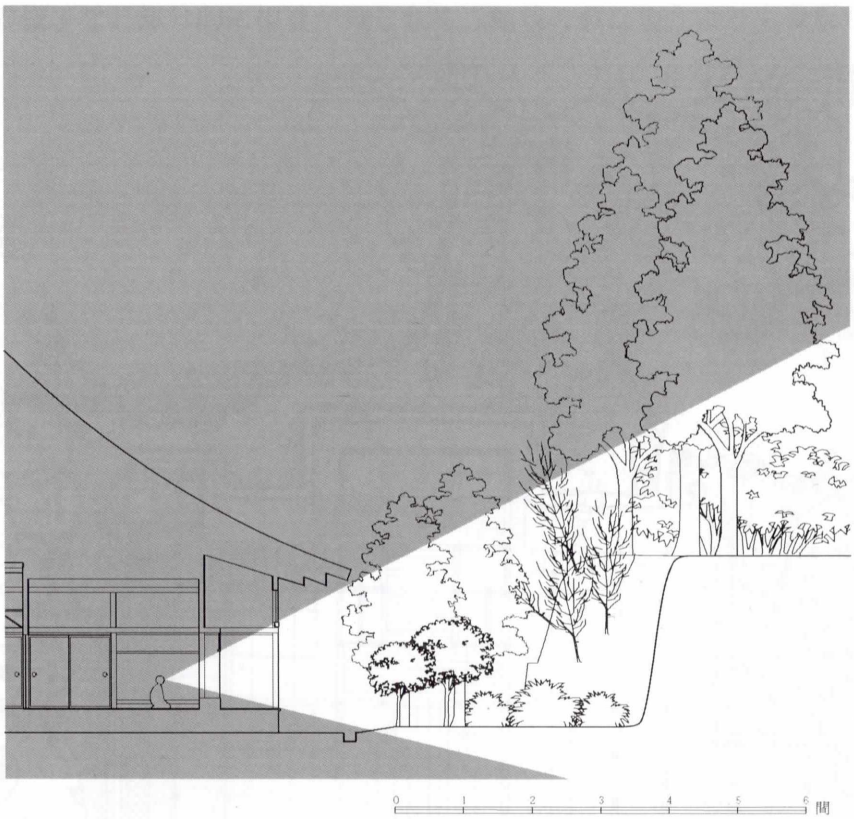

図 21　龍安寺断面図中に書院間からの視界範囲を記入した図

図 22　龍安寺　方丈北庭（現在）

また、方丈とそれを取り囲む庭園を総体的に捉えると、この龍安寺の書院庭園は、南庭のように明るく開けていて殺伐とした空間と比べ対極的ともとれるほど暗く、そして植栽が鬱蒼と生い茂り、さらに実際の水を用いた池泉が作られていて、まさしく深山幽谷な庭園空間が表現されているのである。

図 21　西沢文隆著『建築と庭』所載の龍安寺断面図を基に方丈北側庭園部分を加筆修正し記載
図 22　著者により撮影

ちなみに、現状と昭和中期に重森三玲氏により作成された図面（図 23）とを比較すると、池泉の位置や、方丈の位置など、おおまかに見れば、それほどの相違は見られないものの、かつては仏間奥に室内空間が存在したことと、水戸光圀より寄進された手水鉢（ただし、ここに置かれているものはレプリカである。）が無かったこと、加えて植栽の様子など部分的に相違が見られる。植栽の数は現在よりも少なかったこ

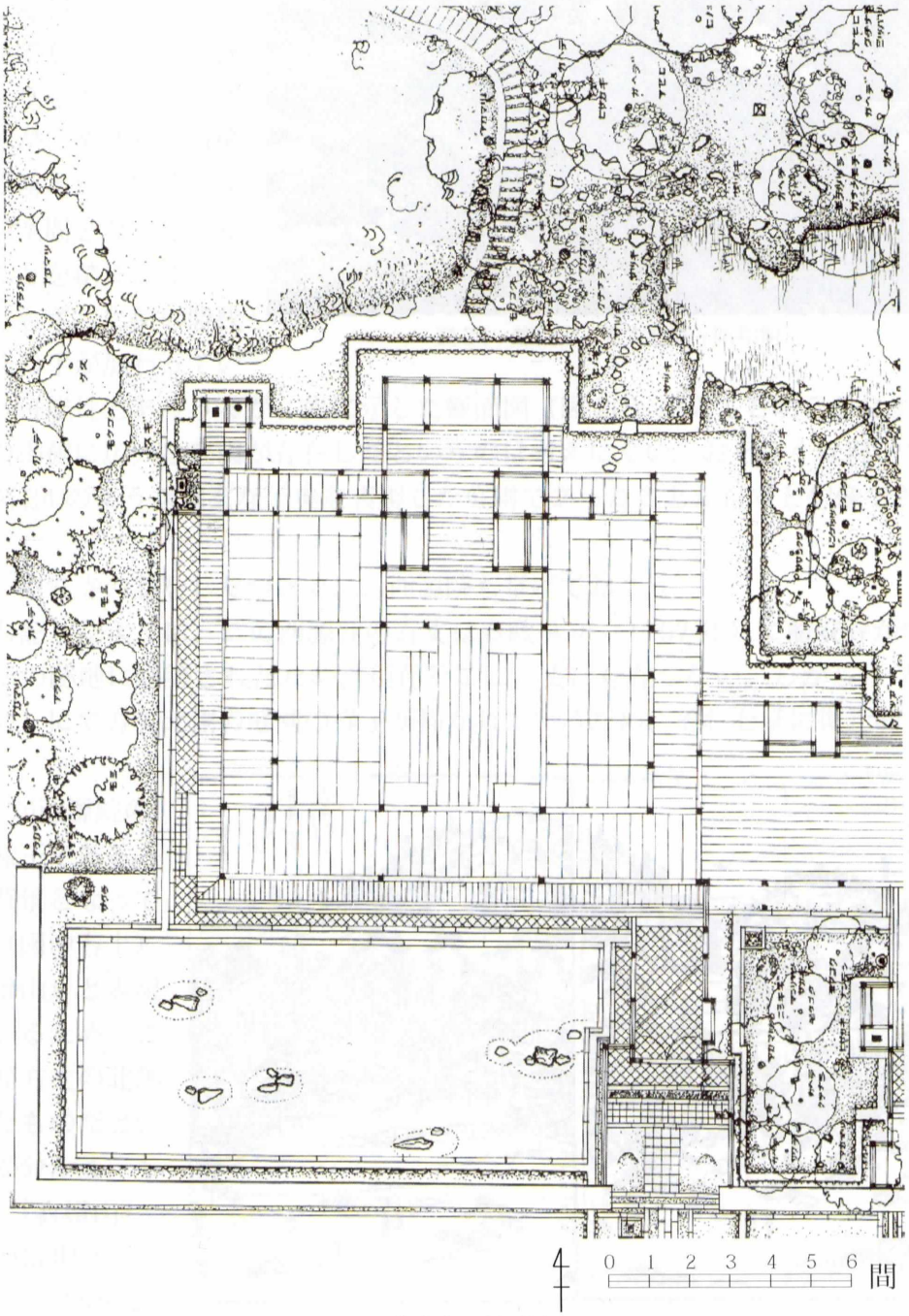

図 23　龍安寺　平面図

図 23　重森三玲著『実測　日本の名園』（誠文堂新光社　1971 年）より

とが見受けられる。重森氏の著書である『日本庭園史大系７』の中に当時の書院庭園の様子を撮影したものを見つけることができたので転載しておく。（図 24）これを見ても、現在の北側の庭園よりも少し開けた空間であるが、やはり、背後に多数の樹木が生い茂り深山幽谷の空間となっている。

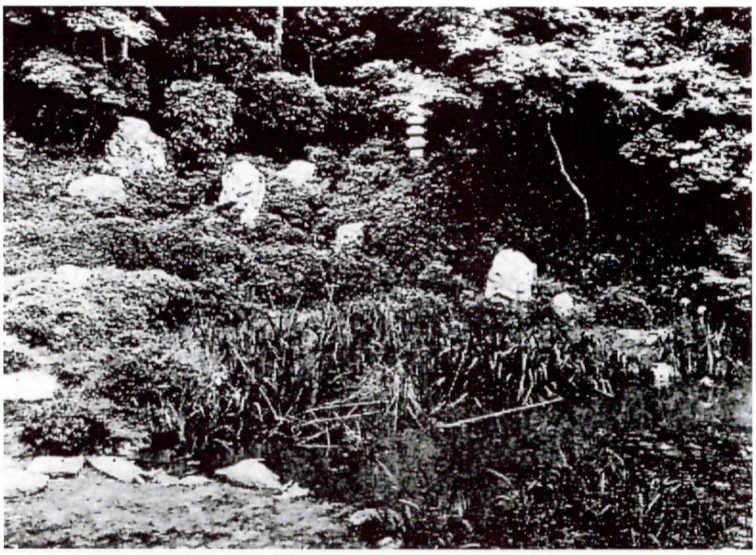

図 24　龍安寺　方丈北庭（昭和期）

このことを踏まえると、昭和よりもさらに前の時代にも改修の手が加わっているという可能性もありうるが、先に示した断面図（図 20）を見ても明らかなように、斜面地の山側に広大な庭園が存在したというのは考えにくい。おそらくは現在や昭和中期の図 24 のような幽玄な山奥を表現した庭園であったことが自ずと想像できる。

さて、龍安寺の話をしたついでに、西源院も挙げておこう。

先にも記したように、この西源院の方丈は寛政９年（1797 年）に龍安寺が焼失した際にその跡地に移築されたため、現在そこに方丈は存在しない。しかし、『都林泉名勝図会』にて方丈北側の庭園の様子が描かれているため、それを基に復元的に考察する。

図 25 が西源院の庭園の様子である。庭園の背景となっている山（図中右上）に『衣掛山』と表記されているため、この絵図が方丈の北側を描いたものだということが分かる。ちなみに、『衣掛山』というのは現在の『衣笠山』の別称で

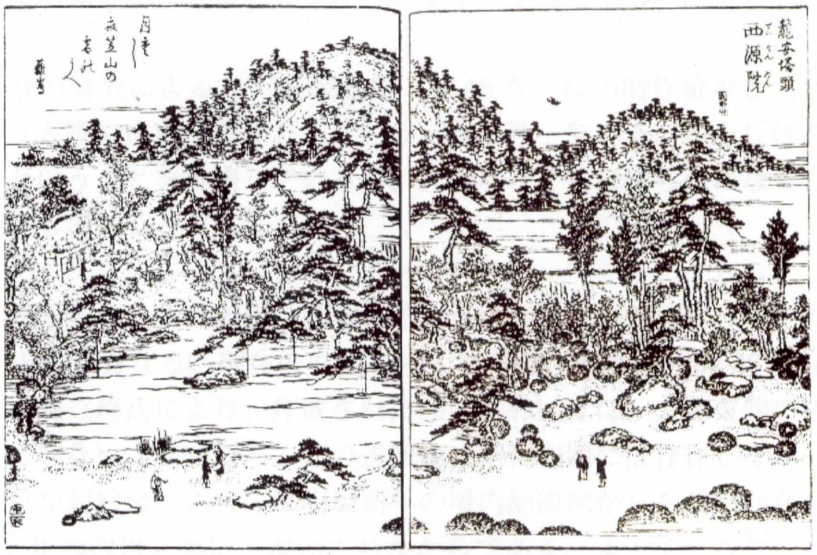

図 25　都林泉名勝図会所載　西源院絵図

図 24　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 7』（社会思想社　1971 年）より

図 25　『新修　京都叢書』（臨川書店　1968 年）より

ある。

そして、図25中左側に実際の水を使った池泉の存在も確認できる。やはり、方丈北側の庭園は抽象レベルの低い山水を作り込んでいるということが見受けられる。そして、その池泉の背後には、人物に対して5倍ほどの丈の植栽が植えられていることが分かる。もっとも、この絵図には幾らかのディフォルメーションが加えられているとは思われるが、それでも、方丈室内から庭園を見たときに、空を覆い隠すように植栽が配されていたことは間違いないだろう。

この西源院の方丈の北側に関しても、そこには実際の水を用いた池泉が作られ、そしてその背後には丈の高い植栽を以て、具象的且つ深山幽谷なる山水が作り出されていたということが推察できる。

大仙院

大仙院は大徳寺塔頭の一つで、本坊の北側に位置する。

そして、永正6年（1509年）に古岳宗亘により創建されたものである。庭園に関しては、離島軒秋里が都林泉名勝図会にて『相阿弥作』と記したため、相阿弥作庭説もあったが、それを確証づける充分な史料がなく、また後に古岳宗亘が自身の日記の中で、禅の余暇に珍樹を移し、怪石を集めて山水を作ったという内容が記していたことが分かり、現在では古岳宗亘作庭説が主流だと言えよう。なお、この確証が為されてからも、室町期にこのような意匠は不可能といった見解から、古岳宗亘作庭説、さらには作庭年代に対して疑問視する指摘も見受けられるが、本論ではこれ以上の言及は差し控える。

また、川上貢氏の既往の研究によると、正保2年（1645年）に当時作庭家として著名であった玉淵という人物に作庭を依頼したという記録も残っている。川上氏はこのとき東庭を補修したということを推測しているが、詳細なところは明らかになっていないということを補足しておく。

建築の配置に関して考察する。この大仙院は今まで述べてきたものと比べ、方丈が立地する敷地の性質が大きく異なる。現在の方丈を示した平面図を次頁内図26に示す。なお、昭和中期に重森三玲氏により、作成された図面においては、方丈東側の透渡廊の箇所が描写されていない。なぜなら、この透渡廊は昭和初期には存在しなかったが、江戸時代に作られた起絵図、さらには明治初年の境内配置図からもその存在が明らかとなり、昭和36年の改修工事にて復元されたからである。よって、ここで提

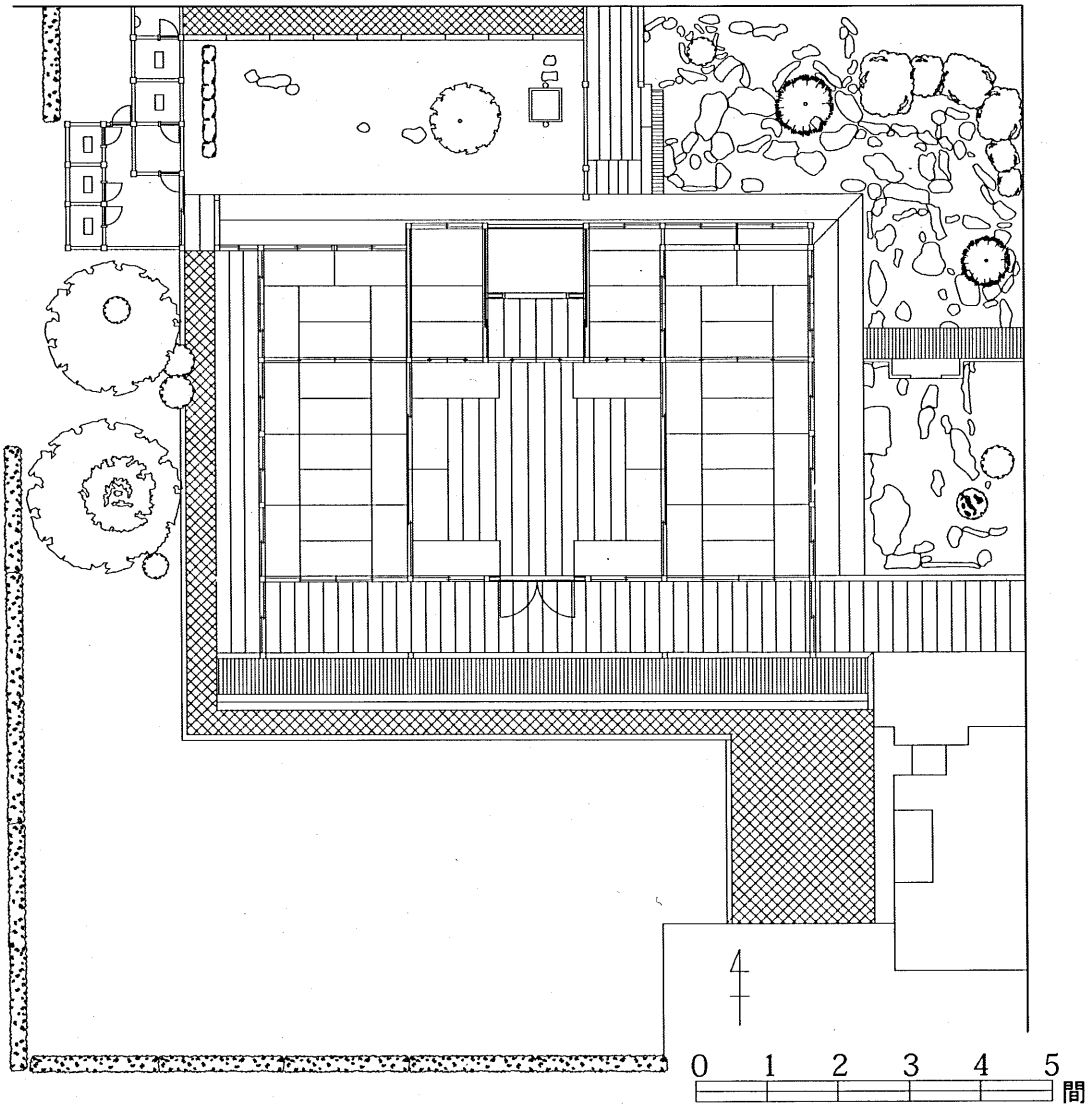

図 26　大仙院　平面図

示した平面図は重森氏による庭園部分の実測図面と京都府教育委員会による国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書所載の平面図を重ね合わせて、筆者が作成したものである。また、西側庭園に関しては、近年に改修の手が加わり、植栽は何もなく白砂のみ敷かれた状態であるが、この図には重森氏の図面のまま記入した。後に書院間に対する相対的考察を行う際にも、この図を用いるが、西側は特に触れないため、この図でも分析に支障がないということを予め断っておく。

敷地に関する話に戻るが、この平面図（図 26）を見ても明らかなように、まず敷地の面積が極端に狭い。大徳寺境内は塔頭が密集しているため、北側の塀の向こうはすぐに別の塔頭が差し迫っているのである。北東側の庭園部分の面積は約 70 平米に

図 26　建築部分は『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課 1961 年）所載の平面図を基に、庭園部分は重森三玲著『実測　日本の名園』（誠文堂新光社　1971 年）所載の平面図を基に作図

して、北側の奥行きはおよそ３間、東側の奥行きは２間半しかない。そして、これまで述べてきた方丈は山の麓に建てられたものであったが、大徳寺境内は地形の起伏もない。そのため、南禅院などのように、山の斜面を庭園の背景として取り込み、深山幽谷な雰囲気を表現するといったことも出来ないのである。

そして、この書院庭園を撮影した写真（図 27）を見ても、そこに実際の水を用いた池泉は見受けられない。そして、この写真を見ても明らかであるが、これまで述べてきた南禅院や天龍寺のような具象的な山水とは程遠い庭園空間が広がっている。しかし、実際の水を用いていないから山水ではないかと言うと、それは違う。物理的、あるいは視覚的には景の簡素化、省略が行われているが、胸中にて山水を展開させることを意としているのである。つまり、人間の持つ精神というフィルターを通すことで、それは実なる自然となるのである。

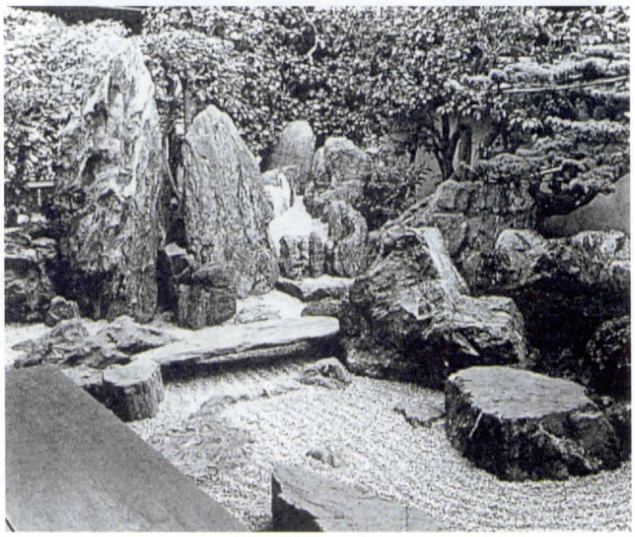

図 27　大仙院　書院庭園

では、石組の細部と庭園の空間構成に関して言及しよう。

写真 27 を見ても分かるように、北東側に滝石組が組まれている。巨大かつ垂直方向に筋の入った石組を組み、そこから落ちてくる水が表現されている。普通、枯滝というものは、３つの石を平行に立てて組み、中心の石が水を表現する石、左右の二つが添え石となり、滝が表現されるものである。もしくは、３個以上の複数の石が組まれて滝が表現されるものであるが、この大仙院に関しては敷地の狭さもあり、２つの石を組むことで滝が表現されているのである。そして、さらに特筆すべきことが、その右側の観音石のすぐ脇に、まるで険しい渓谷から水が流れ落ちてくるように、石を段上に組んで高低差を作られ、そこに白砂が敷かれているのである。さらに、この渓流の奥には滝石組が組まれている。水の流れが二筋あるのである。深山を表現するために、このような演出を為しているものは他に類を見ないだろう。それに加えて、滝石組から水が流れてくる途中にそれを跨ぐように石橋を配置することで、あたかもそこに水があるかのように、メタファーを強化しているのである。このように作庭を行える範囲が狭小の空間であるが故に、視覚的な観点からいえば極度の簡素化が図られているが、それでも滝石組や白砂を以て山水を表現しようとしたのである。

図 27　中根金作著『京都名庭百選』（淡交社　1999 年）より

書院間室内に着目すると、北側に床が設置されているが、かつてはこの床の手前側に襖戸が設えられ、納戸として使われていたことが分かっている。そして、その襖戸が東京国立博物館に寄贈され、現在襖戸が設えられていないため、床のような状態となっているのである。しかし、納戸あるいは床のどちらにしても、珍しいことに奥の壁が開閉式の板戸となっている。この様子を撮影した写真を図 28 に示す。この写真のように納戸を開閉可能にすることで、先に述べた滝石組を室内から一望できるのである。このように、狭小な空間に作庭しなくてはならなかったにも関わらず、その空間を最限に活かせるように建築を操作していたことが分かる。

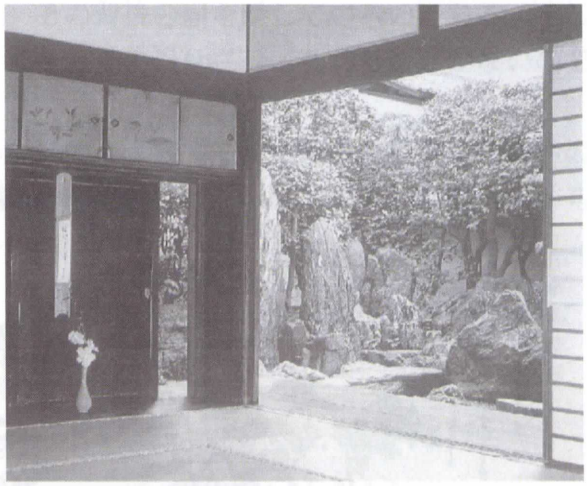

図 28　書院間室内から見た庭園

また、書院間と庭園を南北に切断した断面図中に、人が室内に座り庭園を見たときの視界の範囲を表したものを図 29 に示す。この図を見ると、先に述べた滝石組の背

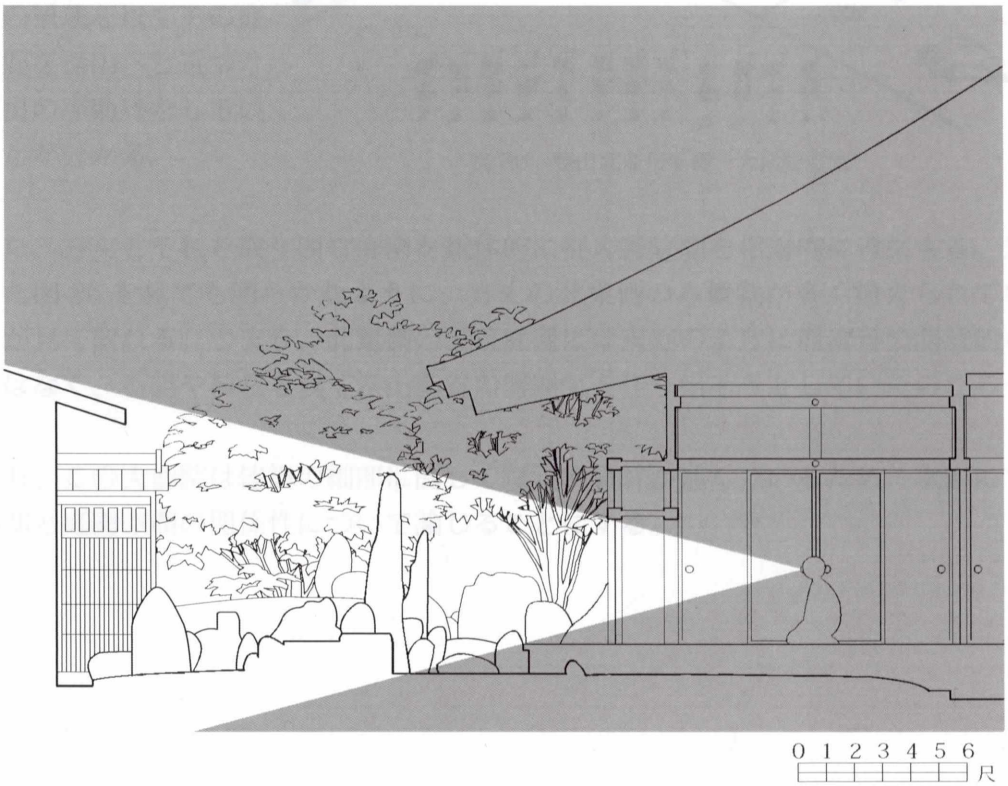

図 29　大仙院断面図中に書院間からの視界範囲を記入した図

図 28 『大仙院（パンフレット）』（出版者、出版年不詳）より

図 29 『日本の庭園美 5　大仙院』（集英社　1989 年）所載の大仙院庭園断面図と『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課 1961 年）所載の断面図を基に作図

後には丈の高い樹木が植栽されていて、室内から庭園を見たときに空が視界に入らないような構成となっていることが分かる。加えて、この樹木の樹種にも着目しよう。滝石組背後に植栽されたこの樹木は常緑樹であり、なおかつ比較的葉の量も多い椿である。このように、葉の多い樹木を以て、その背後の塀を隠しているのである。そして常緑樹であるため、季節が移り変わっても、その景はさほど変わることがないのである。

さらに、創建当初に近い時代の状況を復元的に考察するために、築山庭造伝の中の大仙院の絵図（図 30）を挙げる。この絵図を見ても明らかなように、創建当初から石組の背後には葉の多く、手前にある石組よりも丈の高い樹木が植栽されていたことが分かる。つまり、庭園空間を表現する際に、見立てというメタファーを用いることで物理的要素の簡素化を図りながらも、一方で石組の背後の植栽を以てその庭園空間を深山へと近づける演出の手助けをしていたことが分かる。

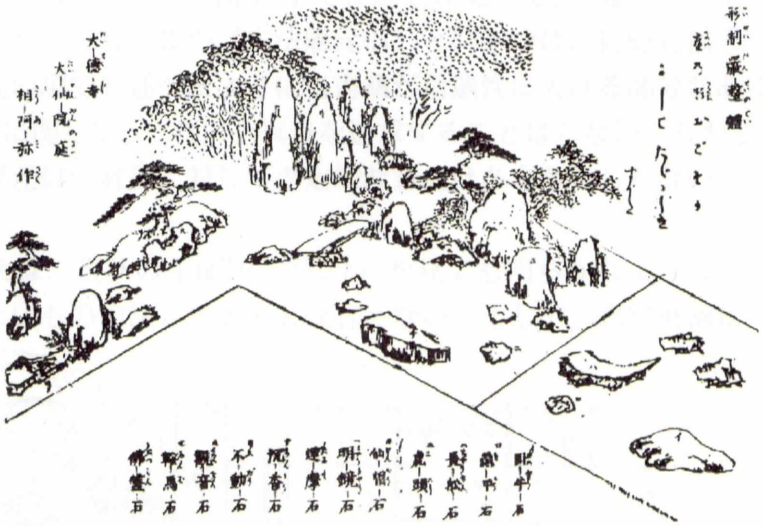

図 30　築山庭造伝所載　大仙院庭園

また、方丈とそれを取り囲む庭園を総体的に捉え書院間を相対的に考察する。先に示した図 26 を見ても明らかなように、方丈の北東側のみ植栽が多く植えられていることが見て取れる。つまり、北東側の書院庭園には南庭のように簡素且つ開放的なものではなく、石組や植栽を以て深山幽谷の雰囲気を作り出そうとしていたのだろう。

なお、この大仙院は建築の細部に関して復元的研究が進んでいるため、次節にて建築細部と庭園空間の関係性について論じることにする。

図 30　上原敬二編『築山庭造伝（前編）』（加島書店　2008 年）より

退蔵院

退蔵院は妙心寺境内にあり、山門付近西側に位置する塔頭である。

本院は、応永 11 年（1404 年）に波多野出雲守が妙心寺第三世である無因和尚のために建立した寺院である。応仁の乱により荒廃するが、後の時代に亀年和尚により再興される。

方丈に関しては慶長 7 年（1602 年）に創建されたものであり、庭園も同時期に作られたものと推察される。作庭者に関しては狩野元信と言われているが、これを確証づける史料に欠く。ちなみに都林泉名勝図絵の中で作庭者に関して、『庭中ハ画聖古法眼元信の作なり』と記されている。この『古法眼元信』というのは、狩野元信のことを指す。しかし、大仙院の項でも述べたように当書籍が信憑性に欠ける部分があるため、本論文内では作庭者に関して、これ以上真価を追求することはしない。しかし、後世の研究を見ても、狩野元信作庭説に対して否定的な意見はあまり見られない。

まず、敷地に関して言えば、現状の平面図（図 31）を見ても明らかなように、大仙院ほど狭小の庭園ではないものの決して広大とは言えない。そして、書院庭園に

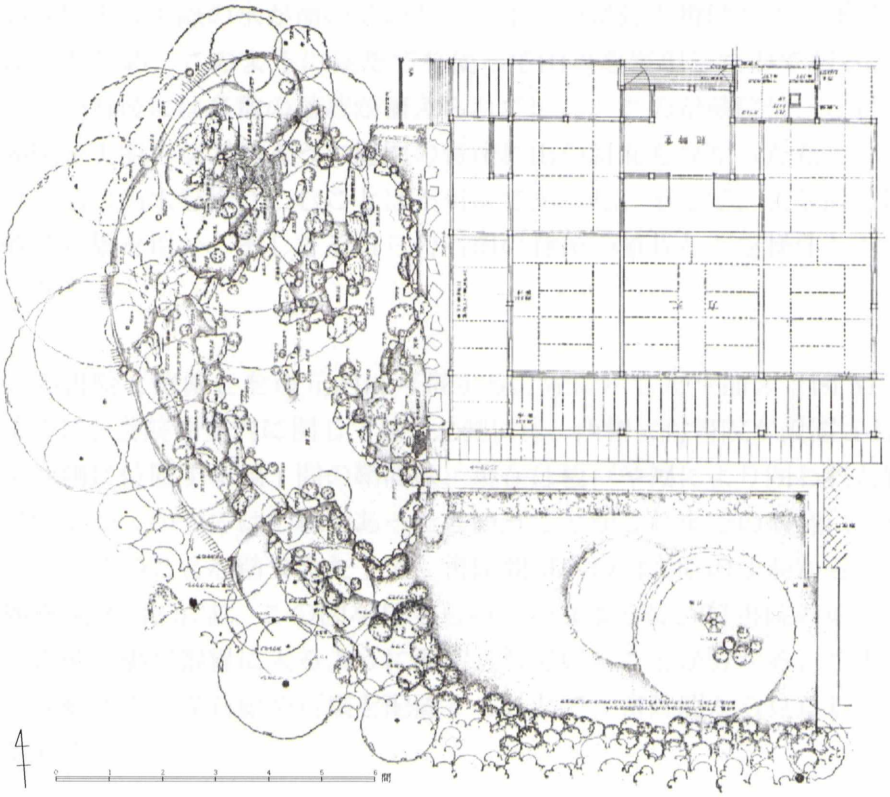

図 31　退蔵院　平面図

図 31　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 6』（社会思想社　1974 年）より

図 32　退蔵院　書院庭園

関しては、書院庭園を撮影した写真（図32）を見ても明らかなように、大仙院同様、石組にて滝、白砂にて水の流れが表現されている。この滝石組から流れ落ちた水を表現している白砂は、先に示した図 30 からも明らかなように途中で二手に分かれている。そして、この二手に分かれた流れの途中にそれらを跨ぐように石橋が組まれている。このように、石橋を配することで白砂がより水らしく見えるよう、メタファーの強調が図られているのであろう。妙心寺境内は実際の水が湧いていなく、また退蔵院の敷地がそれほど広大なものではなかったため、このように見たてを使って山水を表現したのである。さらに、これらの石組の背後には多数の植栽が植えられている。この退蔵院は、これまで論じてきた南禅院や天龍寺などのように庭園の背後に山の斜面もなかったため、実の自然を用いた具象的な山水を作りこむことは不可能であった。そこで、大仙院と同様に滝石組や白砂や石橋を用い、そしてそれらの石組の背後の植栽などを操作し、山水を表現したのであろう。

また、この書院と庭園とを復元的に考察する。先に示した平面図（図 31）を見ても分かるように、書院間室内に関しては、北側に床、西側に付書院が設置されている。また、方丈西側に位置する幅 1 間の鞘間は、現在は板戸や襖により囲われた細長い室内となっているが、かつては広縁であったということがこれまでの研究により明らかになっている。そのことを踏まえた上で、書院間室内の付書院の手前から庭園を見た視界の範囲を図 33 に示す。この図を見ても明らかなように、付書院の前に座ったときに、滝石組や石橋が視界に入るように配置されていることが分かる。つまり、付書院から見える範囲内に滝石組や石橋を配置することで、書院間から見た景に山水をつくったのである。

図 32　著者により撮影

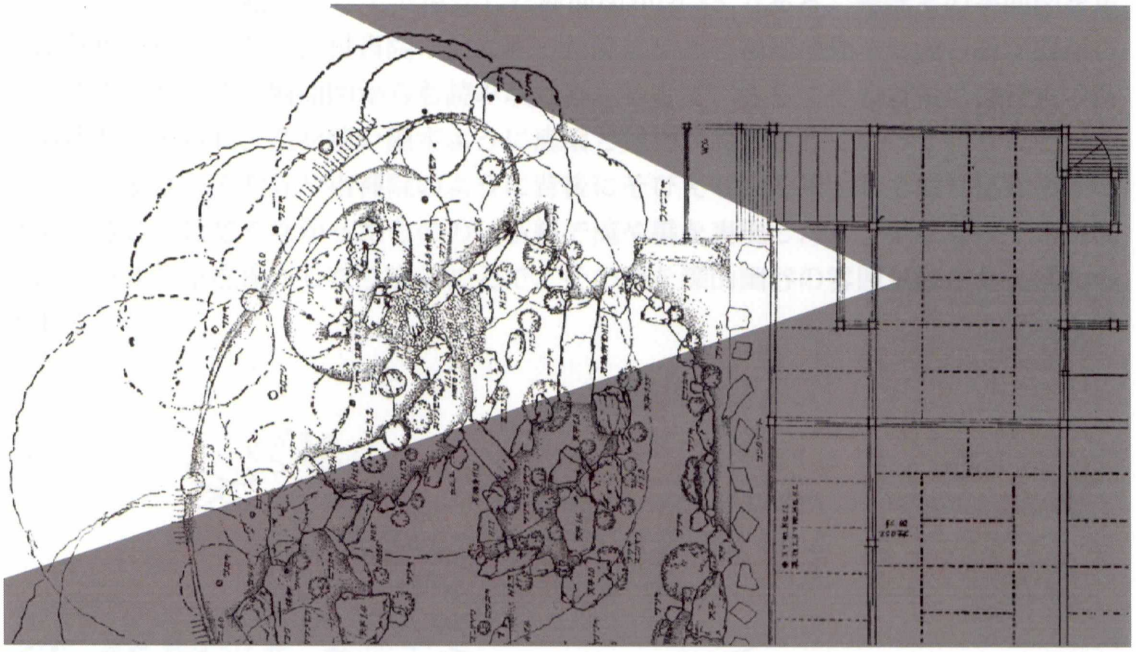

図 33　退蔵院平面図中に書院間からの視界範囲を記入した図

さらに、庭園に関しても復元的考察を行う。都林泉名勝図絵にこの退蔵院を描いた絵図(図 34)が掲載されていたため、その絵図も踏まえた上で復元し考察をする。なお、都林泉名勝図会は 1799 年に刊行されたため、おそらく江戸中期くらいに描かれたものであろう。つまり、退蔵院が建立され、書院庭園が作られてからそれほど時間差がない時期に描かれたものと捉えてよいだろう。そして、この絵図を見ると、石組の背後には丈の高い樹木が植栽されていたということが分かる。

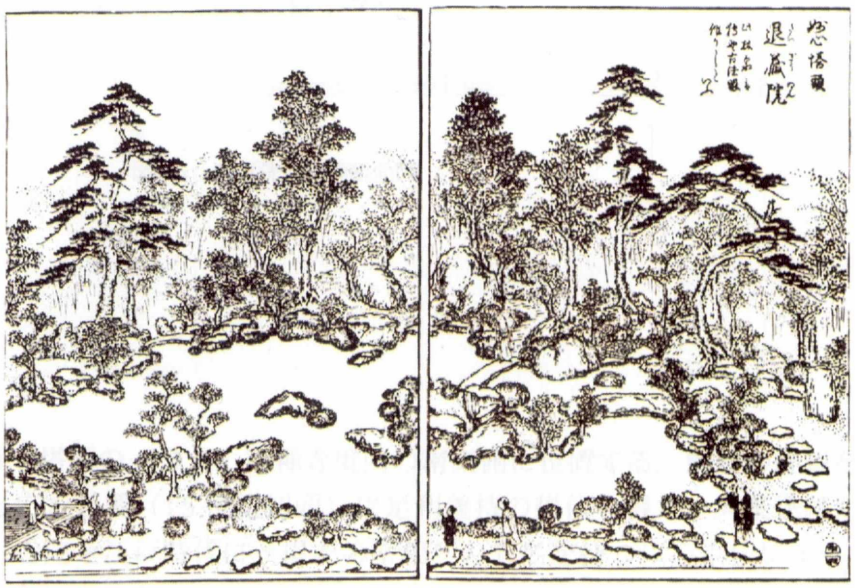

図 34　都林泉名勝図会所載　退蔵院絵図

図 33　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 6』(社会思想社　1974 年) 所載の退蔵院平面図を基に作図
図 34　『新修　京都叢書』(臨川書店　1968 年) より

これらのことを踏まえた上で復元した断面図が図 35 である。先ほどの平面図を用いた分析でも述べたが、付書院の前に座った際に、その視線の先には滝石組が置かれていることが、この断面図からも読み取れる。そして、さらにその背後には背丈の高い植栽が植えられ、空を覆い隠すように庭園と建物が設計されているということが分かる。つまり、天龍寺や南禅院のように背後にそびえる山を景として取り込むように作庭することはできなかったものの、石組で滝や橋を表現したり、植栽を以て書院間内から見える景を操作したりすることで、その景を深山幽谷の雰囲気に作り上げたのである。

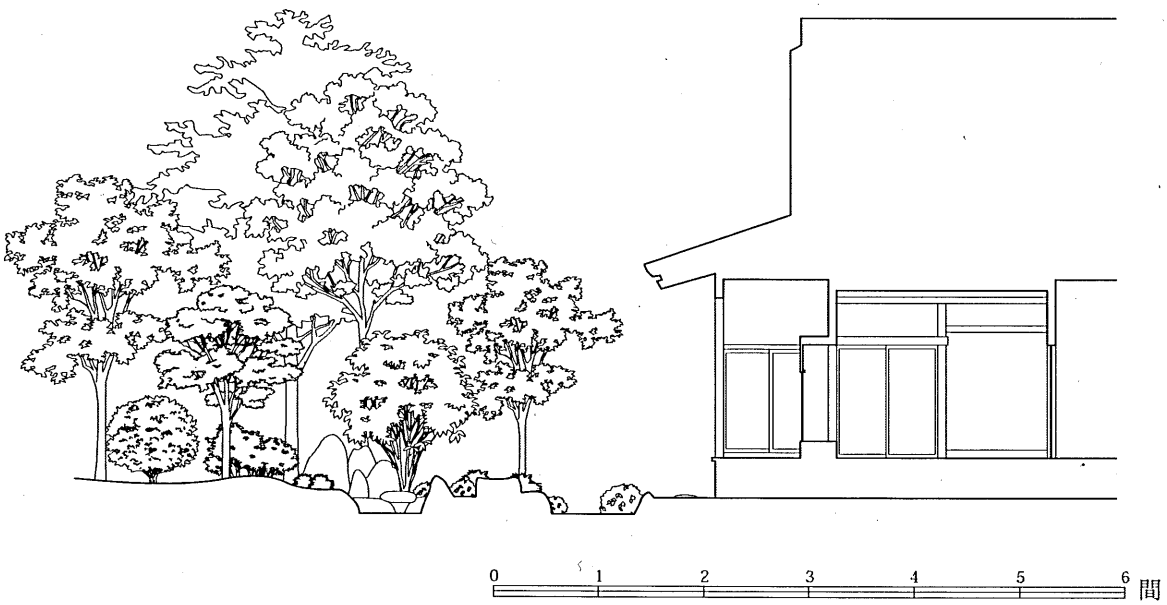

図 35　退蔵院　庭園断面図

金地院

この金地院は南禅寺塔頭の一つで、南禅寺境内の南東側に位置する。創建の経緯を述べると、もともと応永年間（15 世紀初頭）に足利義持の帰依を得て、大業徳基が洛北に開山した禅宗寺院を江戸時代に『黒衣の宰相』の異名を持つ以心崇伝により、現在の場所に移され今日に至る。

方丈に関しては、慶長 16 年 (1611 年) に徳川家光から伏見桃山城の一部を賜り移

図 35　建築部分は『重要文化財退蔵院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課　1974 年）所載の平面図を基に、庭園部分は著者により作図

築したものと言われているのが主流であるが、以心崇伝自身の日記の中でその移築あるいは建立に関する記述が見られないため、疑問視されている側面もある。ただし、寛永４年（1627 年）の日記には大方丈に関することが記されているため、その頃には既に建立が完了していたと見てよいだろう。

庭園に関しては、重森三玲氏の著書である『日本の名園』や、金地院住職である佐々木玄龍の著書『金地院（京の古寺から）』を参照すると、以心崇伝の日記の中で、寛永６年(1629 年)に小堀遠州に作庭を依頼し、翌年７年に賢庭に依頼したことが分かっている。ちなみに、賢庭というのは庭造りの施工において名を馳せた人物である。そして、寛永９年（1632 年）に金地院の庭が完成したということが記されている。

まず、配置に関して考察する。昭和中期に重森三玲氏に作成された平面図を図 36 に示す。なお、建築の表記の仕方を統一するために、建築部分の平面図のみ著者によ

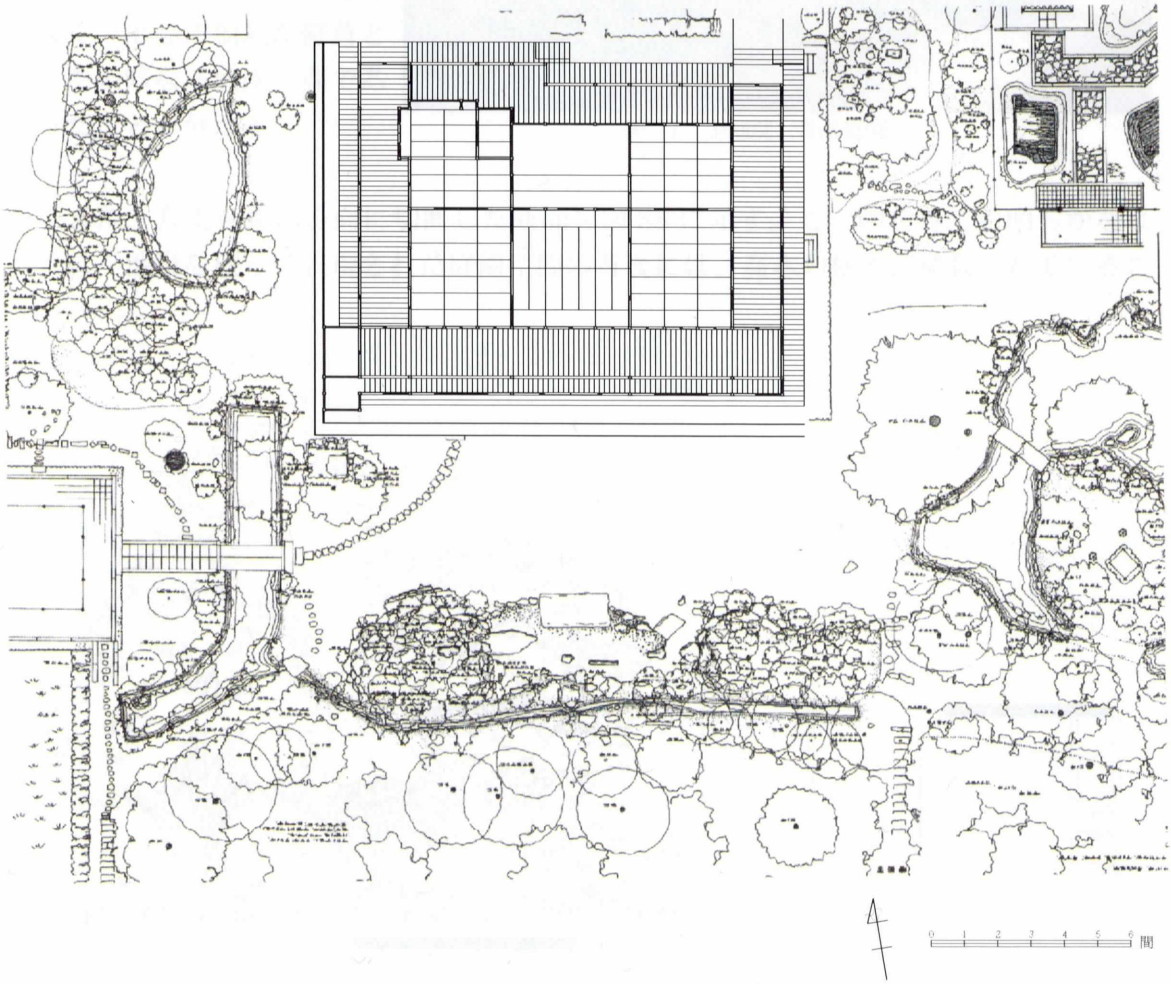

図 36　金地院　平面図

図 36　庭園部分は重森三玲著『実測　日本の名園』（誠文堂新光社　1971 年）所載の金地院平面図を転載し、建築部分は北尾春道著『国宝書院図聚』（洪洋社　1938 年）所載の金地院平面図を基に作図

り描画し重ね合わせ掲載した。この図を見ても明らかなように、書院庭園に実際の水を用いた池泉、そしてその奥には多量の樹木が植栽されていることが分かる。書院庭園を相対的に考察するために方丈全体を捉えると、南庭は白砂を用いて開けた空間が作られ、その奥には鶴亀の石組や遥拝石などを配し庭園空間を表現しているのに対し、北東側の書院庭園ではそういった見立てを用いずに抽象度の低い山水を作っていることが分かる。現在の東側の庭園の様子を撮影した写真が図 37 であるが、これと先に示した平面図（図 36）とを比べても植栽の様子にそれほどの相違はなく、そして植栽が鬱蒼とした幽暗なる庭園空間であったことが分かる。

図 37　金地院　書院庭園

また、方丈を東西方向に切断した断面を図 38 に示す。この図を見ても明らかなように、池泉を使って表現された庭園空間の背後には、高木の樹木が植栽されているこ

図 38　　金地院　庭園断面図

図 37　著者により撮影

図 38　建築部分は北尾春道著『国宝書院図聚』（洪洋社　1938 年）所載の平面図を基に、庭園部分は著者により作図

とが分かる。このように、やはり書院間から庭園を見たときに空が見えないように深山幽谷な雰囲気を作り込んだのであろう。

ちなみに、先に挙げた南禅院や天龍寺のように方丈の向きを傾けてまで東山を深山としなかったのは、当時東山は荒山であったため、いくら書院間を東山のある南側に向けたところで、庭園の景として取り込める自然は深山幽谷なるものではなかったからであろう。

高桐院

この高桐院は大徳寺塔頭の一つであり、境内の西側に位置する。開山に至る経緯と、現在までの沿革について述べる。慶長7年（1602年）に細川三斎を開祖とし、玉甫紹琮により開山される。明治時代の廃仏毀釈で一度荒廃しているため、現在の方丈はそれ以降に再建されたものである。なお、庭園に関しては、創建当初の状態を示す史料がないため、現在の庭園がどの程度まで復元されたものであるかを明らかにすることは困難である。

まず、敷地に関して考察をするために、大徳寺境内の様子を示した配置図を図39に示す。これを見ても分かるように、この高桐院は大徳寺境内の他の塔頭と比べて、比較的広い敷地を有しているものの、先に述べた天龍寺や等持院などと比べるとその敷地の狭さは歴然であり、庭を作る上で十分なものとは言えない。また、大徳寺境内のある紫野周辺はなだらかな傾斜がついているものの、この高桐院の敷地内にはほとんど高低差が見られない。

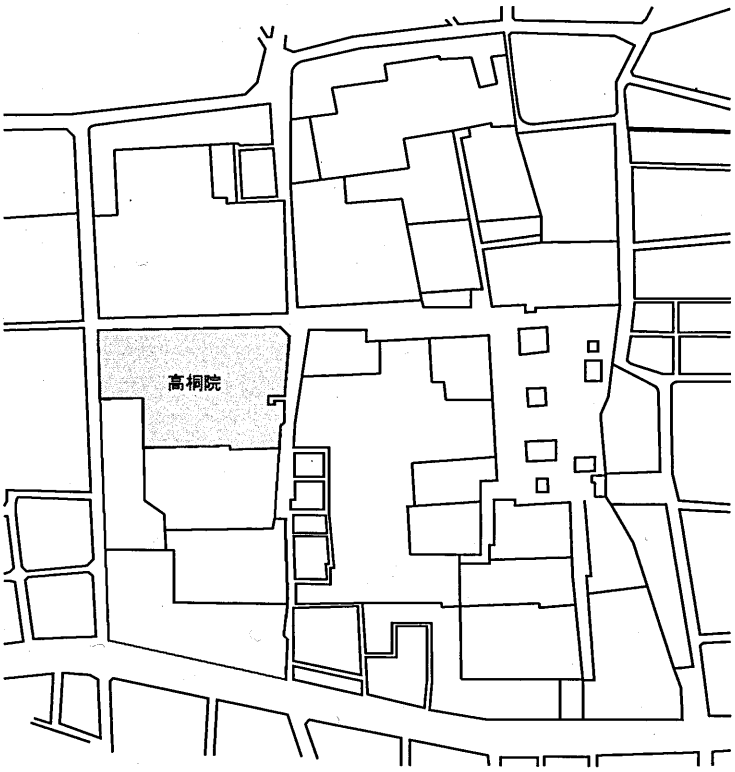

図39　大徳寺 敷地割図

図39 『日本古寺美術全集　第23巻　大徳寺』（集英社　1979年）所載の大徳寺寺域現状図より作図

そして、現在の平面図（図 40）を見ても明らかなように、書院間内の北側に床、東側に付書院が設置されている。そして、その付書院の先には、実際の水を用いた池泉がある。書院間内から付書院を介して庭園を見たときにこの池泉が視界に入るように配置されていることが分かる。

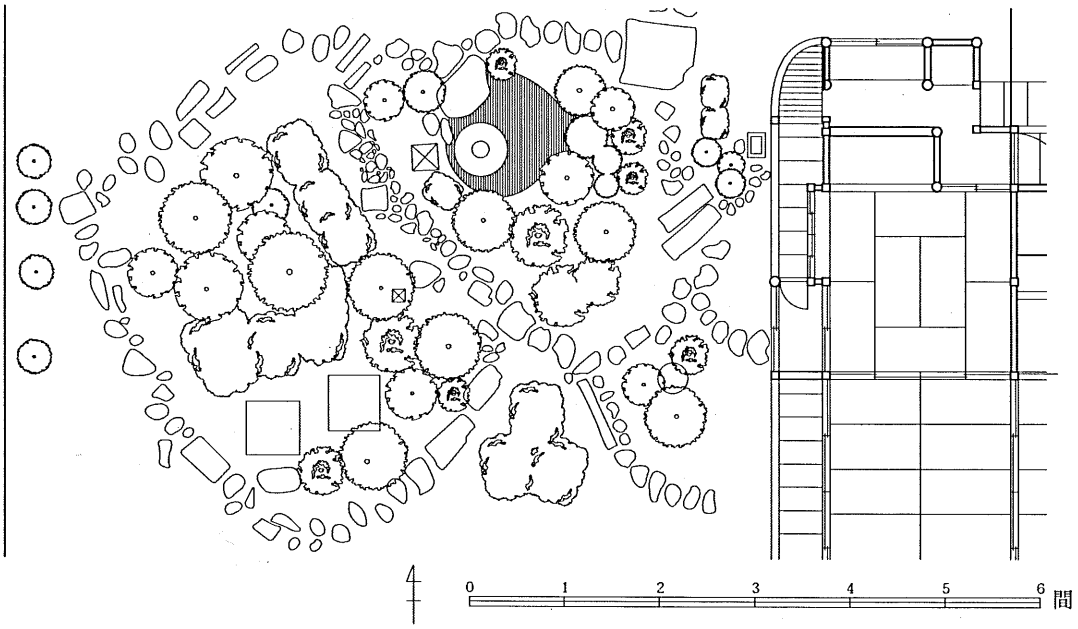

図 40　高桐院　書院間 - 庭園平面図

方丈を東西方向に切断した断面図（図 41）を見ると、付書院の先には方丈付近に一本の楓が配され、少し空間を空けてから、その奥に植栽郡が広がっていることが分

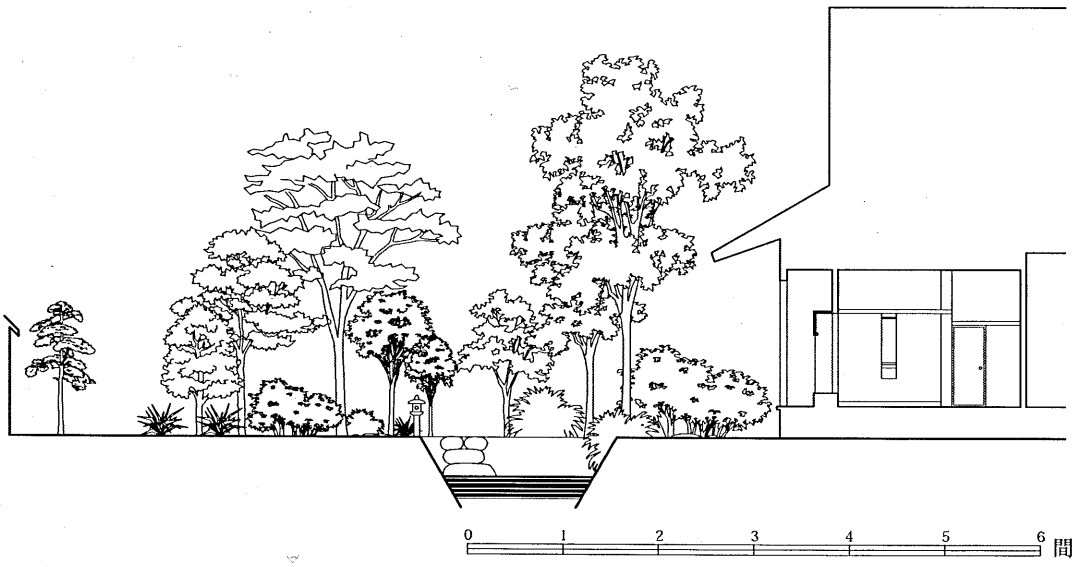

図 41　高桐院　断面図

図 40　著者により実測、作図

図 41　著者により実測、作図

かる。付書院を介した景を撮影した写真が図 42 であるが、まるで山水画の如き景がそこに展開されている。前述したが、この高桐院は大徳寺境内に立地しているため、それほど広い敷地でもなく、また、天龍寺のように庭園空間の背後に深山幽谷の雰囲気を作り出せるほどの地形の高低差もない。しかし、それにも関わらず、付書院の先に映る景には、このように具象的な山水が表現されているのである。

図 42　書院間内の付書院を介して見た庭園

加えて、先に示した先に示した平面図（図 40）の中で、方丈西側に飛び石が配置されていることが見受けられる。このように、書院庭園内に露地があるのも珍しい。こういったことからも茶の湯に重きを置いた庭園だということが分かる。もっとも、書院間内から見た景にこの露地が収まらないように配置されているということは言うまでもない。

また、方丈全体とその周囲の庭園を総体的に捉えて、書院間と庭園に対して相対的に考察する。南庭を撮影した写真（図 43）のように前庭には白砂が敷かれていなく、そこに 3 本の楓が植えられ、灯籠が一つ置かれて、そしてその背後は築地塀ではなく竹林が広がっている。これを見ても、この高桐院は他の塔頭と比べて

図 43　高桐院　南庭

図 42　著者により撮影
図 43　著者により撮影

少し性質が異なるものであることに気付かされる。さて、しかし南側の空間を踏まえた上で書院庭園を相対的に見ると、やはりの『ハレ』を意味する前庭は簡素な空間が表現されているのに対し、『ケ』の空間である書院庭園というのは多量の植栽を以て具象的な山水が表現されているということが分かる。

2.2 建築細部の意匠に関する考察

序説

本節では、書院間の建築細部の意匠について考察する。
前節で述べてきたことを踏まえて言えば、書院間から見た庭園を深山幽谷な雰囲気にするために建築の細部をどのように作り込んでいるか、ということについて論じようというわけである。
なお、創建当初の方丈がそのまま保存されている事例、あるいは復元研究が進んでいて細部に至るまで復元されている事例というのは限りなく少ない。前節で挙げた大仙院、金地院、その他には大徳寺塔頭の龍源院や東福寺塔頭の龍吟庵などもそれにあたるが、後に挙げた龍源院や龍吟庵の両者ともに庭園が後世に作りかえられているものであり、それに加えて、過去の状態を示している史料も見つかっていないため、方丈と庭園を一体のものとして捉えた考察が不可能であると言えよう。よって、その二つの事例は本論では採り上げないこととする。

また、上に記したような、庭園を見せるためにどのように建築を操作したのか、ということを明らかにする目的とは別に、次章にて書院間と書院庭園の意匠の潮流に関して論じる際に、建築に関する考察を含めるためにも書院間がどのような意匠を以て作られたかということに触れておく必要がある。高桐院の方丈に関しては、創建当初の状態で保存されているわけではないが、次章にて書院間と庭園においての空間表現の潮流について論じるために触れておく。

大仙院

まず、この大仙院の方丈の平面図を図 44 に示す。前節でも述べたように、納戸の奥の壁が板戸になっていることが珍しく、このような意匠を以て書院間内に景を取り込んでいたのである。

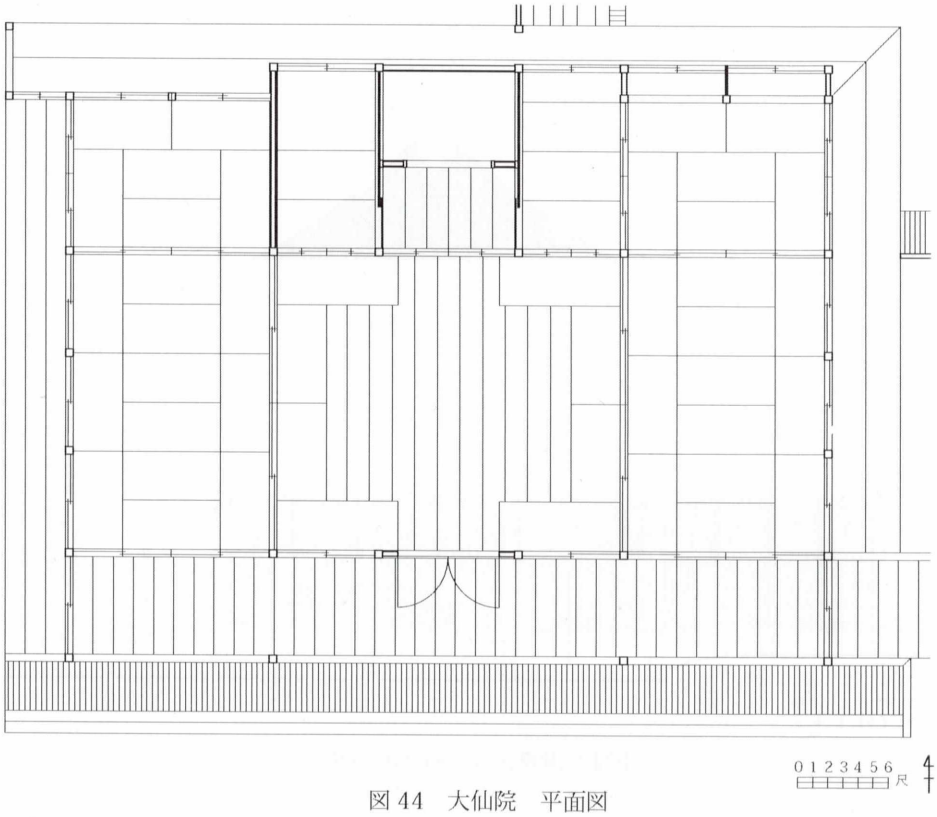

図 44　大仙院　平面図

さらに、この納戸の裏側に当たる北側の縁にも着目する。通常の縁は少なくとも幅半間以上はあるものだが、この方丈北側の縁は幅 2 尺半しかない。その様子を撮影した写真（図 45）を見ても分かるように納戸が突出している分、縁が狭くなっているのである。しかし、それでも板材を継ぎ足し、その幅を拡張させるような造作は見られない。

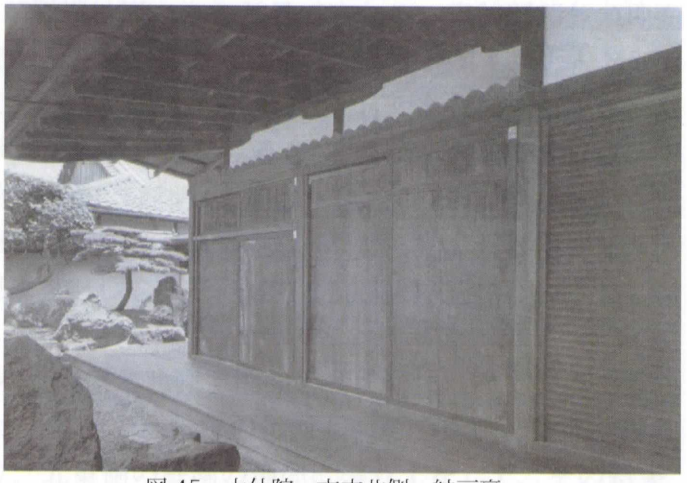

図 45　大仙院　方丈北側　納戸裏

図 44 『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課 1961 年）所載の平面図を基に作図
図 45　太田博太郎編『日本建築史基礎資料集成 16　書院 2』（中央公論美術出版　1974 年）より

これも、庭園空間を確保するために止むを得なかったことだと推測できる。

また、この方丈を東側から見た立面を図 46 に示す。この図から、北側の軒が約 3 尺張り出していることが分かる。このように軒を必要以上に張り出させることで、書院間の空を隠し、と同時に庭園空間を暗く、まるで深山のようにする操作をしていると言える。

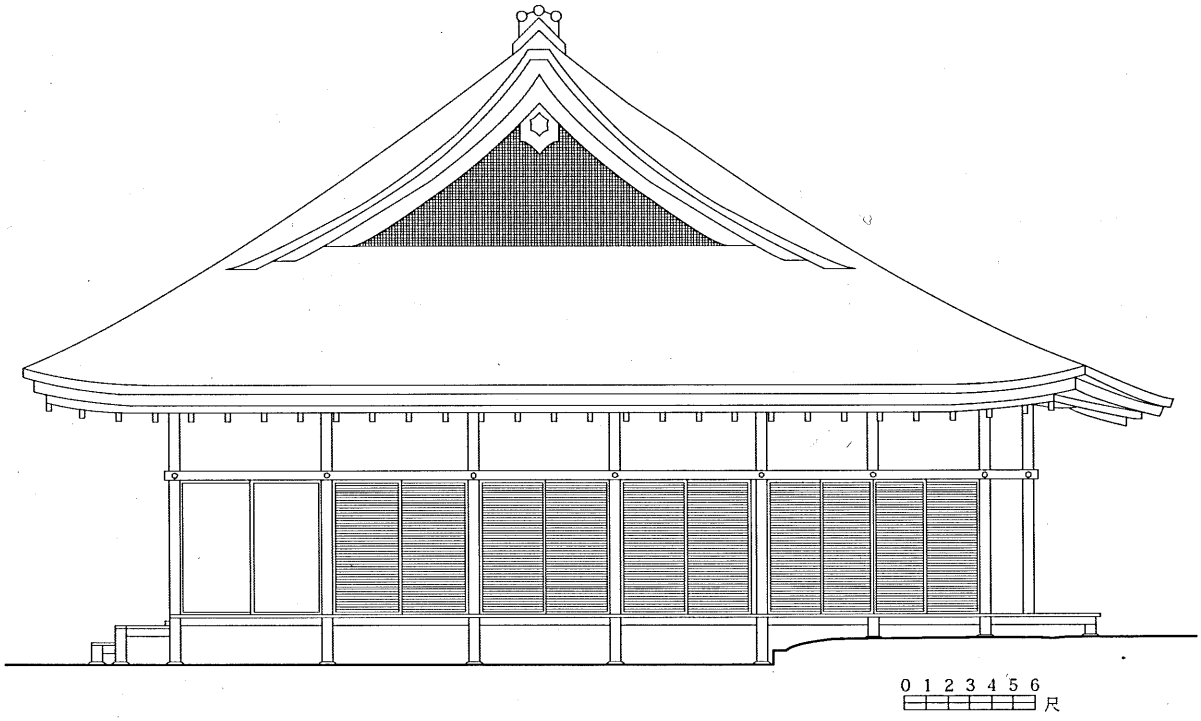

図 46　大仙院　方丈東側立面図

さらに図 46 より、縁側の床束が極端に短いことが見て取れる。書院間部分の地面から縁側までの高さが約 1 尺半であることが分かる。他の方丈を見てもほとんどが 2 尺以上あり、この大仙院は極端に短いことが分かる。また、江戸時代にまとめられた建築木割書である『匠明』内の『方丈』の項目を見ると、『高サハ大地ヨリ縁板ノ下マデ、柱四本畳ヘシ。』（伊藤要太郎校訂『匠明』 鹿島出版会　1971 年）という記述が見られる。つまり、方丈の建築において、柱 4 本分、すなわち約 2 尺が規範であったことが分かる。そして、この規範を犯してまで、室内と庭園とを近づけようとしていたこと

また、同じ立面図（図 46）から、南側と北側で地面の高さが異なっていることが見て取れる。書院間部分の床束は 1 尺半であったのに対し、その南側に位置する礼間の床束は 2 尺ほどある。つまり、北東側の庭園の地面に盛り土をして、その結果、

図 46 『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課 1961 年）所載の立面図を基に作図

書院間部分の床束を短くしたのである。このように、庭園を室内との高低差を少なくして物理的にも両者を近づけることで、自然と一体となろうとしたのだろう。

同じように、方丈内を総体的に捉えるべく、南側の部屋とも比較する。この方丈を南北に切断した断面を図 47 に示す。この図中で各室の天井高にも着目すると、礼間と書院間で天井高が異なることが分かる。ちなみに、退蔵院や龍安寺の方丈でも同様に書院間の天井高が南側の室よりも低くなっていたことが確認できた。つまり、書院間というのは、あくまでも個人のための空間であり、そして座ることを促しためにこのような意匠を施したのであろう。

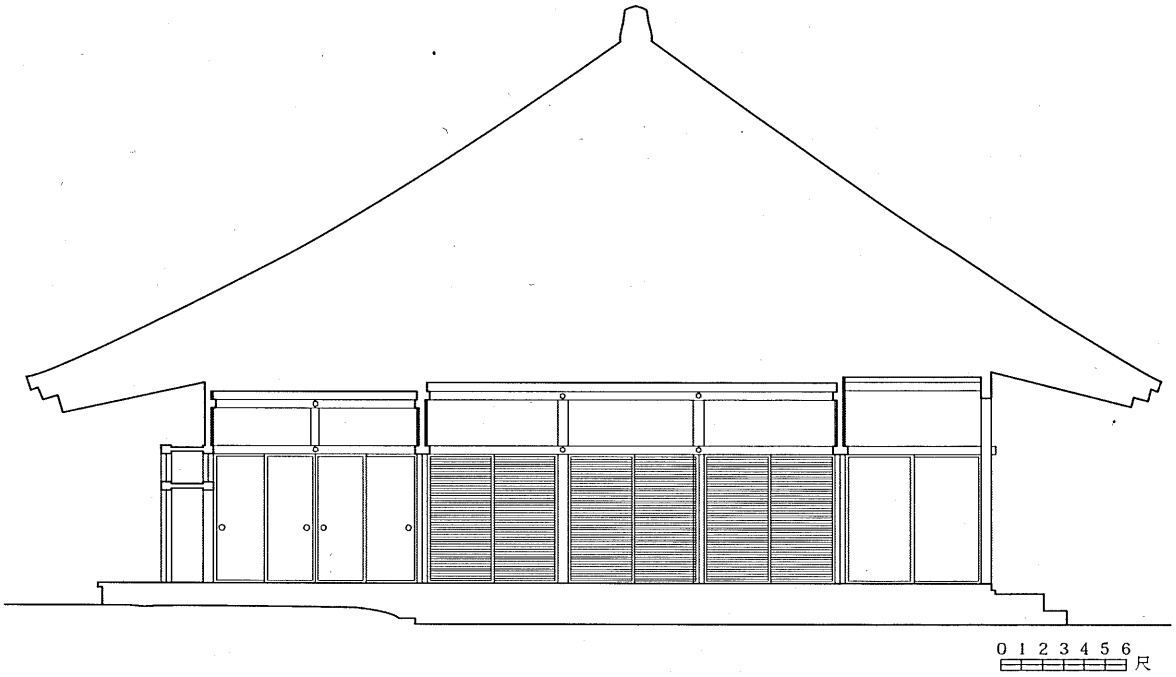

図 47　大仙院　断面図

さらに同じ断面図（図 47）に示した書院間と礼間の境界に位置する鴨居の上部に着目する。方丈南側の室中と礼間の境界や、室中と檀那間と室中の境界の鴨居の上部は欄間が取り付けられている。他の搭頭の方丈を見ても、この大仙院のように欄間が取り付けられているか、あるいは鴨居のみで何もない抜けた状態である。つまり、方丈の南側の三室に関しては、襖を全て閉めたところで、鴨居の上部が開いているため、密閉された空間にはならないのである。しかし、北側と南側の境界の鴨居の上部は小壁となっているため、書院間などは襖を閉めると空間が完全に分断されるようになっ

図 47 『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』（京都府教育庁文化財保護課 1961 年）所載の断面図を基に作図

ている。これも、書院間を隠遁の空間へと近づけるためのものであろう。

最後に、方丈の東側にある透渡廊について、ある仮説を言及しておく。先に示した平面図（図 44）よりも明らかであるが、方丈東側に花頭窓の設えられた庫裏へ通じる透渡廊がある。この透渡廊は江戸時代に作られた起絵図（図 48）に描かれていたため、その存在が確認されたが、それがどういった意図でそこに設えられ、どのように使われていたかは明らかになっていない。

図 48　大仙院本堂東石庭絵図

同じ図（図 44）を見ても分かるように、礼間付近に庫裏へ通じる廊下があるため、この透渡殿は利便性を考えても、その不自然さは否めない。しかし、太田博太郎氏が著書『京の禅寺（淡交新社　1961 年）』の中で興味深い説を残しており、それを要約すると、この方丈の東側に位置する透渡廊は、方丈内で南側の『ハレ』を意味する礼間と北側の『ケ』を意味する書院間を分断するためにあるということである。その説も説得力が有るが、私はそれに加えて、この透渡廊に関しては、北側に余計な光を採り入れないためではないかと推測している。その論拠は、前節にて述べた北側の軒だけ 3 尺張り出させたことを踏まえても書院庭園というのは、明るい日差しを差し込むような空間であってはならなかったということが推測できるからである。しかし、現在世に出回っている史料だけでは、仮説の域を出なく、今後の研究を深めていく必要がある。

この大仙院はこれまで述べてきた南禅院や龍安寺とは大きく異なり、極めて簡素化された見立ての山水であった。しかし、いくら見立ての山水とはいえ、建築にあらゆる工夫を凝らし、そこから見える景を深山幽谷な空間へと誘うための助勢が為されて

図 48 『日本古寺美術全集　第 23 巻　大徳寺』（集英社　1979 年）より

いたのである。

金地院

次に金地院方丈を見る。まず、この方丈の平面図を図 49 に示す。これを見ても明らかなように、床と付書院の設置されている箇所が上段間となっている。書院間内を

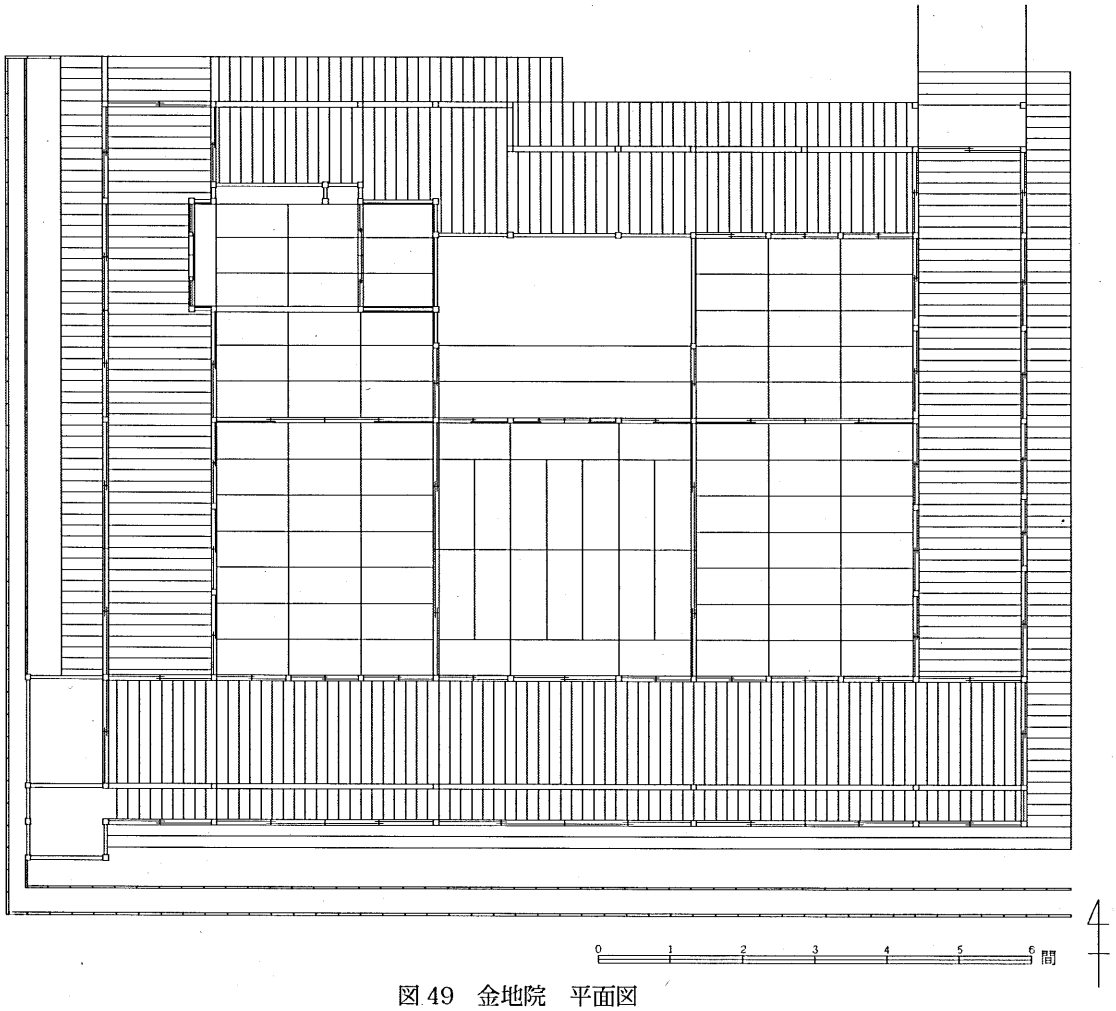

図 49　金地院　平面図

撮影した写真（図 50）を見ても、その様子が明らかである。また、この図 50 の中で特筆すべきことが、先に示した平面図（図 49）からも明らかであるが、付書院と対面する位置に武者隠しが設えられているということである。このように、禅宗寺院の方丈の中に武者隠しが設置されているものは他に存在しないであろう。

図 49　北尾春道著『国宝書院図聚』（洪洋社　1938 年）所載の平面図を基に作図

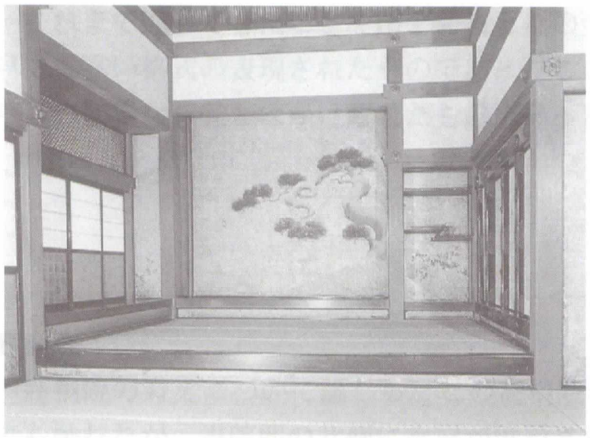

図 50　金地院　書院間内部

さらに方丈を南北方向に切断した断面図（図 51）を見ても明らかなように、天井は上段間の部分のみ折上格天井となっている。このように上段間部分が折上格天井となっていることや武者隠しが設えられていることを踏まえても、この金地院の書院間は高い格式が表現されたものであったことが分かる。

また、図 51 中の書院間とその南側の部屋にあたる次の間との境界に位置する鴨居の上部にも着目しよう。大仙院の項内では、この部分は欄間ではなく小壁としていると述べたが、この金地院の方丈に関しては、それとは異なり欄間が設えられている。すなわち、襖を全て閉めたところで、書院間が密閉された空間とはならないということである。このような構成をとっている方丈というのは、著者の知る限りでは、おそらくこの金地院くらいしか存在しないと思われる。そして、やはりこれも格式表現の一環であり、そこには折上格天井のように高い格式を示す筬欄間が用いられているのである。

図 51　金地院　断面図

図 50　『金地院（パンフレット）』（発行者、出版年不詳）より

図 51　北尾春道著『国宝書院図聚』（洪洋社　1938 年）所載の断面図を基に作図

これまで述べてきたことを踏まえるとこの金地院の書院間というのは、建築細部を見ても高い格式の表現されたものであったことが分かる。そして、それは同時に禅宗らしい簡素な意匠とはかけ離れたものであった。

高桐院

高桐院の方丈について論じる。この高桐院の方丈の平面図を図 52 に示す。前節内でも触れたが、書院間の北側に水屋が併設されているのが珍しく、茶の湯に重きが置かれた方丈であることが分かる。そして、この平面図よりも明らかであるが、西側の水屋付近に躙り口が設えられていることからも、同じことが言える。また、庫裏から方丈に入るときも一度暗く狭い空間を通ることがこの平面図を見ても分かるが、このような動線計画も茶室のそれと相通じる部分がある。

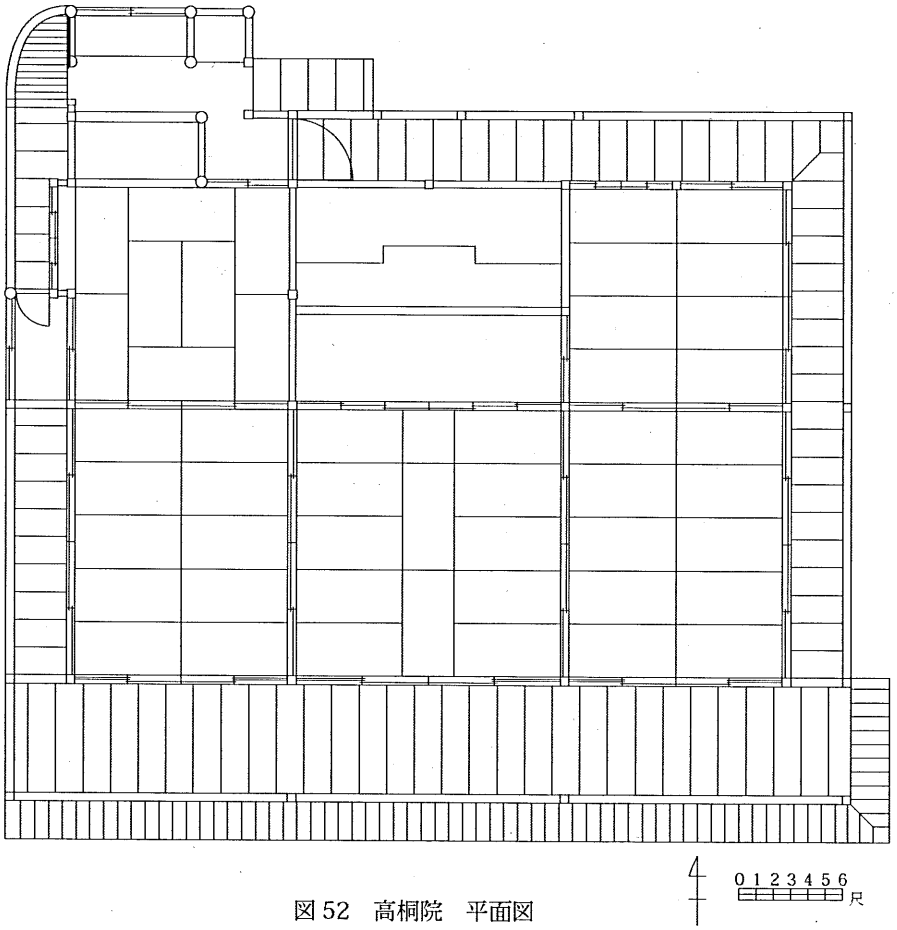

図 52　高桐院　平面図

図 52　著者により実測、作図

さらに、天井に着目するため、書院間の天井の様子を示したものを図 53 に示す。半丸材を用いてこの図のように、格子天井と竿縁天井を組み合わせたような天井に仕上げている。さらに図からも明らかなように、床の部分の天井は網代天井となっている。このことから、数寄風な意匠を採り入れた書院間であることが分かる。そして、現在書院間内に敷かれている畳には炉が切られていないものの、図中中央左下部に図 54 のように釣り釜を吊るすための蛭鉤が設えられていることも確認できた。

また、天井だけでなく、床柱に自然材調のものを用いていることも特徴的である。加えて、方丈の壁を仕切るものというのは通常は襖であるが、この高桐院においては土壁となっているのも数寄風な意匠の表れだと言える。

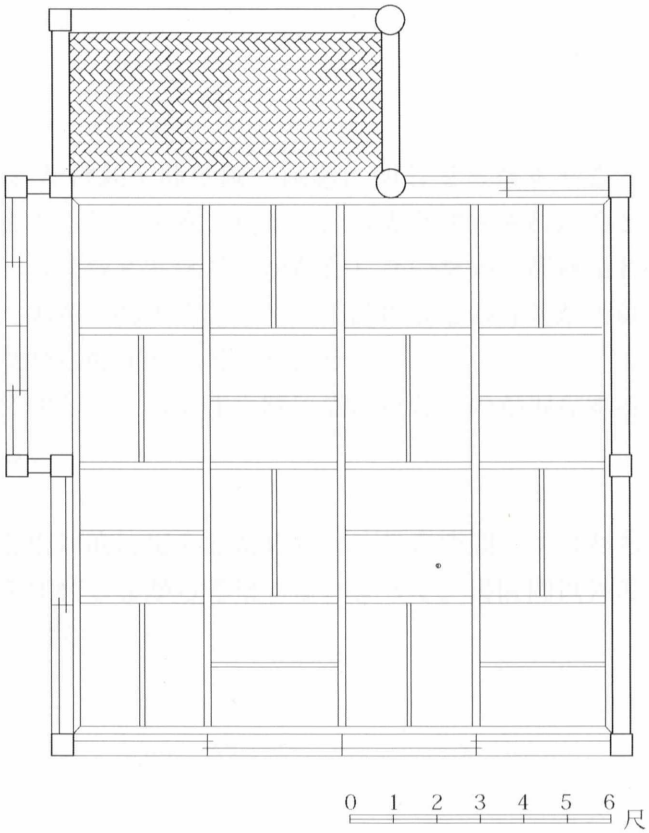

図 53　高桐院　書院間天井図

図 54　書院間内蛭鉤

図 53　著者により実測、作図
図 54　著者により撮影

2.3 襖絵に関する考察

序説

本節では、方丈内の書院間に描かれた襖絵や障壁画の画題に関して考察することで、その空間に何を求められたのかを明らかにする。しかし、方丈が建立されたのと同時期に描かれた襖絵が現存するケースは数えるほどしか存在しないため、都林泉名勝図会所載の各塔頭内の襖に描かれた画題に関する記述や宝山誌抄などの寺院が所蔵する古書を基に作られた資料を用いながら復元的に考察を行う。
なお、それ以外で金地院方丈の襖絵に関しては方丈建立時に描かれたものが現存するため、考察の対象に含めることとする。

また、この分析においても書院間を相対的に捉えるために、ハレの空間、すなわち南側の三室内の襖絵に描かれた画題を比較しながら考察する。よって、書院間以外の各室の襖絵の画題についても記載しておく。

それでは、まず都林泉名勝図会に記載された襖絵の情報に関して考察する。

この著書の中で、方丈の書院間において描かれた襖絵の画題に関して記載されているものを抜粋し、以下の表郡に示す。なお、前述したが、南側の三室とを比較しながら書院間を相対的に捉えるためにも、各室に描かれた襖絵の画題を表中に示す。ただし、ハレの室とケの室とを分類して考察するためにも記載された順序を入れ替えて掲載する。灰色で塗った箇所が南側の『ハレ』の室に描かれた襖絵を指す。また、前節でも述べたように、作者に関しては信憑性に乏しいが、一往記載しておく。

真珠庵

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	墨画花鳥	曽我蛇足
礼ノ間	墨画真ノ山水	曽我蛇足
書院	艸ノ山水	曽我蛇足
檀那ノ間	四皓	長谷川等伯
衣鉢ノ間	蜆子猪頭	長谷川等伯

大仙院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	墨画山水	相阿弥
礼ノ間	墨画耕作	狩野雅楽助
檀那ノ間	彩色花鳥	古法眼
衣鉢ノ間	墨画祖師之図	古法眼
大書院	朱買人西王母、太公望	古法眼

金鳳山天瑞寺

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	惣金彩色松一式	狩野永徳
礼ノ間	同彩色竹一式	狩野永徳
檀那ノ間	同彩色桜一式	狩野永徳
衣鉢ノ間	同彩色菊一式	狩野永徳
大書院	墨画山水	狩野永徳

高桐院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	墨画樹木一式	長谷川等伯
礼ノ間	柳駈馬	長谷川等伯
檀那ノ間	蠶室図	長谷川等伯
衣鉢間	千鳥図	長谷川等伯
大書院	山水	長谷川等伯

玉林院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	墨画山水	狩野探幽
礼ノ間	墨画山水	善朴
檀那ノ間	七賢四愛堂	永真
衣鉢ノ間	琴碁書画	洞雲
大書院	墨画鶴	探幽

大光院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	墨画七賢四皓	永真
礼ノ間	墨画夏ノ景	永真
檀那ノ間	墨画秋ノ景	永真
衣鉢ノ間	墨画冬ノ景	永真
大書院	墨画春ノ景	永真

芳春院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	落彩色祖師図	探幽
礼ノ間	墨画獅子牡丹	探幽
檀那ノ間	落彩色四愛堂	探幽
衣鉢ノ間	墨画山水	探幽
大書院	落彩色花鳥	探幽

龍光院

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	庵松仙人	等顔
礼ノ間	松仙人	等伯
檀那ノ間	真山水	等伯
衣鉢ノ間	金山寺図	等顔
大書院	草山ノ図	等顔

龍泉庵

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	西湖図	興意
礼ノ間	人物	興意
檀那ノ間	梅花	興意
衣鉢ノ間	耕作ノ図	興意
大書院	柳木（斗）図	興意

清泉寺

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	落彩色山水	等伯
礼ノ間	四愛堂	等伯
檀那ノ間	琴碁書画	等伯
衣鉢ノ間	山水	等伯
大書院	山水	等伯

寸松庵

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	曲水	探幽
礼ノ間	雪中山水	探幽
檀那ノ間	花鳥	探幽
衣鉢ノ間	西湖八景	探幽
書院	蒙求、袋棚　菓　茄子　葡萄　栗　瓜	探幽

梅岩庵

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	松竹梅	狩野典也
礼ノ間	花鳥	別不如閑
檀那ノ間	八景	別不如閑
衣鉢ノ間	人物	別不如閑
大書院	人物	別不如閑

高林庵

室名称	画題	作者
客殿中ノ間	山水	探幽
檀那ノ間	人物	探幽
礼ノ間	山水	安信
衣鉢ノ間	山水	益信
大書院	山水	安信

孤篷庵

室名称	画題	作者
客殿	山水	周信
礼ノ間	松竹梅	周信
檀那ノ間	松竹梅	周信
書院	山水	探幽

先に示した表郡を見ると、大仙院や玉林院や梅岩庵や芳春院を除いては、真珠庵では艸ノ山水、金鳳山天瑞寺では墨画山水、高桐院では山水、龍光院では草山ノ図、龍泉庵では柳木、寸松庵の袋棚には菓、茄子、葡萄、栗、瓜、そして、清泉寺、高林庵、孤篷庵では山水といったように草花や樹木、あるいは山水が描かれていたことが分かる。大光院では春の景といった、いずれも景に類するものが描かれていたことが分かる。また、話は逸れるが、この大光院のように方丈内の各室で春夏秋冬の景が描かれるように、方丈内で連関性を持った画題が描かれることもあったようである。

そして書院間を相対的に捉えるためにも、南側三室内に描かれた画題に着目すると、そこに山水図が描かれている事例もあるが、花鳥図、四皓図、耕作図、琴碁書画などの山水とは関係のないものが描かれていることも多くあった。このことを踏まえると、ハレの空間というのはそれほど山水を求める性質は感じられず、一方でやはりケの空間である書院間において、深山幽谷の空間に身を置くことを目指し只管山水図を描いたのであろう。

ちなみに、高桐院の書院間に関しては、現在は土壁であるということを前節でも述べたが、この都林泉名勝図会により、かつては山水図が描かれていたということが分かる。しかも、都林泉名勝図会の刊行年と高桐院の創建年を考えると、おそらく創建時の方丈内に描かれたものが山水図であったと推測できる。

また、大仙院の襖に描かれた画題に関しても考察をしよう。大仙院の表を見ても明らかなように、当書籍中に記載されている書院間内に描かれた画題は『太公望』と『朱買臣西王母』と記されている。しかし、実際は『太公望林和靖図』、『西王母東方朔図』、そして、北側の納戸に『朱買臣』が描かれている。もちろん、この名称から山水図、あるいは草花に関するものではないことは明らかであり、太公望、林和靖、西王母、東方朔、朱買臣の全てが人物である。すなわち、書院間内の全ての襖に人物画が描かれているのである。

さて、しかしこれらの襖絵に着目してみると、『太公望林和靖図』(図 55) や『朱買臣』(図 56) を見ても明らかなように、それらは人物画であるものの背景が詳細に描かれていて、その背景というのはやはり山水なのである。

また、書院間内西側の襖に描かれた西王母東方朔図についても上に示したような画像を掲載することはできないものの、同様に背景である山水が強調されている。そして、さらに考察を深めると、この西王母という人物は中国で紀元前より信仰されている女仙である。そして、峻厳で霊気漂う自然の中にいたとされている。同じく東方朔

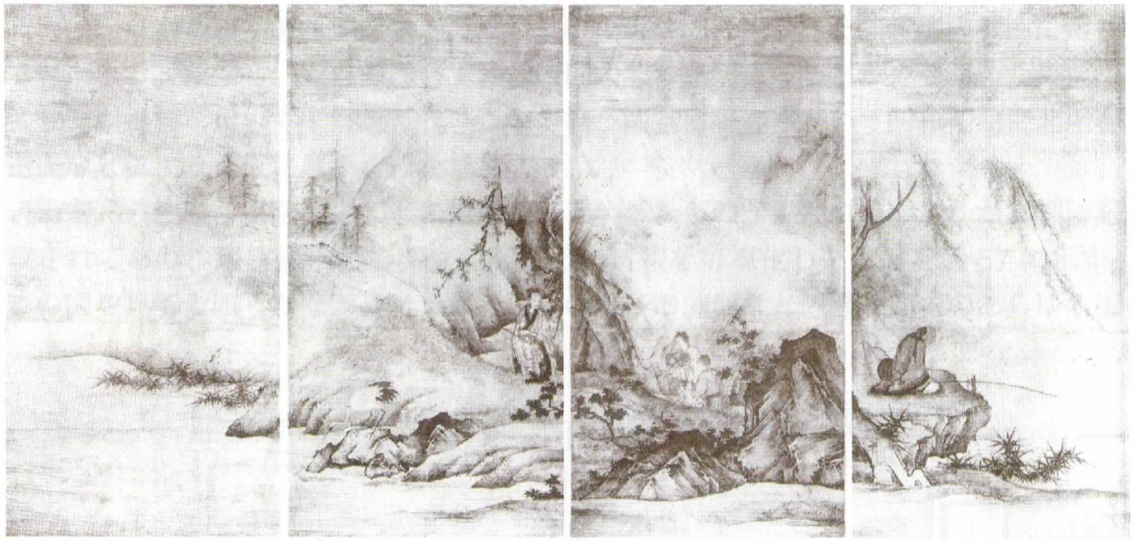

図 55　太公望林和靖図

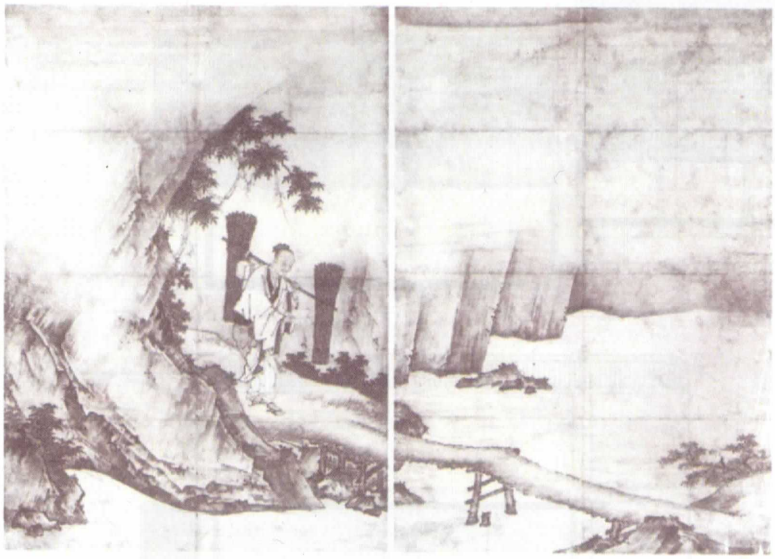

図 56　朱買臣図

も紀元前を生きた人物であるが、後の歴史書などで仙人のように扱われることがあった。

また、先に触れた林和靖も 20 年間西湖の孤山にて隠遁生活を送っていたと言われていた。すなわち、逸民の如く生きた人物を描いているのである。つまり、想像力を逞しく働かせれば、このように山水を愛するものを画題として描くことで、その庭園がより山水らしくなるという、いわばメタファーの強調であったというふうにも考えられないだろうか。

このように考えると、梅岩庵の書院間内に描かれたものに関して、都林泉名勝図会の中には『人物』としか記載されていないが、『西王母』や『林和靖』のように、山水となにか関係のある人物であった可能性も考えられる。

図 55　『日本古寺美術全集　第 23 巻　大徳寺』（集英社　1979 年）より
図 56　『日本古寺美術全集　第 23 巻　大徳寺』（集英社　1979 年）より

次に建立当初の状態が保たれている金地院の書院間に描かれた襖絵、障壁画に関して考察する。ただし、保存の都合上、書院間内部に立ち入ることができないため、やはり文献資料を用いて考察を行う。ここでは、国宝書院図聚という昭和初期に北尾春道氏などにより作成された資料を基にする。

当書籍の中に、書院間内のどの箇所にどういったものが描かれているかが詳細に記載されており、書院間内の展開立面図にその情報を可視化したものを図 57 に示す。この図を見ても明らかなように、武者隠しの格子の隙間など、書院間内のあらゆる場

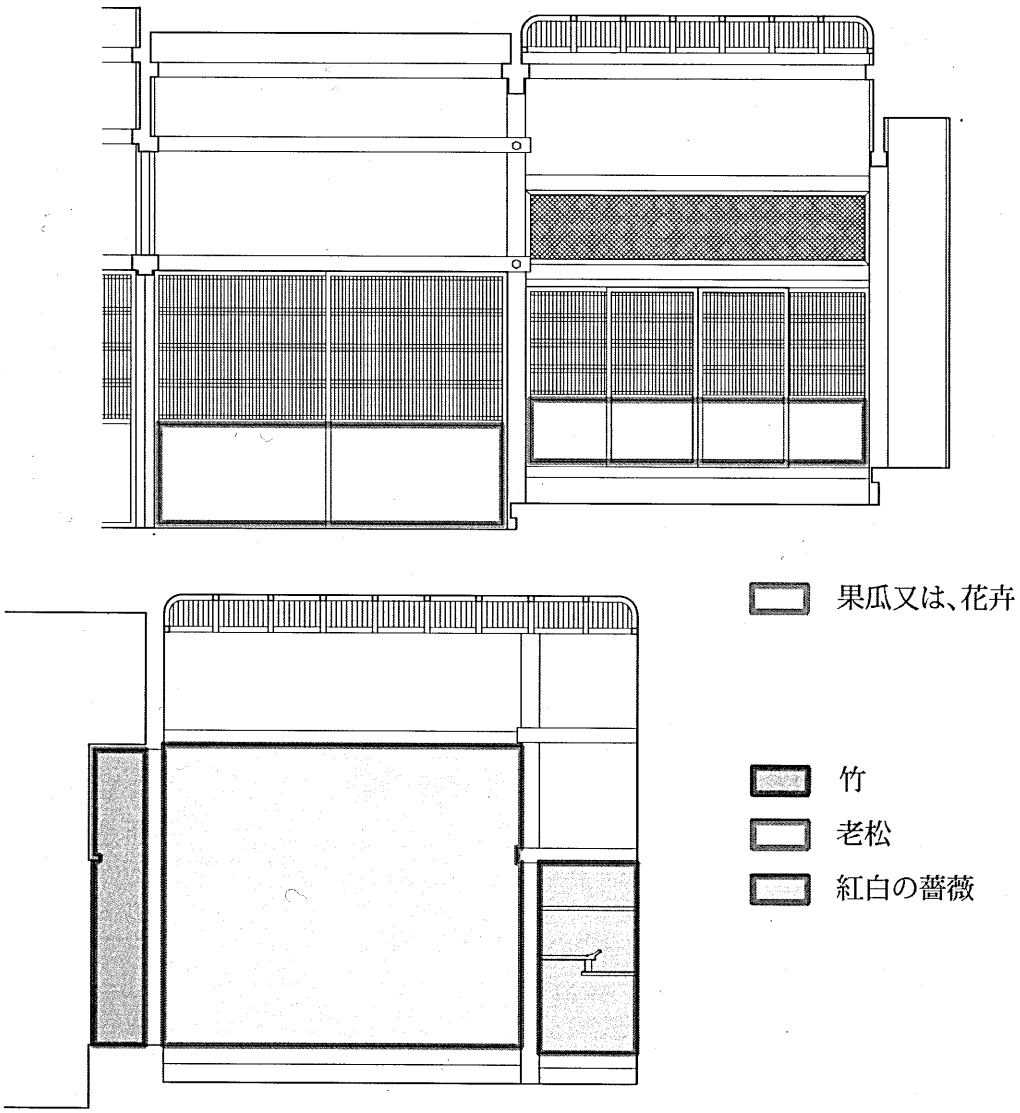

図 57　金地院　書院間展開立面（上 - 西側、下 - 北側）

図 57　北尾春道著『国宝書院図聚』（洪洋社　1938 年）を基に作図

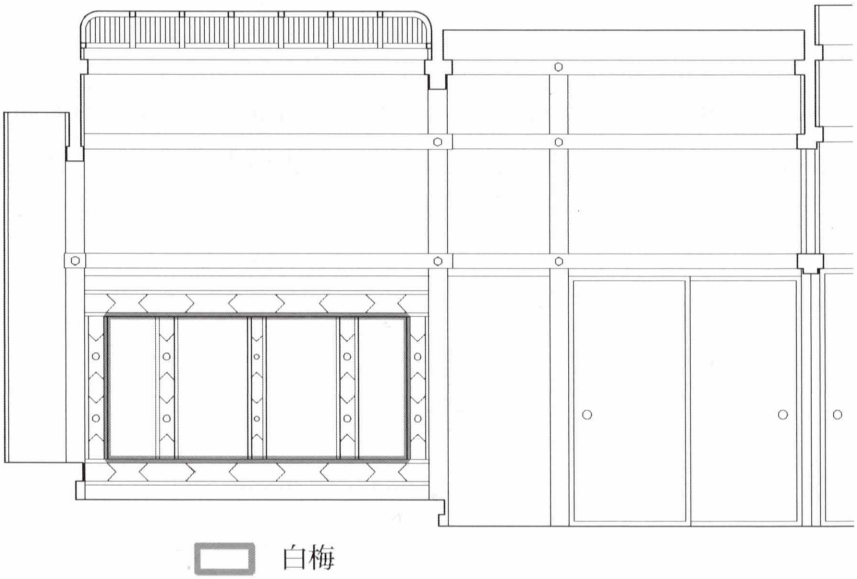

図 57　金地院　書院間展開立面（東側）

所に余すところなく、松と竹と梅が描かれていることが分かる。松竹梅と言えば、現在では縁起のいいものといった認識を持たれているが、かつては格式を示す植物でもあった。なにより金箔の下地にそれらが描かれているということを踏まえれば、建築の部材やその装飾に限らず、障壁までも格式を表現していたことが分かる。

なお、本研究は創建当初の状態を復元的に描き出しながら考察を行うため、建立されてから何年も経ってから描かれたものは対象とすべきではないかもしれないが、一度焼失したり紛失したりした襖絵でもその後に山水が描かれた事例が見られたので触れておく。

前章にも挙げた龍安寺がそれにあたるが、本寺の襖絵は明治の廃仏毀釈の際に全て撤去されたため、現存する襖絵は昭和期に全く新たな画題で描かれたものである。それを見ても、これまで述べてきたように室中などのハレの空間には龍などが描かれているのに対し、書院間には山水図が描かれているのである。そして、現在の書院間内の床と付書院を撮影した写真（図 58）を見

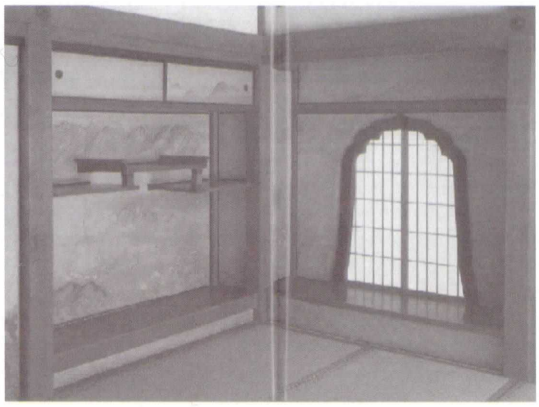

図 58　龍安寺　書院間内部

図 58 『日本の庭園美 4』（集英社　1989 年）より

ても分かるように、床の側面や付書院の下部にも植物が描かれているのが確認できる。

これまで述べてきたことを踏まえると、方丈内の書院間は襖絵という二次元の媒体を以てしても、そこに山水を表現しようとする性質があったようである。

第三章　作庭表現の潮流

序説

本章では、第２章で述べた内容を踏まえながら、各時代においての作庭表現の潮流について論じる。その際に庭園のみに焦点を当てた分析ではなく、庭園と書院間との関係性、建築細部の意匠など、より多角的な視点から分析を行い考察する。

また、各時代の作庭が行われた当時の社会背景なども視野に入れながら、俯瞰的な視点より考察を行う。

3.1 具象的山水への希求

それでは、第2章で述べたことに関して、順を追って整理しながら初期の庭園、具体的に言えば鎌倉時代から室町時代中期までの庭園の意匠について考察する。

まず、南禅院に関しては、これまで行われてきた研究を参照する限りでは、滝石組周辺の箇所など所々に後世の改修が行われているものの、おおまかな部分は鎌倉時代に完成されていたものとして捉えてよいだろう。しかし、方丈が江戸時代の建立であるため、書院間から見た景を鎌倉時代のものとしてしまうのは、いささか問題がある。また、創建当初にどのような建築が建っていたか、その様子を復元できるほどの文献史料も現段階では見つかっていない。しかし、山水の表現の仕方として考えれば、実際の水を用いた池泉を設けて、その背後に存在する山の斜面を景として庭園内に取り込むようにして作庭していたということは間違いない。そして、この様子を概念的に示したものが図59であるが、この図のように庭園を構成させることで、そこに具象性の高い山水を作りだしていたのである。

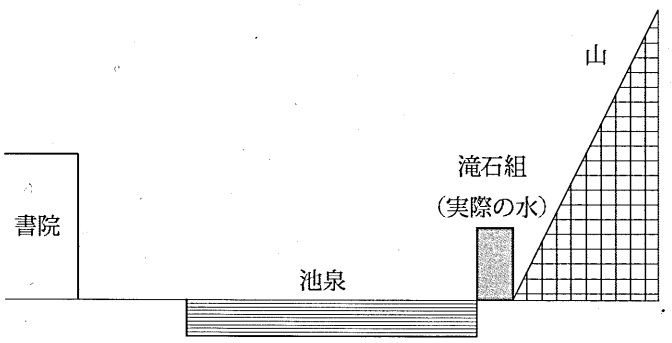

図59　南禅院　断面模式図

西芳寺に関しても、現在の方丈の位置はかつて建立された位置とは異なるため、建築も含めた考察を行うのは困難である。しかし、当時の方丈の北側にはやはり実際の水を用いた池泉が存在した。そして、前章で示した復元図（図10）のように、かつての方丈の中で住持が私的に使用したという御所間に設えられた付書院が西に向いて設置されていたのだとしたら、書院間から見た景に影向石などの石組が収まっていただろう。当時はこの石組に実際の水が流れていたため、付書院越しに見た景には具象的な山水が表現されていたことが推測できる。

等持院も創建当初の方丈は残っていないため、書院間から見た景を正確に特定することができないが、現在建っている方丈北側の庭園に関しては、やはり実際の水を用いた池泉が存在する。そして、その背後には山の斜面が向けられていて、その地形の高低差を以て、北側の庭園に深山幽谷の雰囲気を作り出している。庭園内の植栽の様

子に関しては刈り込みなどが随所に見られるものの、そこには具象的な山水が表現されていたと言える。

この３例に関しては、創建当初の方丈を復元することが困難であるため、書院間から見える景が深山幽谷なるものであったと断言することはできないが、南禅院以外は方丈北側に実際の水を用いた池泉があり、そしてその庭園空間の背後には山の斜面が存在した。つまり、方丈の北側というのは、地形の高低差を以て具象的かつ深山幽谷な山水が表現されていたと推測できる。

天龍寺に関しては、創建当初の方丈は現存しないものの、既往の復元研究によりそのおおまかな配置は明らかになっている。それによると、『集瑞軒』という書院に相当する部屋の中から嵐山を臨むことができたという。すなわち、西側に向いてその書院間があったと考えられる。庭園に関しては、現在は枯渇した枯れ滝が存在するものの、創建当初は実際の水が流れる滝口であったことが古絵図よりも描かれているし、また森蘊氏による湧水の調査からも明らかになっている。そして、その実際の水が流れる滝の背後には、山の斜面とそこに生える多数の樹木が存在したことも前章内図 17 より明らかである。このことを踏まえた上で、創建当初の庭園空間を南北に切断した断面の模式図を図 60 に示す。この図を見ても明らかなように、室内から池泉、滝石組（重ねて言うが、実際の水が流れているもの）、そして背後の山、この順序で構成されている。なお、池泉の作られた比較的広大な空間にも石組は存在するものの、それらは水を流すためのものや、その他には鯉魚石や碧巌石などの宗教的な意味合いを持った石組であった。すなわち、その庭園空間は禅語を説くような暗喩は含有するものの、直接的に山水を示す暗喩のレベルは低く、山水表現という観点から言えば極めて具象的な庭園であったと言える。

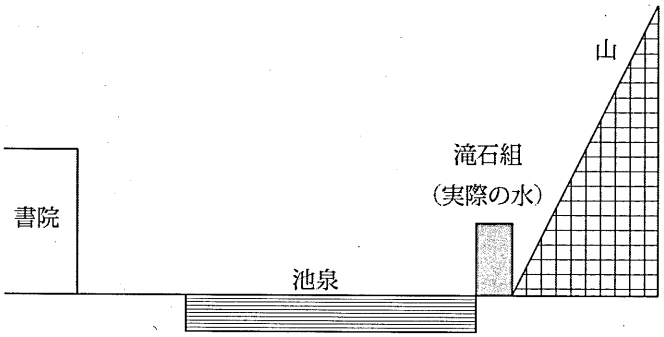

図 60　天龍寺　断面模式図

また、前章では取り上げなかったが、同じ時代に夢窓疎石が作ったとされている恵林寺の庭園にも触れておく。昭和中期に重森三玲氏により実測し作成された平面図を図 61 に示す。この寺院の方丈も創建当初どのようなものであったかは不鮮明ではあるが、この図を見ても明らかなように、やはり方丈の北側というのは実際の水を用い

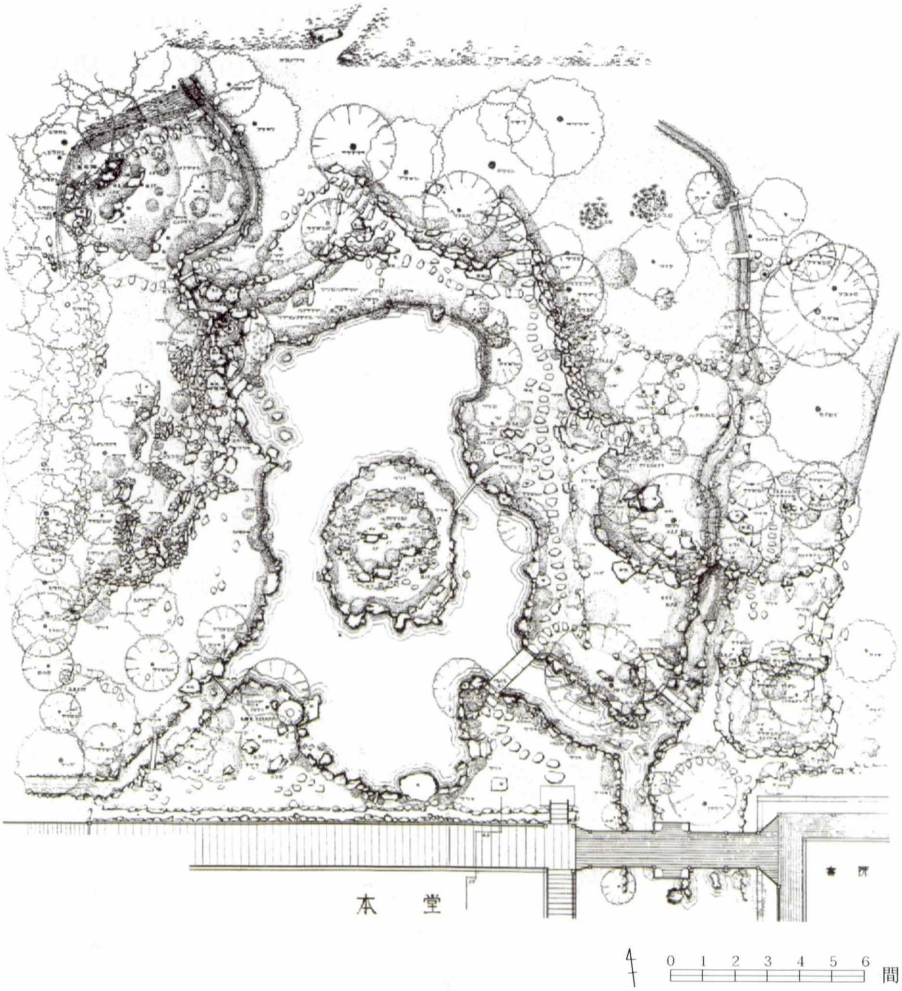

図 61　恵林寺　庭園平面図

た池泉と実際の水が流れる滝口が配されていることが分かる。すなわち、方丈北側の庭園空間には具象的な山水を表現しようとしたのであろう。

そして、夢窓疎石が活躍した時代よりも後になるが、おそらく室町中期頃に作庭されたであろう龍安寺でも同じことが言える。現在の方丈は江戸時代に移築されたものであるし、北側の庭園に関しても、後世に少なからぬ改修の手が加えられていることが推察されるが、しかしこの方丈が立地している場所の地形を見ても、北側の庭園は創建当初からそれほど広い空間ではなく、そして背後の崖により明るさを遮られた深山幽谷な雰囲気を持った庭園空間であっただろう。

これまで述べてきたように、室町時代中期までに作られた方丈北側の庭園あるいは書院間から見える庭園に関しては、実際の水が流れる滝石組、そして池泉を作り、ま

図 61　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 3』（社会思想社　1971 年）より

たその背後には山の斜面とそこに既に存在した樹木群を景として取り込むことで、具象的な山水を表現していたのである。

2.2 山水表現における抽象レベルの飛躍

本節では、室町時代末期に作庭された庭園、具体的に挙げれば大仙院、退蔵院に関して考察する。この２つの書院庭園は、本章第１節で述べた南禅院や天龍寺などの庭園とは明らかに質の異なる庭園空間が表現されている。

もっとも、前章内でも少し触れたが、室町時代中期は本坊の境内に塔頭が乱立する時期である。前章内の図 39 にて示した大徳寺の境内の様子や、また妙心寺の境内の敷地割を示した図 62 を見ても明らかなように、伽藍配置の隙間を埋めるように塔頭が建立されている。なお、退蔵院が建立された時期は妙心寺の東側はほとんど現在と近い状況まで塔頭が密集していたと言えるが、大仙院に関しては大徳寺塔頭の中では比較的早い時期に創建されたものであるため、大仙院の庭園が作られた時期というのは現在に見るような状態まで塔頭が密集していなかったと推測できる。しかし、それでもやはり第一節で述べてきたように山の麓や中腹に作庭するということとは勝手が違ったであろう。退蔵院でも同じことが言え、高低差のない妙心寺内の敷地に作庭をするということであった。このように当時の作庭事情も踏まえた上で考察しなくてはならない。

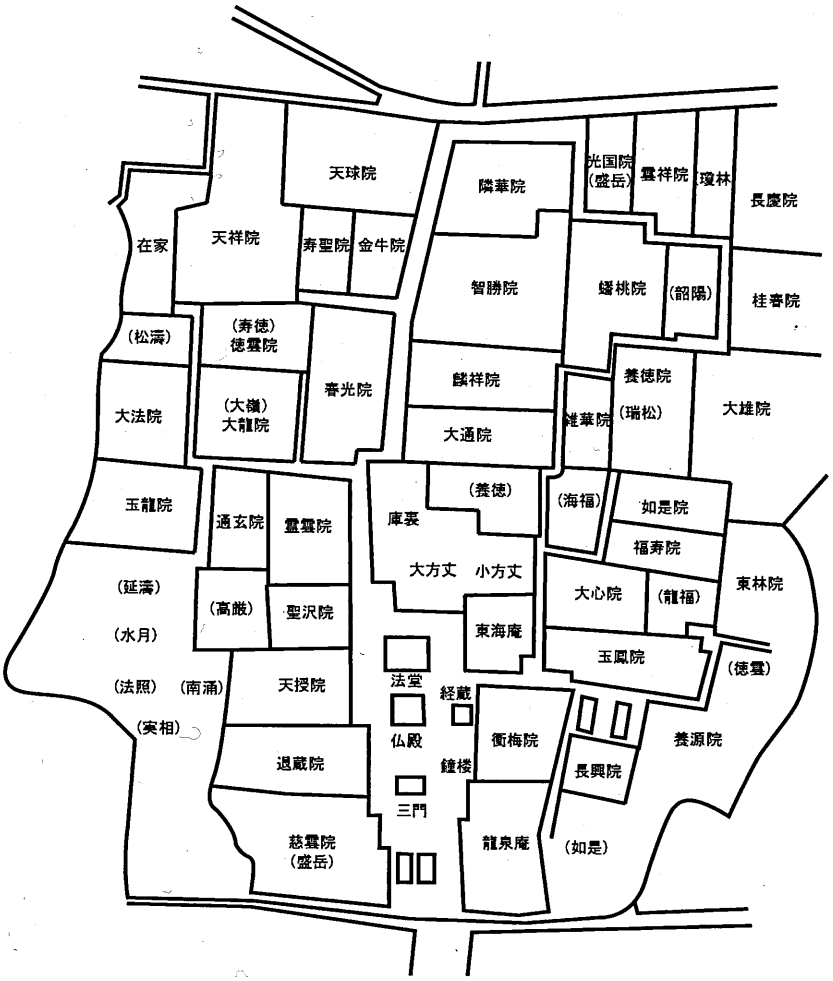

図 62　妙心寺　塔頭配置図

図 62 『日本古寺美術全集　第 24 巻　妙心寺』（集英社　1982 年）所載の妙心寺塔頭配置図を基に作図

まず、大仙院の書院庭園に関しては、前節内で見てきたような実際の水を用いた池泉はなく、また背後に山の斜面もない。その庭園空間は極めて抽象的であり、石組にて滝、白砂にて水の流れが表現されている。つまり、物理的な景の簡素化が図られ、天龍寺などに見られた具象的な山水とは程遠い暗喩的山水が表現されたのである。そして、この書院庭園の断面を概念的に示した模式図を図 63 に示す。この図より明らかであるが、石組は実際の水が流れていない枯滝であり、極めて抽象化された山水が表現されていて、その背後には樹木が植栽されている。この樹木はすぐ背後に位置する築地塀を隠すためのものであった。葉の多く、また常緑樹である椿が用いられている。

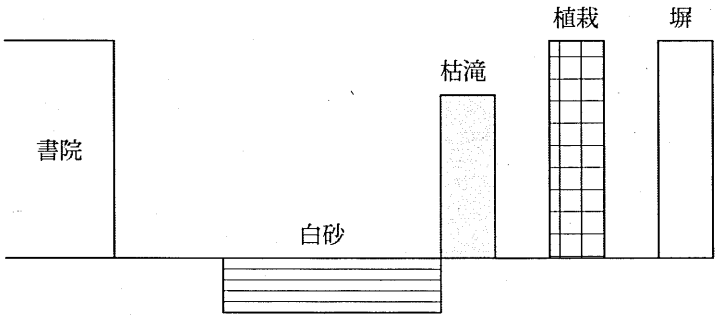

図 63　大仙院　断面模式図

建築においては、北側の納戸（現在は襖が取り払われて床のようになっている箇所）の奥の壁を開閉可能な板戸とすることで、狭小の敷地でも庭園空間を最大限に室内に取り込めるようにしていることが分かる。そしてさらに、庭園の地面に盛り土を施し、加えて床束を短くすることで、物理的にも深山に近づけようとしたのである。また屋根に関しても、方丈北側の軒を約 3 尺張り出させることで、書院庭園に明かりを取り込まないようにしたのである。

このように、見立てというメタファーを以て、景の物理的省略を図るも、建築を操作しながら書院間から見える景を深山幽谷な雰囲気へと近づけようとしたのだろう。

退蔵院の書院庭園に関しても、やはり実際の水を用いずに、石組にて滝、そして白砂にて水の流れが表現され、ここにおいても景の抽象化が見られるのである。建築においては、敷地が大仙院ほど狭小ではなかったためか、大仙院に見られたような庭園を深山幽谷な雰囲気へと近づけるための建築の操作は見られなかったが、やはり付書院から庭園を見た景に滝石組や石橋などが収まるように配置されている。

また、この退蔵院の方丈を東西方向に切断した断面を概念的に示した模式図を図 64 を示す。この図を見ても明らかなように、先ほど述べた滝石組の背後に高木を植栽することで、そのさらに背後にあ

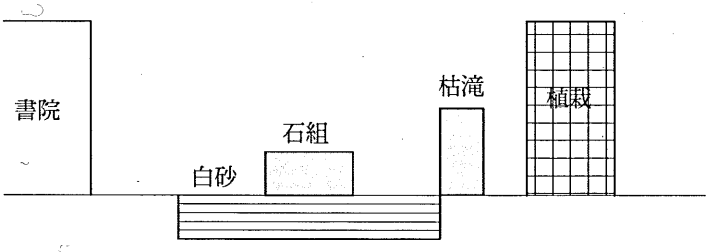

図 64　退蔵院　断面模式図

る塀を覆い隠しているのである。つまり、見立てを以て景の物理的省略を行うも、その背後の植栽を操作することで深山幽谷な雰囲気を作り出しているのである。

このように、室町時代末期に作庭された庭園は、前節で述べた室町中期までに作庭された南禅院や天龍寺などに比べ、具象的でない山水が表現されたものであった。すなわち、ここに作庭表現における抽象性の飛躍が見られるのである。さて、それでは具象的な山水を作り上げていた書院庭園において、なぜこのように抽象レベルを飛躍させることになったのだろうか。

先にも述べたが、龍安寺のようにおそらく大仙院や退蔵院が作られた時期と近しい時代に作庭されたであろう庭園では、抽象レベルの低くない山水を作っていたということを考えると、庭園を作るための敷地が極端に狭かったことや地形の高低差が無かったことなど、立地上の制約も要因の一つであることは間違いないだろう。しかし、ではそもそもなぜこのような山水表現における抽象レベルを高めるという発想を生み出すことができたのか、という疑問が残る。

もっとも、見立てという表現方法に関して言えば、古くからその概念の存在を確認できる。平安時代より伝わる造庭書・『前栽秘抄』（後の時代に『作庭記』と称されるようになる。）の書中にも、それに関する記述が見受けられる。つまり、禅文化が日本で繁栄する何百年も前から、暗喩的要素を含んだ作庭が行われていたということである。それに加えて、天龍寺や等持院などで作られた滝石組を見ても、その兆しを垣間見ることができる。そのため作庭表現において、このような潮流を辿ることは自然と言ってしまえば、それまでなのかもしれない。しかし、その過程を探るべく、室町初期から中期にかけて作られた庭園がどのようなものであったかということにも着目する。

しかし、その時期に作庭された庭園というものは京都では皆無に等しい。なぜなら、当時は応仁の乱の最中であったため、作庭どころではなかったのであろう。そこで、一度京都を離れ、山口、島根などの中国地方に残る禅宗寺院の庭園を見る。

常栄寺

本寺院の庭園は雪舟による初期の作品だと言われている。おそらく文明９年（1477年）頃の作だと言われている。まず、この常栄寺の方丈が立地する敷地について考察する。地形と方丈の位置を示した図65を見ても明らかなように、北側だけでなく東西も山の斜面に囲まれた場所していることが分かる。

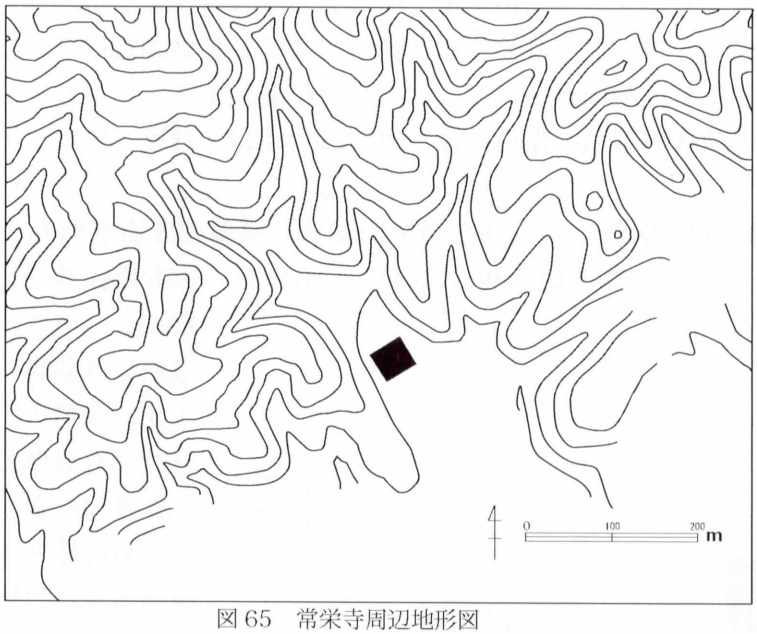

図 65　常栄寺周辺地形図

北庭の様子を撮影した写真が図 64 である。そこには実際の水を用いた池泉があり、その背後には山の斜面とそこに生える樹木が存在することが明らかであるが、本章第一節で述べた南禅院書院庭園などと大きく違う点が、その背後にある山の斜面と方丈の中間に空間が設けられて、しかもそこに石組が多数配されているのである。先にも述べたが、ここは地形の高低差も十分にあるため、方丈をもっと山側に近づければ、図64のような状態より遥かに深山幽谷な雰囲気を作り出すことができたはずである。しかし、敢えてその間に石組を配したのである。さらにそれらの石組というのは、富士山を始めとし、百丈山、終南山、五台山、衡山、嵩山、葺山、蘆山といった山を暗喩する石組なのである。富士山以外は中国において聖山とされる山々であり、その景を庭園に表現しようとしたのであろう。もっとも、この山々は陰陽五行説の思想も含有するた

図 66　常栄寺　方丈北側庭園

図 65　Google map を基に作図
図 66　著者により撮影

め、宗教的な意味を持たないわけではないが、鶴や亀、また天龍寺で見られたような鯉魚石などといった宗教的な意味の強い石組とは異なり、景としての意味を持った石組なのである。すなわち、方丈北側の庭園において、多数の植栽を以て深山幽谷の雰囲気を作り出すものの、それとは別に石を以て山々を描いた景を表現しようとしたのである。

そして、この庭園を南北に切断した断面を概念的に示した模式図を図 67 に示す。そして、天龍寺の断面模式図（図 60）や南禅院の断面模式図（図 59）などと比較すると明らかであるが、この常栄寺の北庭は、書院から池泉やその背後の山の斜面に至るまでの空間に景を見立てた石組が配されているのである。これが、大仙院や退蔵院に見られた山水表現における抽象化の飛躍に繋がっていると私は考えている。

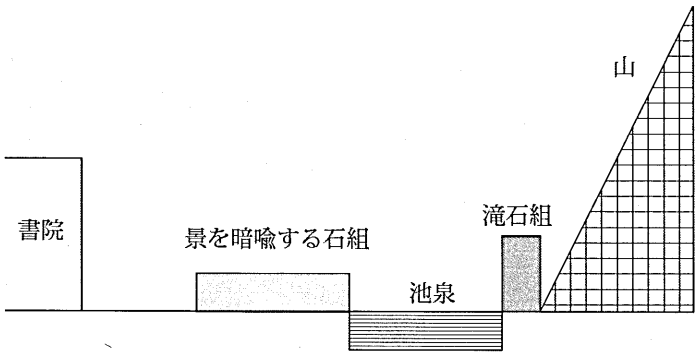

図 67　常栄寺　断面模式図

それでは、他にも同時期に作庭されたであろう医光寺と萬福寺についても考察しよう。

医光寺

この庭園は島根県益田市に位置する。前述した常栄寺と同時期に作庭されたとされている。まず、敷地の性質について考察しよう。この医光寺周辺の地形を示したものを図 68 に示す。この図を見ても明らかなように、やはり方丈の北側は山の斜面に向いていることが分かる。北側の庭園の様子を撮影した写真を図 69 に示す。先に述べた常栄寺の北庭に比べると、それよりは深山幽谷な雰囲気であり、そして方丈から山の斜面までの距離も短い。しかし、池泉内の中島には石組も組まれていることが見受けられる。主観的な意見になるが、この

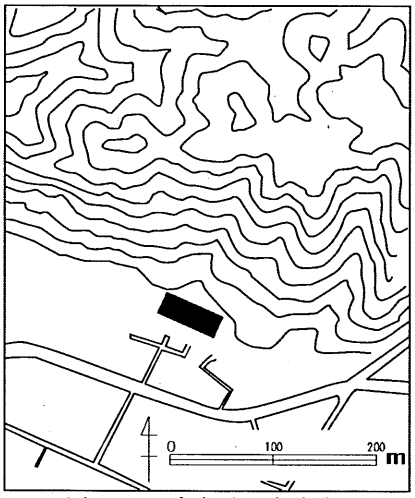

図 68　医光寺周辺地形図

図 68　Google map を基に作図

図 69　医光寺　北庭（現在）

庭園において背後の山の斜面によって作り出される深山幽谷な雰囲気も重要な要素であるが、その中島上の石組にも同様に主体性が置かれているように感じられる。この庭園の平面図を図 70 に示すが、この図からも中島上の石組の存在感が見受けられる。もっとも、南禅院や天龍寺などでも北側庭園に石組を見ることができたが、そこに表現されているものは具象的な山水であったのに対し、この医光寺では実際の水を使った池泉があり、その背後に山の斜面があり、具象的な山水を表現できたものの、その池泉の中島に石組を行うことでも山水を表現しようとした

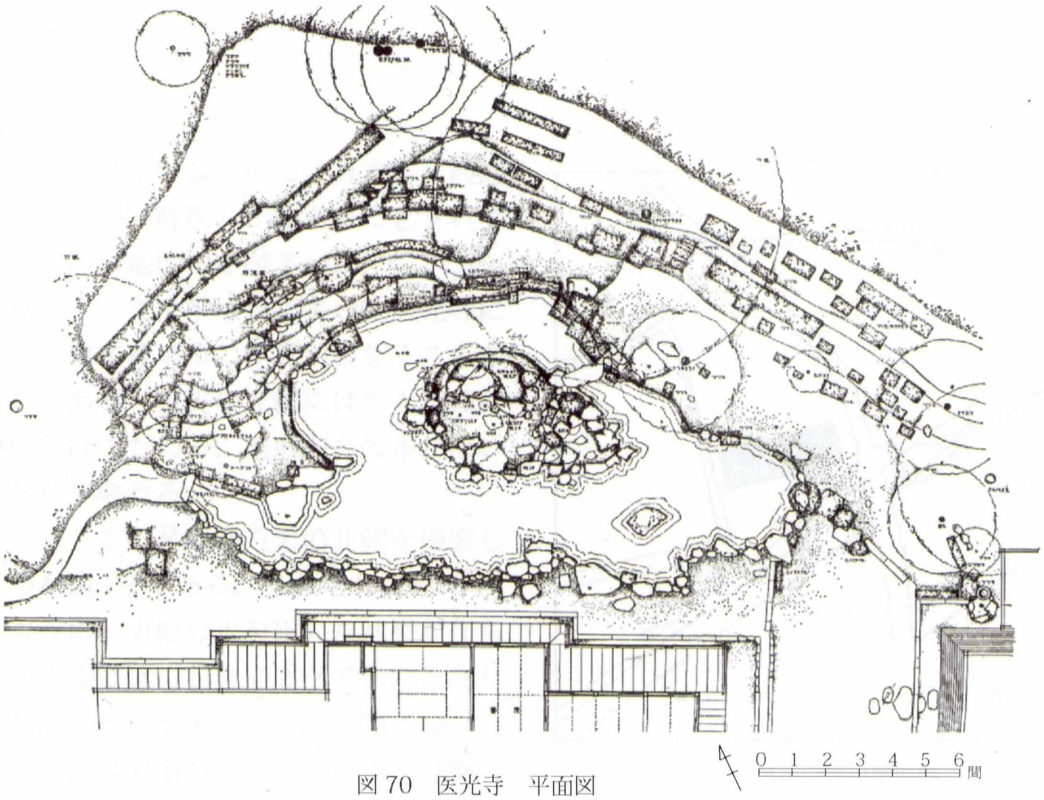

図 70　医光寺　平面図

図 69　著者により撮影

図 70　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 7』（社会思想社　1971 年）より

のである。

また、この庭園を南北に切断した断面を概念的に示した模式図を図 71 に示す。この図からも、背後に山の斜面を取り込むことで深山幽谷な雰囲気を作り出している上に、中島にも石組を以て山水を表現していることが分かる。また、先に示した退蔵院の断面模式図（図 71）と比較すると、実際の水を用いた池泉がないことや、庭園の背後の地形の高低差が異なるものの、その庭園の構成には類似性が見いだせる。そして、両者ともに山の斜面やそこに存在する植栽を以て深山幽谷な雰囲気を作り出すことができたが、そこに石組を組むことでも山水を表現しようとしたのである。

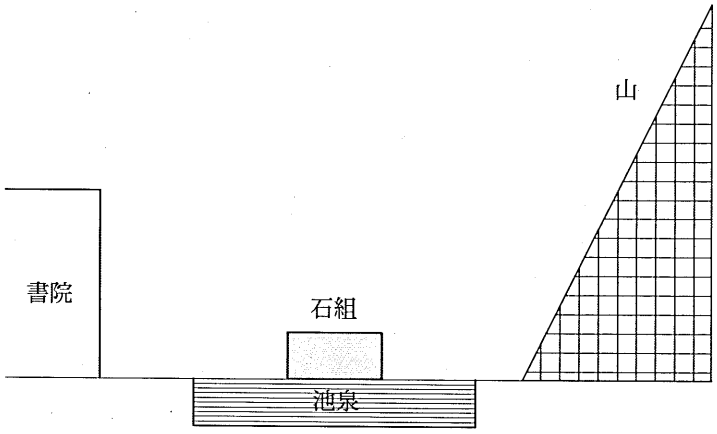

図 71　医光寺　断面模式図

萬福寺

本寺院も島根県益田市に位置する。前述した二事例と同時期に作庭されたとされている。周辺の地形図を図 72 に示す。この図を見ると、先に挙げた常栄寺や医光寺に比べ、立地する場所の性質が異なることが明らかである。方丈の北側には広大な面積の敷地を持つものの、地形の高低差がないことが見て取れる。

そして、この萬福寺方丈の北側を撮影したものが図 73 である。これを見ても明らかなように、実際の水を用いた池泉が作られていることはこれまで述べてきたとおりであるが、その池泉の背後に空間が設けられ、そこには築山が築かれている。庭園の

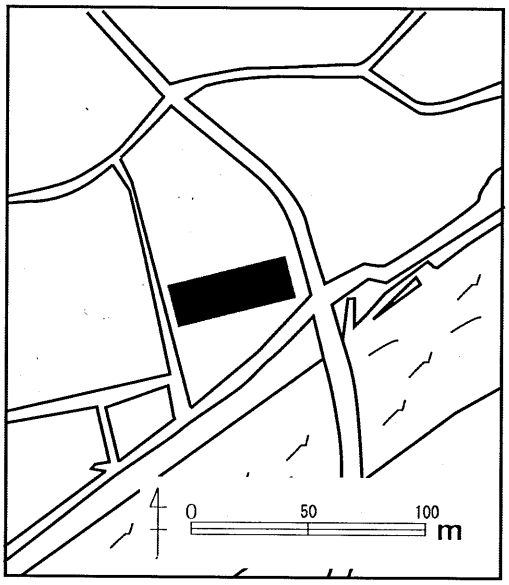

図 72　萬福寺周辺地形図

図 72　Google map を基に作図

図 73　萬福寺　北庭（現在）

敷地面積から考えてもそこに多量の樹木を植栽することで、具象的な山水を作り込むことが可能であったにも関わらず、そのような造作はせずに抽象度の高い要素を組みこんだのである。この庭園の平面図を図 74 に示すが、これを見ても、石組の存在が強調的で、単に具象的なだけの山水ではないことが見て取れる。この石組は須弥山や九山八海を示すものであるため、宗教的な意味合いを含有しないとはいえないが、常栄寺庭園内に配された三山五岳の石組と同様に、鶴亀の石組や鯉魚石といった宗教的な意味合いを持った見立てではなく、それは山であり、景で

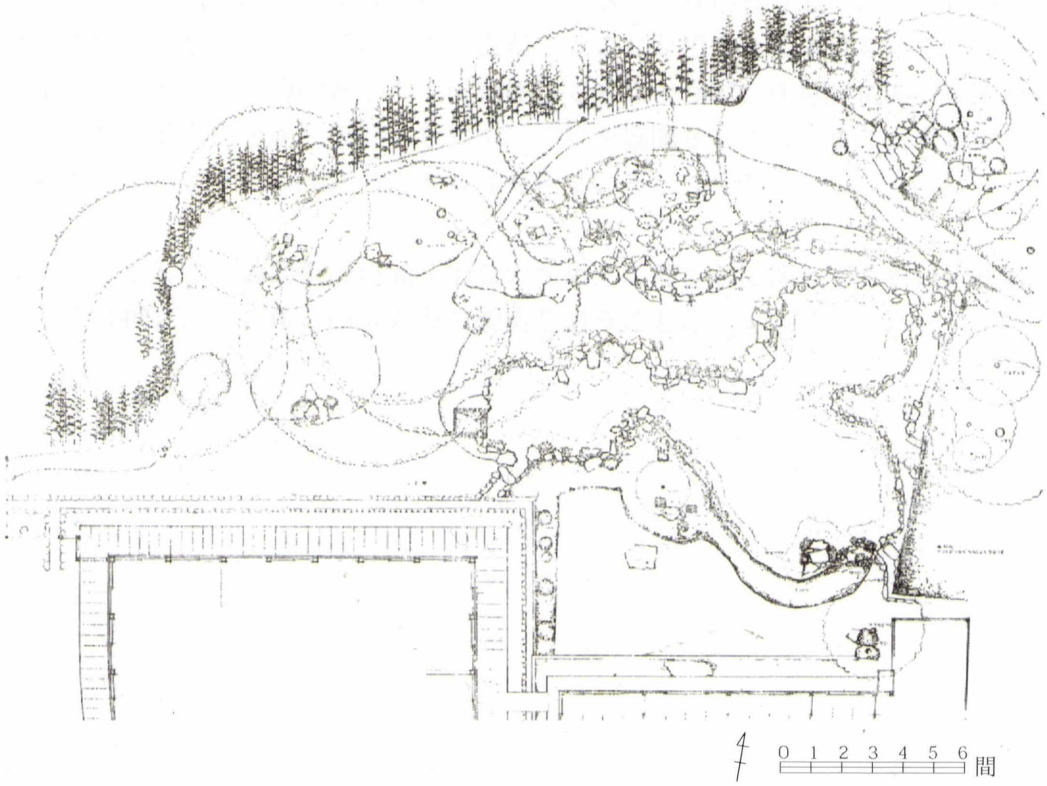

図 74　萬福寺　庭園平面図

図 73　著者により撮影

図 74　重森三玲，重森完途著『日本庭園史大系 7』（社会思想社　1971 年）より

あった。

この庭園を南北方向に切断した断面を概念的に示した模式図（図75）を示す。この図を見ても分かるように、これまで述べてきた具象的な山水とは異なり、景を見立てた石組みを以て山水を表現していたのである。すなわち、高低差のない地にメタファーとしての山水を作りだすということを完遂させたのである。

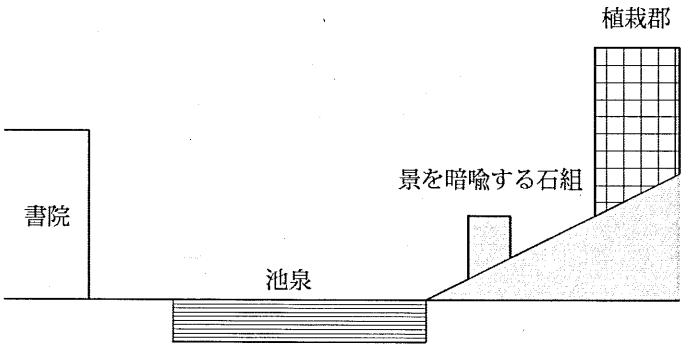

図75　萬福寺　断面模式図

このように、雪舟によって作られた３つの庭園を見ると、そこに具象的な山水を作ることができたにも関わらず、方丈と北側の斜面まで距離をあけて、その空間に石組を配すことでも山水を表現しようとしたのである。

そして、この発想の確立より、後に大仙院方丈の北東側や退蔵院方丈の北西側などの背後に実なる自然が存在しない狭小空間に山水を作り込もうとしたときにも、そこに見立ての石組を築くことで、山水を表現することができたのではないだろうか。

つまり、画家たちが残山剰水の手法を体得できたように、作庭界においても物理的な景の省略、簡素化を図りながらも胸中にて景を展開させるということを意とした空間表現を行えるようになったのだと私は考えている。

さて、しかしこの論は仮説の域を出ないため、このことに関してこれ以上紙幅を費やすことは控え、その後の山水表現の潮流を追うことにしよう。

2.3 方丈の多様化と山水への執着

前章で述べたことを踏まえると、江戸時代以降には、禅院の方丈に禅らしい簡素な意匠とは別の要素が取り込まれるようになっていった。

金地院に関しては床や付書院の他にも、帳台構、違い棚が設えられている。さらに天井は折上格天井で、欄間は筬欄間が用いられている。極めつけは、金箔地に松竹梅の障壁画を描くことにより、格式の高さが表現されている。ただし、この金地院は伏見桃山城を移築したものという説があるため、それにより格式を表現するための部材が随所に見られるということも考えられるが、障壁画に関しては、この金地院が建立されてから描かれたものであるということが明らかになっているため、やはり意としてこのような格式を表現した空間となっているのであろう。

一方で高桐院に関しては、方丈に水屋が併設させ、茶の湯を行うことを主体とした書院間となっている。また、このような機能面だけでなく、意匠の観点から見ても、床柱に製材を行っていない自然調の表面を持った木材を用いたり、また床の部分の天井を網代天井にしたりして、数寄の意匠を取り込むことにより、茶禅一味の精神を表現しているのである。このことを踏まえると、江戸以降に建立された禅院方丈というものは、禅以外の要素を取り込んでいることが分かる。すなわち、建築やその空間が多様化を見せるのである。

また、方丈が多様化するだけでなく、この時代になると方丈南庭に対する意識が変化していくことにも触れておかなくてはならない。都林泉名勝図会を見ると、天龍寺や等持院、大仙院、退蔵院などの鎌倉から室町中期にかけて作庭された庭園は北側（天龍寺は伽藍の配置上東側である。）を対象として描いているのに対し、江戸以降に作庭された南禅寺本坊や金地院などに関しては、図 76、図 77 のように南庭を対象として描かれている。

ただし、この都林泉名勝図会を描いたのは禅宗寺院の研究者などではなく当時の絵師であるため、

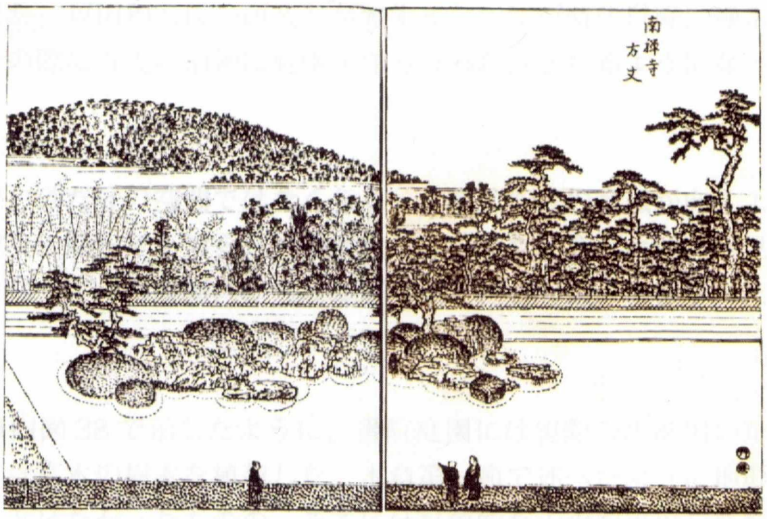

図 76　都林泉名勝図会所載　南禅寺絵図

図 76 『新修　京都叢書』（臨川書店　1968 年）より

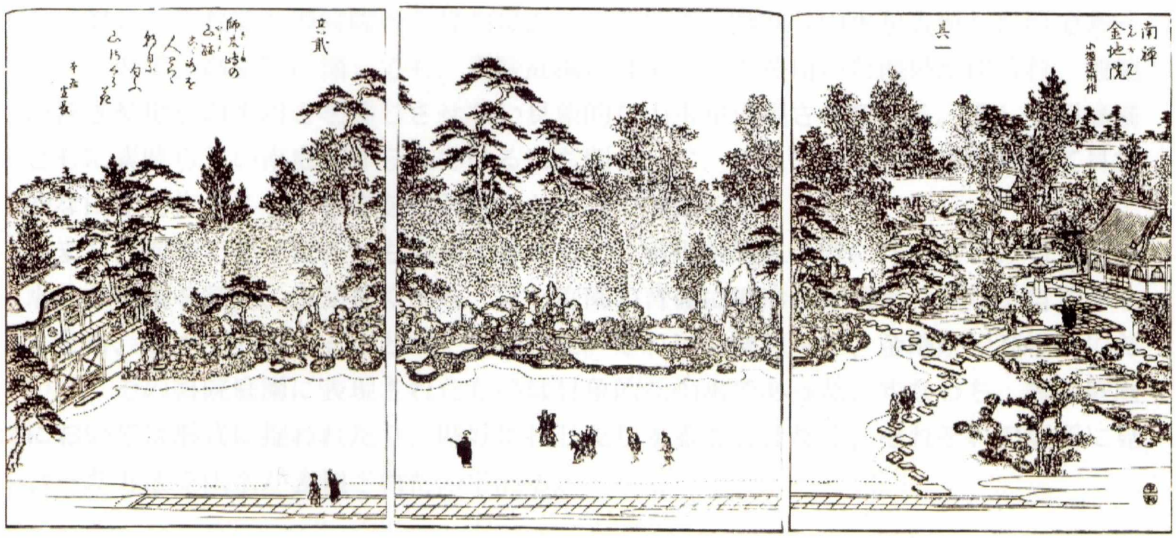

図 77　都林泉名勝図会所載　金地院絵図

当書籍というのは言ってしまえば部外者による評価とも捉えられるが、やはり石組や植栽の様子を見ても、南側は先に述べた室町時代中期のものと江戸時代以降のものでは大きく異なることは明白である。

そもそも、方丈の南側というのは大仙院や龍吟庵のように白砂のみが敷かれた空間であったことがこれまでの研究より分かっている。もっとも、龍吟庵庭園は昭和期に作られたものであるが、もともと白砂のみの空間であったことを踏まえた上で、このように復元したのであろう。それに対して、金地院などでは鶴亀の石組、また南禅寺本坊では虎の子渡しの石組といったように南側にも石組が組まれ、庭園空間として表現されているのである。また、福田和彦氏の研究を参照すると、江戸時代以降に禅宗の寺院制度が改変され、その際に方丈の南側に庭園を作る行為が許されるようになったという見解もある。

さて、このように南庭が白砂だけの空間ではなくなり、そこに作庭の意識が向くようになり、さらに方丈の建築に関しても禅らしい簡素な意匠が薄れ、様々な意匠が見受けられるようになるのに対して、書院間内から見た庭園空間はどのように作られたのだろうか。

金地院に関しては、前章内図 38 で示したように、書院庭園には実際の水を用いた池泉をつくり、その背後には高木の樹木を植栽した。本章第一節で述べたように地形の高低差などを利用することはなかったものの、そこには具象的な山水を表現したの

図 77 『新修　京都叢書』（臨川書店　1968 年）より

である。そして、なによりも建築や障壁画などの全てが格式を表現したものであったのに対し、それでも書院間から見た景というのは深山幽谷な山水を表現したのであった。一方で、高桐院に関しても、書院庭園には実際の水を用いた池泉が作られ、敷地の狭さや地形の平坦さを感じさせない具象的な山水が表現されている。そして両庭園ともに素晴らしい南庭が作られているにも関わらず、それでも書院庭園において具象的な山水を作ることに執念を惜しまなかったのである。

また、前節で述べたことも含めて考えると、室町中期には既に作庭における残山剰水的な表現を覚え、水がなくとも、また庭園の背後に地形の高低差や実なる自然がなくとも、山水を表現することができていた。それにも関わらず、金地院や高桐院において、その書院庭園に表現されたものは具象的な山水であった。すなわち、書院庭園においては形式に捉われたり、時好に投じたりすることはなく、それぞれの場所に見合った方法で山水が表現されたのである。

終章

結論

これまで述べてきたように、禅院方丈内の書院間というのは常に山水を求められた空間であった。その室内の襖絵には山水図を描き、室内から見える景も山水を表現したものであった。しかし、その庭園空間の表現法は各々の時代で相違が見られた。

室町時代中期までは実際の水を用いた滝石組や池泉が作られ、それらの背後に存在する山の斜面を景として取り込むことで具象的な山水を築いていた。そして、室町中期に雪舟により作られた常栄寺の方丈北側の庭園では、具象的な山水が背後にありながらも、その手前側に景を見立てた石組が施された。この発想が、後の作庭に大きな影響を与えたのではないかと推察している。

そして、室町末期になると、大徳寺や妙心寺などの塔頭が密集する敷地に作庭を行うこととなり、そこにこれまでのように実際の水を用いた池泉を作ったり、背景に山の斜面を取り込んだりといった具象的な山水を表現することが不可能となった。そこで、大仙院や退蔵院のような極めて抽象的に山水を表現した庭園が作られた。そして、大仙院に関しては軒を張り出させたり、床束を短くしたり、随所に庭園空間を幽暗な雰囲気に作り上げるための操作が見られた。

その後、江戸時代以降には、金地院や高桐院のような、禅とは別の要素を含有した意匠を施された方丈が建てられるようになり、またこれまでとは違って方丈の南庭にも庭園が作られるようになり、それが主とされる傾向があった。しかも、このとき既に大仙院や退蔵院の庭園に見られたような、作庭における残山剰水的な表現法を覚え、水がなくとも、また庭園の背後に地形の高低差や実なる自然がなくとも、そこに山水を表現することができていた。しかし、金地院や高桐院に関しては、その書院間内から見た景というのは具象的な、そして深山幽谷なる山水であった。

すなわち、禅院方丈内の書院庭園においては作庭の形式に捉われたり、時好に投じたりすることはなく、それぞれの場所に見合った方法で山水が表現されたのである。

参考文献

『家と庭の風景　日本住宅の空間論的考察』 増田友也著　ナカニシヤ出版　1987 年
『神と仏の庭』 伊藤ていじ編　講談社　1980 年
『京の古寺から　6（西芳寺）』 藤田秀岳，大道治一著　淡交社　1995 年
『京の古寺から　13（高桐院）』 松長剛山，井上隆雄著　淡交社　1995 年
『京の古寺から　16（龍安寺）』 松倉紹英，水野克比古著　淡交社　1997 年
『京の古寺から　30（金地院）』 佐々木玄龍，井上隆雄著　淡交社　1998 年
『京の禅寺』 芳賀幸四郎，太田博太郎，玉村竹二著　淡交社　1961 年
『京の名庭』 中根金作著　保育社　1963 年
『京都・激動の中世　帝と将軍と町衆と』 京都文化博物館編　京都文化博物館　1996 年
『京都府の近世社寺建築』 京都府教育庁文化財保護課　1983 年
『京都名庭百選』 中根金作著　淡交社　1999 年
『近畿地方の近世社寺建築』 京都府教育委員会編　東洋書林　2002 年
『建築と庭』 西澤文隆著　建築資料研究社　1997 年
『建築史　第一巻』 建築史研究会　吉川弘文館　1939 年
『建築史　第二巻』 建築史研究会　吉川弘文館　1940 年
『建築史　第三巻』 建築史研究会　吉川弘文館　1941 年
『建築史　第四巻』 建築史研究会　吉川弘文館　1942 年
『建築史　第五巻』 建築史研究会　吉川弘文館　1943 年
『建築文化再見 4　庭：三つのかたち』 伊藤ていじ著　淡交社　1984 年
『古都百庭』 重森三玲著　京阪電気鉄道　1942 年
『故実業書　第二回』 故実業所編集部編　吉川弘文館　1951 年
『五山と禅院』 関口欣也著　小学館　1983 年
『国宝書院図聚』 北尾春道著　洪洋社　1938 年
『国宝大仙院本堂附玄関修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課　1961 年
『作庭記』 田村剛著　相模書房　1964 年
『山水思想』 松岡正剛著　筑摩書房　2008 年
『山水並野形図・作庭記』 上原敬二編　加島書店　2006 年
『実測 日本の名園』 重森三玲著　誠文堂新光社　1971 年
『重要文化財退蔵院本堂附玄関修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課　1974 年

『書院』 藤岡通夫，恒成一訓著　創元社　1969 年
『書院と民家：間と礼の演出』 伊藤ていじ編　講談社　1983 年
『書斎の宇宙』 村松伸著　INAX 出版　1992 年
『匠明』 伊藤要太郎校訂　鹿島出版会　1971 年
『匠明五巻考』 伊藤要太郎校訂　鹿島出版会　1971 年
『寝殿造系庭園の立地的考察』 森蘊著　養徳社　1962 年
『新講大日本史 18　日本美術史（下）』 森蘊著　雄山閣出版株式会社　1939 年
『図解　庭師が読みとく作庭記』 小埜雅章著　学芸出版社　2008 年
『図集 日本都市史』 高橋康夫編　東京大学出版会　1993 年
『図説　日本庭園のみかた』 宮元健次著　学芸出版社　1998 年
『禅と禅芸術としての庭』 枡野俊明著　毎日新聞社　2008 年
『禅院の建築　禅僧のすまいと祭享』 川上貢著　中央公論美術出版　2005 年
『造園雑誌　Vol.51 No.5　研究発表論文集 6』 日本造園学　1988 年
『造園雑誌　Vol.55 No.5　研究発表論文集 10』 日本造園学会　1992 年
『大徳寺』 川上貢解説　新潮社　1992 年
『中世の建築』 太田博太郎　彰国社　1957 年
『中世住居史：封建住居の成立』 伊藤鄭爾著　東京大学出版会　1973 年
『中世庭園文化史』 森蘊著　奈良国立文化財研究所　1959 年
『築山庭造伝（後編）』 上原敬二編　加島書店　2008 年
『築山庭造伝（前編）』 上原敬二編　加島書店　2008 年
『月と日本建築』 宮元健次著　光文社　2003 年
『庭園論Ⅱ』 西沢文隆著　相模書房　1976 年
『日本の建築 3』 伊藤延男，太田博太郎，関野克編　第一法規出版株式会社　1977 年
『日本の国宝　11-20』 朝日新聞社　1997 年
『日本の国宝　61-70』 朝日新聞社　1998 年
『日本の障壁画　室町－桃山編』 真保亨編　毎日新聞社　1979 年
『日本の庭園』 森蘊著　河原書店　1950 年
『日本の庭園』 進士五十八著　中央公論新社　2005 年
『日本の庭園美 1　西芳寺』 井上靖監修　集英社　1989 年
『日本の庭園美 4　龍安寺』 井上靖監修　集英社　1989 年
『日本の庭園美 5　大仙院』 井上靖監修　集英社　1989 年
『日本の美術　第 34 号　～日本庭園とその建物～』 森蘊著
『日本建築史基礎資料集成 16　書院 2』 太田博太郎編　中央公論美術出版　1974 年

『日本古寺美術全集　第23巻　大徳寺』 太田博太郎監修　集英社　1979年
『日本古寺美術全集　第24巻　妙心寺』 太田博太郎監修　集英社　1982年
『日本史小百科　～庭園～』 森蘊著　東京堂出版　1993年
『日本中世住宅の研究』 川上貢著　中央公論美術出版　2002年
『日本中世住宅史研究　とくに東求堂を中心として』 野地脩左著　臨川書店　1981年
『日本庭園学会10周年記念論文集』 日本庭園学会　2003年
『日本庭園史大系3』 重森三玲，重森完途著　社会思想社　1971年
『日本庭園史大系4』 重森三玲，重森完途著　社会思想社　1974年
『日本庭園史大系6』 重森三玲，重森完途著　社会思想社　1974年
『日本庭園史大系7』 重森三玲，重森完途著　社会思想社　1971年
『日本庭園歴覧辞典』 重森三玲著　東京堂出版　1974年
『日本の名庭』 福田和彦著　社会思想社　1964年
『日本美術工芸491』 日本美術工芸社　1978年
『日本美術工芸493』 日本美術工芸社　1979年
『日本美術全集13　禅宗の美術　禅院と庭園』 川上貢，吉川需編　学習研究社　1979年
『庭と空間構成の伝統』 堀口捨己著　鹿島研究所出版会　1977年
『美術フォーラム21　No.518』 中央公論美術出版　2007年
『文化財講座日本の建築』 伊藤延男編　第一法規出版　1977年
『都林泉名勝図会：京都の名所名園案内』 秋里籬島編　講談社　2000年
『都林泉名勝図会』 秋里籬島著　臨川書店　1968年
『都林泉名勝図会』 櫻井庄吉編　日本随筆大成刊行會　1928年
『室町時代庭園史』 外山英策著　株式会社思文閣　1934年
『瞑想と悟りの庭：枯山水と禅院建築』 大岡信，川上貢編　新集社　1989年
『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』 京都市埋蔵文化財研究所　1978年

謝辞

まず本研究を遂行する上で常に的確な助言をくださった高村雅彦教授、それに加え、本論文副査において、論点をより明確にするための助言をくださった陣内秀信教授、富永譲教授、そして木造建築の知識を授けてくださった古川修文元教授には深謝の意が絶えない。

また、各寺院や塔頭を拝観させていただく際に、それらに関する知識を授けてくださった寺院関係者の方々にも同様に深謝の意を表す。

さらに、本研究を遂行する際に様々なことで助言をくださった陣内研究室所属の樋渡氏、そして古書の解読に努めてくださった同研究室所属の鶴見氏にも、この場を借りて深謝の意を表したい。

加えて、本論文の構成において的確な助言を施していただいたことに関して高村研究室所属の高道氏、金谷氏、川野氏、堀氏、そして図面作製において労力を費やしていただいたことに関して越前氏、寺田氏、仲原氏、また高村研究室に所属する先輩方、後輩達、そして研究生活において関わった全ての方々に謝意を表す。

田中聡恭